

51-24-49

たれは表に句自

芭蕉人問學

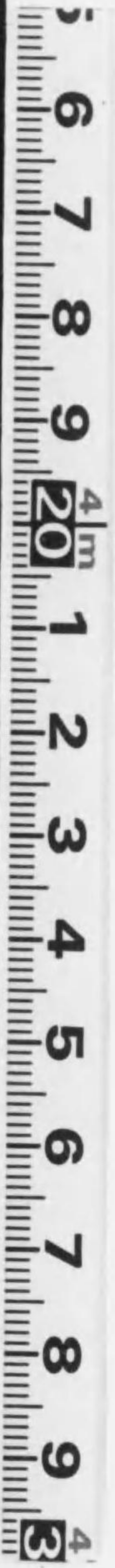
著 舟 紫 藤 加



行刊・莊文峯社版出本日大・京東

911.32
KA866

X
複写



始



たれは表に句自

911.32
KA866

學問人蕉芭

著舟紫藤加

×
複写



行刊・莊文峯社版出本日大・京東

たれは表に句自

芭蕉人問學

著 舟 紫 藤 加



行刊・莊文峯社版出本日大・京東

69

911.32
KA.866



芭蕉像「小川破笠画」翁背像「笠筆・右下」木形坐禅像
 盛岡長松寺秘藏「中」坐像「杉模風陣和筆」上左
 行脚像「釋蝶夢筆」下左

芭蕉人間學

目次

芭蕉と女性

芭蕉と金錢

敬神崇佛

芭蕉の嗜好物

喜怒哀樂

師弟關係

容貌體格

芭蕉の愛國心

一

二〇

四四

四五

八五

一〇一

一三一

一三五



903
121

芭蕉人間學

加藤紫舟著

芭蕉と女性

客「芭蕉は一生獨身で通したやうですが、女性とはどんな交渉を持つて行つたでせうか。殊に若い時代の芭蕉には戀とか愛とかいつたものがなかつたでせうか」

主人「それは大有りです。芭蕉の生涯を通じて最も重要視される故郷出奔が、折も折二十三歳若しくは二十四歳の青年時代であつたために、大抵は婦人關係のために通世したものであると見做されてゐます。事實は主君蟬吟公の早世などが大いなる原因をなしてゐるでせうが。さういへば芭蕉も随分悪い籤を引いたことになりませんが、といつて火の無いところからは煙の立ちようがありませんから、女性關係を全然否定してしまふことは出来ません。その問題とされてゐる女性關係、所謂女色關係に

○ 芭蕉の人生觀……………	一四
○ 芭蕉の社會觀……………	一七
○ 芭蕉の洒落……………	一九
○ 芭蕉の膽力……………	二〇
○ 芭蕉と妖怪……………	三〇
○ 七部集問答……………	三三

は次のやうなものがあります。

イ、芭蕉が十九歳の折、蟬吟公夫人の侍女と密通したといふ冤罪を蒙つたために、主家を出で、それから後故郷を脱出したといふのです。

ロ、主君の花見に陪して、ふとしたことから袴を損じた。これを芭蕉の親戚の侍女が繕ふてくれたのです。ところがこれを同僚に發見されて、主君に告げられたために侍女は處置に苦しみ、思ひ詰めた揚句に入水自殺した。芭蕉はこのことを非常に悲しみ、やがて無常を感じて遁世したと云はれてゐます。

ハ、蟬吟公の死後相續争ひが起つた時、芭蕉は當時一歳なる主君の子良長を擁して蟬吟公夫人に加擔したため、未亡人との醜聞を傳へられ、遂に厭世觀から遁世したといふことです。

ニ、芭蕉の實兄半左衛門の妻、即ち嫂との間に醜關係があつたため、故郷から遁走せざるを得なかつたといふのです。

こんなに多く女性に關係した噂を持つてゐるのです」

客「それは偉人に絡む虚説ではないでせうか。それにしても孰れが本當らしい説なのでせうか」

主人「これから私一流の觀察を下してみます。但し獨斷では危険ですから、各研究家の説を斟酌する

ことはいふまでもありません。第一に侍女との關係ですが、芭蕉は藤堂家に奉公中蟬吟公の寵愛を得たといふものゝ、もともと身分の卑しい家柄に生れてゐるのですから、侍女と口をきくやうな機會は滅多に與へられなかつたらうと思はれます。大體芭蕉は料理方の仕事を擔當してゐたのですから、始終勘定部屋の方に廻つてゐたわけです。それを考へても、侍女と戀を囁くなどといふことは、恐らく有り得べからざることとせう。但し勘定部屋近くの女中との關係、さういつたことはあつたかもしれません。

次に袴の綻びを縫つて呉れた侍女との關係ですが、これも先に申述べたやうに、侍女と云つては大袈裟過ぎます。又果して花見の宴で袴を破つたといふやうなことがあつたかどうか、それさへはつきりしないことです。矢張り、であつたらう位の噂か、或ひは作りごとかもしれません。

次には蟬吟公未亡人との醜關係如何に就いて話を進めてみませう。當時蟬吟公の遺子は只の一歳でしたから、止むなく蟬吟公の弟良重が嫡子となつて、家督を相續することになつたのです。そして未亡人はこの良重に再婚したのです。それ故に芭蕉と未亡人との醜關係などは、想像されようもないではありませんか。殊に未亡人は謹嚴なる城代采女家から、蟬吟公の後妻に入嫁した女で、假りにも芭蕉との間にいまはしい關係のあるやうなことが噂されたら、周囲が許さず、良重との再婚などは到底

成立しようがありません。従つてこの噂は、後人の捏造したものと見て見捨て、よろしいでせう。

その次は嫂との関係が眞なりや否やといふことになりませんが、郷里伊賀の兄夫婦には子供がなく、そのために芭蕉をして相續人にさせようとさへしてゐたやうです。而かも芭蕉は旅すがら、幾度となく親しく故郷を訪うてゐますし、又兄弟仲に至つては人も羨むほどの睦しさを示して居ります。さうしてみると嫂との関係は、どうしても信じられません。」

客「さうすると芭蕉には、女性関係がなかつたといふことになりますか」

主人「いやいや、これからが問題の本筋に入らうとするところです。今申上げたことは、在來の説が本當らしく思はれないと云つたのです」

客「一つ本當らしいところをお聞きしたいものです」

主人「先づ簡単に云へば、女中との関係があつたやうです。所謂侍女との関係云々は、この女中との関係が誤傳されたではないかと思ひます。あなたも御承知のやうに、芭蕉が息を引取るまで氣にかゝつてゐた女性、そして遺言まで残した女性に壽貞尼といふのが居りませう。この女こそ芭蕉が若い頃に關係した女中であつたらうと思ふのです。こんなことが残つてゐます。芭蕉の愛弟子野坡の門人である風律の「小ばなし」といふ本の中に、野坡の話した言葉として「壽貞は翁の若き頃の妾にしてと

く尼になりしなり」とあります。勿論これが事實であるかどうかは疑はしいものですが、芭蕉が旅に出てゐる間などは、女房然として深川の芭蕉庵を守つてゐるではありませんか。それからパトロンである鯉屋杉風に宛てた書簡に、折々御來庵を願ひたいと思ふが、壽貞が病氣のためにお茶さへも差上げられない次第である、と芭蕉は恐縮がつてゐます」

客「芭蕉の行脚中は芭蕉庵を留守居し、しかも普段同棲してゐるといふやうなところを見ると、どうしても女房ですね、私にも妾説が成程とうなづけれます。併しよく旅に出かけ、家を顧みないといふのは、どういふわけでせう。壽貞を妾同然にしてゐるなら、もう少し家といふことに就いて、執着がありさうなものです」

主人「それに就いては、一寸異説めいてはゐますが、申上げなければならぬことがあります。芭蕉は行脚に出るとき、道祖神の招きに應じてといひ、又、旅に憑かれて止むに止まれず行脚に出るのだ、といつてはゐますが、その實は、壽貞の病氣に氣を腐らし、居ても立つても居られぬので、一つ氣晴らしにといふやうな心から、旅に出かけてゐるのです。かうしてみると、妾壽貞に對する芭蕉の氣持も、更によく理解出来るではありませんか。若しも壽貞が芭蕉と深い關係のない女でしたら、芭蕉とて執着がないわけだから、たとひ病氣になつても、至極簡単に事が済むわけです。或ひは適當な醫療

を施してやるなり、或ひは親切な人に依頼するなりして、苦痛から離れることも出来た筈です。それにも拘らず、愈よもつて堪へられない煩惱に打沈むといふのですから、その関係が並大抵のものではなかつたらうと想像されます。即ち執着が餘りに甚だしかつたからこそ、反對に無執着の行動をとらしめたのです。言ひ換れば、壽貞の病氣が氣になるあまり、やがて見るに堪へられなくなつて、ぶいと旅に出たといふやうな始末であります」

客「壽貞は、壽貞尼と云はれてゐますところを見ると、尼ではありませんか」

主人「さうです。芭蕉も行脚中郷里伊賀にて、尼壽貞が身まかりけると聞いて、といふ前書のもとに―數ならぬ身となおもひそ玉祭―といふ追悼句を作つてゐます」

客「尼が俗人芭蕉の妾になつてゐるとは、どうも腑に落ちないですが…」

主人「尼といつてもそれほど厳格な尼ではなく、恐らく有髪の尼だつたのでせう。即ち正式に嫁することが出来なかつたため、一時尼になり、それから再び芭蕉との交渉が再燃したといふやうなところであらうと思ひます。こんなわけですから、芭蕉とて正式に娶ることも出来ず、遂に半俗半僧の生活態度を採ることになつてしまつたでせう。これと同様に壽貞尼の方も、尼であるやうな、尼でないやうな女で通したわけでありませう」

客「なぜ妾なら妾、女房なら女房、とはつきりさせなかつたでせうか。まさか正式でなければ體裁がわるかつたから、といふやうなことでもないでせうか」

主人「そこは芭蕉の巧みなる生活手段といひませうか、勿論妾ともつかず、女房ともつかずに置いたところが、芭蕉の上手なところでせうな。はつきりしてをかなかつたため、精神的に、物質的に、芭蕉が如何に有利な立場にあつたかは、今更論するまでもないこととせう。妻帯してゐないといふことは、芭蕉自身が氣輕であるばかりでなく、門人及び其の他の人々には、常人以上の存在であるかのように思はしめたのです。又未亡人園女や其の他の女性との交渉に於ても、獨身の芭蕉といふことであるために何の問題も起らなかつたのです。或ひは門人其の他の人々から物品を貰ふにしても、或ひは世話になるにしても、常に獨身であるといふために、好都合に運んで行つたわけです。わけでも俳諧宗匠の地位に一段の光りを添へたといふのは、芭蕉の場合に於ては、全く半俗半僧の生活を持續したからである、ともいふことが出来ると思ひます」

客「芭蕉が壽貞の死に際しての嘆きは、どのくらゐの程度だつたでせうか」

主人「それは先に申上げたやうに、旅中に在つて、直ちに追悼の句をものし、無仕合せな壽貞であつたわい、といつてひどく落膽悲傷してゐます。尙ほそればかりか、壽貞の父母及び家族のことまで案

じ、書簡をこま／＼と杉風の甥松村猪兵衛に送つてゐます。それから芭蕉の遺言であります、支考が書き取つた遺言の一節には、こんなことがあります。

伊兵衛に申候、當年ハ壽貞事ニ付、いろ／＼御骨折面談ニ御禮と存候所、無是非事ニ候、残り候二人之者共、十方を失ひうるたへ可申候、好齋老など御相談被成可然了簡可有候

こゝで二人の者共とは、壽貞の父理兵衛と母おふうのことでありませう。そして好齋老は深川の隠者で、芭蕉の知己であります。芭蕉はこの遺言を見てもわかりますやうに、自分の死後、壽貞の両親がどうして生活をするか、それが氣になつてならなかつたと見えます。自分の俳諧と、今後の蕉風とだけが氣になつて、それを遺言して死んで行つた芭蕉がよいか、それとも右のやうに、壽貞の両親の事まで遺言して死んだ芭蕉がよいか、その是非は一概に論じ盡すことが出来ないでせう。但し、芭蕉も人の子人間であつた、といふ點に於ては、右の遺言を矢鱈に排斥すべきではあるまいと思ひます。それやこれやを考へ併せてみても、假令嚴然たる資料はないにしても、壽貞が芭蕉の妾であつたらうといふことは、殆んど疑ふ餘地を與へぬところでありませう。

客「ときに壽貞は芭蕉の乳母であつた、といふ説にしばしば出會しますが、それはどうして否定なさいますか」

主人「大體乳母説を支持するのは、壽貞の子次郎兵衛が語つたと噂されてゐる「次郎兵衛物語」なる書を信ずるからであります。この書はなかなか面白くは書いてゐますが、誤謬だらけといつてよいから、年代は勿論のこと、芭蕉の行状も所々間違つてゐます。従つて信賴するに足らぬ書であることは、いふまでもありません。それに芭蕉の家は、乳母を雇ひ入れるだけの餘裕もなかつたと見なければなりません。所謂俳聖芭蕉のために、私としても妾説を排して、この乳母説に従ひたいところが、餘りに資料が貧弱であるばかりでなく、全く辻褃が合はないといふところから、斷じて賛同するわけには参りません」

客「これで腑に落ちなかつた一面が、漸く明らかにされたやうな氣がします。壽貞はこれで切り上げまして、次には園女との關係を承りたいと思ひます」

主人「園女との關係といひますと」

客「つまり芭蕉は、園女とどんな親交を續けて行きましたかについて。時に園女は獨身者だつたでせうか、それとも人妻だつたでせうか」

主人「未亡人です。併し芭蕉との交渉が人妻時代からあつたかどうか、その點ははつきりしません。

園女は伊勢山田の醫師斯波一有(渭川)の妻であつたが、若くして夫を失ひ、後眼科醫を業としてゐ

たといふことです。渭川は生前俳諧に遊んでおりましたから、夫の感化といふやうなわけで、園女も俳諧に嗜みがあつたものです。それが夫の死後は、淋しさを打忘れようとしてかどうか、俄かに俳諧に身を沈めるやうになりました。この邊から芭蕉との交渉、といつて別段あやしい關係ではなく、師弟の關係が生じたものと考へられます。

芭蕉が園女に俳諧を教へる、園女が芭蕉に俳諧を學ぶ、何も不思議なことではないでせう。女が俳諧を學んでいけないといふ法はないのですから、何等問題となるべき節のものでもありませんまい。それにも拘らず芭蕉が疑はれる。こゝが問題です、そこには底があるから、と云はねばなりません。それではその底を索つてみませう。

貴方も御承知であるやうに、芭蕉は蕉門の俳人に向つて「女性の俳友にしたしむべからず、師にも弟子にもいらぬことなり」といつてゐるではありませんか」

客「左様、「俳諧控」に説いてゐます」

主人「其處です、女性の俳人と親しんではいけない、師にも弟子にも必要のないことだ、といつてゐる本人芭蕉が女性の俳人、園女と親しんでゐるではありませんか。しかも園女の家には厄介になり、御馳走の茸に中毒して死んだではありませんか。これでは、女性の俳人と親しまなかつた、とは言はれないでせう。」

ないでせう。

芭蕉からの言葉として「……いかならんことをもつどりてよとおせりたるに」と元祿三年に園女が書いてゐるのです。これを見ても、芭蕉が女性の俳人と親しまなかつた、とは言はれないでせう。

尙ほ元祿七年九月二十七日浪花なる園女の家にて、園女の清楚な心情を讀えてか

白菊の目に立て、見る塵もなし

と芭蕉が句を詠んでゐるではありませんか。

これで芭蕉が女性の俳人と親しまなかつた、とは言はれないでせう。かうしてみると芭蕉の言行は、矛盾も甚しいものであつた、と云はれても致し方がないでせう」

客「それに違ひありませんが、どうして又そんなことを言つたものでせう。孔子にも似たやうな、道學者にも似たやうなことを、何故言つたものでせうか。言はねばならぬ理由があつたでせうか」

主人「私はそれをかう解釋してゐます。芭蕉が無意識のうちに、自分自身に言つたところの言葉であると思ふのです。又別な角度からみれば、女難の芭蕉が弟子の身を案する餘りに與へた、温い言葉としてうけ入れなければならぬものかもしれません。こゝには師としての立場、生活上に於ける體裁などといふものが、意識的には働いてゐなかつたものと推測されます。」

御聞き下さい、御存じかどうか知らぬが、四十九歳の芭蕉は、或ひは他人を戒る言葉であつたかもしれません。

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめにおくといへども、さすがに捨て難きは情のあやにくに、あはれなるかたぐいもおほかるべし……おろかなる者は思ふ事おほし、煩惱増長して一藝すぐるゝものは是非の勝るゝもの也、是をもて世のいとなみにあてゝ、食欲の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて生かすことあたはずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて閑にならむこそ、老の樂とはいふべけれ……五十年の頑夫自書、みづから禁戒となす

朝顔や晝は鎖おろす門の垣

と云つてゐます。これは芭蕉の有名なる「閉關説」の中の一部であります。道學者でも宗教家でもない芭蕉が、何故にかくも嚴格なる心の掟をもうけなければならなかつたか。それは他でもなく、情慾や物慾から超然として生きることが出來ず、自己反省をしなければならぬほど、煩惱に執着の強かつたことを裏書するものでせう。若しも情慾に超然たる芭蕉、聖人の如き芭蕉であつたならば、わざわざ言葉に出してまで言ふ必要はなかつたでせうし、又そんなところにまで、心の働く筈はないと思ひます」

客「別に壽貞と芭蕉との關係の如きものはなかつたでせうな」

主人「それはわかりません。園女の家にて

白菊の目に立てゝ見る塵もなし

暖簾の奥ものゆかし北の梅

などと、園女の貞節を讚美したやうな句をどうして作つてゐるか、そんなデリケートなところへ何故氣を配つてゐるのか、この邊が一寸解せません。勿論かう句に詠み込むからには、園女の容色も相當魅力があつたらしく思はれます。或説には當時園女は未亡人ではなくして、夫渭川が生きてゐたなどとも云はれてゐます。ともかくも正確なる資料が遺つてゐないので、結局憶測になるだけのことです。まあまあ園女の家で茸の中毒に當り、死んで行つたといふことは、消えざる事實であり何彼と芭蕉の人格を疑はせるものでせう」

客「この他に女性はありませんか」

主人「芭蕉に俳諧を學んだといふ人は幾らもありません。例へば乙州の母智月尼、伊賀上野の梢風尼といふやうな女流俳人はありましたが、芭蕉との深い交渉は全然わかりません」

客「今度は一寸話題を變へて、芭蕉の戀愛觀、又は戀句といふやうなものについての、種々相を聞か

せて貰ひたいと思ひます」

主人「芭蕉をして女も知らぬ戀も知らぬ人であるとするのは、彼の全幅を知らぬ人の言葉であつて、芭蕉に對しては却つて禮を失するものではあるまいか、とさへ思はれます。芭蕉が何時如何なる人に對しても、慈父のやうな温情を以て接することが出来たといふのは、世の中の酸いも甘いもなめつくして、漸く辿り着いた圓熟境に居つたからではないでせうか。若しも謹嚴そのものゝやうな芭蕉であつたならば、遊蕩三昧に身を沈めてゐた其角を、愛し續けてゆくことは出来なかつたでせう。

世間並みに言へば、芭蕉は實によく角のとれた人です。或ひは性行から、或ひは俳諧から見ても、女を知らぬ人のあづかり知らぬものが見出されます。これからさうした實例をお目にかけてませう。

これは特に俳人といふわけではありませんが、凡そ藝術にたづさはる人で、若しも女を知らぬ、戀を知らぬ、といふ人であつたならば、その人が取扱ふ女・戀には、どことなく身に則さぬものがあります。況んや愛戀・情事に關して、深刻なる觀察及び批評などは到底なし得るところではないでせう。先づかういつたことを前提として、芭蕉の作品や遺語などを覗いてみませう。

通ひ路の二階は少し遠けれど
かいこは揚屋高砂の松 青 章

「青」とは芭蕉と改號する前の俳號「桃青」ですが、このやうに遊廓情緒に精通してゐる脇を付けてゐるではありませんか」

客「成程人間ですね、聖人ではなかつたのですね。實は今の今まで、芭蕉がまさか色里に足を踏み入れてゐたとは思ひませんでした。さういへば正岡子規が、買つた花魁のことを思ひ出して、嬉しさうな手紙を書いてゐたやうですね」

主人「それでいゝではありませんか、さうしたことを變な目で見るから變になるだけです。生きてゐる芭蕉は神でも佛でもなく、人間であつたのだと見ればそれでいゝわけです。殊に當時は今日と違つて、俳人といへば遊び人と云はれたくらゐですから、俳人が遊廓に出入することなどは、當然なことでもあります。却つて遊廓遊びをしない人が變に見られたくらゐです。

話が途横道に反れてしまひましたから、前に戻ることにして、試みに遺語の中の戀に就いて申上げませう。勿論俳諧に就いてはありますが、門人士芳が戀のことを芭蕉に問ひました。その時芭蕉はこんなことを云つてゐます。

むかしより二句結ざれば用ひざるなり、昔の句は詞を兼て集め置、其詞をつゞり句となして心の戀の誠をおもはざるなり、今思ふ所は戀別して大切のことなり、なすに安からず、そのかみ宗砌宗祇の頃まで一句にて止こ

と例なきにもあらず、此後所々門人ども談して一句にて置べきところもあらんか

又こんなことも言つてゐるやうです。

前句戀とも戀ならずとも片付がたき句ある時は、必戀の句を付て前句ともに戀になすべし
是には此句のみにて、つゞいて戀にも及ぶべからず、新式にも此沙汰あるよし、しかれども戀のことは分て其
座の宗匠にまかすべし

次にこんなことも教へたやうです。

季にて戀をつゝむこと、戀の句にて季をつゝむこと、むかしはきらへども、今は苦しからず
それから發句ですが、異性を對象にした句、戀情を詠んだ句などを若干擧げてみませう。

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ

後家の秋物のあはれをとどめたり

一つ家に遊女も寐たり萩と月

行末は誰肌ふれむ紅の花

遊女畫讚

枝ぶりの日にくかはる芙蓉哉

梅柳さぞ若衆かな女かな

名月や坐に美しき顔もなし
猫の戀やむとき聞の籠る月

などがあります。これで大體推察されますやうに、戀の句の運び方については、微に入り細に亘つて
教へてゐるではありませんか。唯單に芭蕉が學び得た智識や、案出した考へ方だけでは到底こゝまで
は言ひ及ぶことが出来ないでせう」

客「併し俳句などは實にうまいものですね、それとはなしにぼかしてゐるやうに思はれますが」

主人「さうです、こゝが芭蕉の特色でもあります。露骨に言ひ表さず、上品に詠みおさめてあります
つまりはつきりと云つてゐないために純潔な句とも見られ、又は醜惡な句とも見られるといふこと
になります。大體がこんな傾向の作句ですから、唯俳句だから芭蕉を眺めると、聖人のやうにも見ら
れてしまいます。又その反對には、俗惡極まる俳人のやうにも見られてしまふといふ結果になりま
す」

客「俳人としては珍らしく表裏のある人と思はれて來ました。これは芭蕉自身が知つてゐたものでせ
うか、それとも生れながらの性格だつたでせうか」

主人「勿論自覺してゐたものであり、後天的のものであると思はれます。句を作る場合はそれほど用

意周到ではなかつたでせうが、主として句が不知不識しらずしらず性格に影響されてゐたものと思はれます。裏表といへば、こんなことも思はれます。私は敢て裏であらうと見るのではないが、見方によつては見られるから、こゝに問題に出すわけです。それは他でもありません。杜國との関係です」

客「といひますと、杜國と何かあやしい関係がありましたか。杜國は男でせう。そして杜國は熱心な蕉門の俳人で、芭蕉と吉野行を共にしてゐるではありませんか。それはさうと、杜國はぼつんと蕉門にあらはれ、又ぼつんと姿を消したやうな人ですが、一體全體、芭蕉と杜國とはどんな関係があつたでせうか」

主人「先づ杜國に就いて申上げませう。杜國は傍屋平兵衛と稱した屋張の人です。俳號は杜國又は万菊丸なども云つてゐます。貞享五年の春、芭蕉に隨從して吉野山に吟行しました。其の後何事かにかかはつて死刑を行はれるやうに極まりました。勿論普通の眞面目な人間でなかつたことは、容易に想像もされます。それほど重罪を犯した杜國であります。併しすつと以前に、「蓬萊や御國のかざり檜山」と吟じたことを、國主が聞こし召されて、罪一等を減じられ、伊良胡崎に流されたのです。

杜國が芭蕉を知つたのは、流罪されるすつと前であります。それから芭蕉は、伊良胡崎に杜國を尋ねてゐるのですから、二人の關係はしばらく續いたものと見られます。芭蕉は「贈杜國」として

白芥子に羽もぐ蝶のかたみかな

の句を作り、又

笠の緒に柳縮る旅出かな

といふ句も作つてゐます。それから貞享四年十月、杜國を伊良胡崎に尋ねて

やよひ半過るほど、そゞろにうき立心の花の我を道びく枝折と成りて、芳野の花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にて契り、置し人の伊勢にて、出むかひ、俱に旅ねのあはれをも見、且はわが爲に童子と成りて、道のたよりにもならんと、みづから万菊丸と名を云ふ、まことにわらべらしき名のさまいと興あり

といひ、元祿四年四月には

夢に杜國が事をいひ出して、涕泣して覺る、心氣相まじはる時は夢をなす、陰盡て火をゆめみ、陽おとろへて水を夢みる、飛鳥髪をふくむ時は、飛鳥をゆめみ、帯を敷寐する時は、蛇を夢みるといへり、我夢は聖人君子の夢にあらず、終日妄想散亂の氣、夜陰に夢又しかり、まことに此ことを夢みるこそ、いはゆる念夢なれ、我に志深く伊陽舊里までしたひ來りて、夜々床を同じく起ふし、行脚の勞をたすけて、百日がほど影のごとく伴ふ、片時もはなれず、或時はたはむれ、或時は悲しみ、其志わが心裏に染て、わするゝことなければなるべし、覺てまた袂をしぼる。

と芭蕉は書いてゐます。以上の句といひ、述懐といひ、すべては何を物語つてゐますか。單なる師弟

関係だけでは、こゝまで情愛が移らないでせう。こゝに於て芭蕉は、杜國と不自然なる性愛関係があつたと見られるのです。或人は「何ら肉の香もないたゞの恩愛と解することは芭蕉妄信者の陥入り易い迷蒙」などと云つてゐます。併し果して變態的な性関係があつたかどうか、この點は疑問でありまゝです。俄かに男色関係があつた、と断定することは許されませんが、或ひはあつたかもしれない、或ひはなかつたかもしれない、といふやうな程度に見ておくがよいでせう。唯さうした疑問符を打たせるだけの材料を、芭蕉自身が提供してゐる、といふことを見逃すわけにはゆきません。先づこのくらゐのところにして、これ以上深く立入ることは控へませう」

芭蕉と金銭

客「今度はいさゝか卑俗な問題になりますが、芭蕉の經濟觀念といひませうか、芭蕉が經濟といふこ

とについて、どれくらゐの關心をもつてゐましたか。そのへんのことからについて、ぼつぼつとお聞きしたいと思ひます。先づ芭蕉は金銭に恵まれた生活をしましたかどうか、そんなところからお話を進めていたゞき度く思ひます」

主人「といはれても、これこれである、と簡單にはお話いたし兼ねます。一言にしていへば、芭蕉は實に金銭に恵まれた人であつた、といふことが出来ます。即ち何時も餘裕のある生活が出来た人でありまゝ。若しも足りない時には、容易に錢を手に入れることも出来たのであります」

客「さうすると、私どもの考へてゐたことゝは、まるで反對であります。私などは、芭蕉は清貧に甘んじた俳人で、つねに一笠一簑を財産として、旅から旅を追ひ求めてゐたかの様に考へてゐました」

主人「成程、さうした見方は、あなた一人ではないでせう。世の多くの人々で、さう考へてゐる人が決して少くはないでせう。併し芭蕉とて人間です。衣食住がなければ生活は出来ない筈です。この衣食住を満足させるためには、何をおいても金銭がものを言ひます。この點については、今も昔もさう變りはないと思ひます。唯昔は人情が割合に厚かつたゞめに、今日のやうに金銭一點張りではなく、若干暮しよかつた、といふことは言ひ得ます。

そこで芭蕉は如何なる手段によつて金銭を得、それからどのくらゐの生活程度を保つて行つたか、

こうしたことが大きな問題となりませう。先刻あなたの言はれた觀察に従ふと、襤褸の衣を纏ひ、錢がないときには霞を喰ひ、そして家を持たぬ浮浪人のやうな生活が聯想されるではありませんか」

客「いや、さうまで極端には思ひませんが、周囲の俳人、即ちお弟子さんの喜捨によつて、衣食住の心配はなかつたであらう、と思つてゐるのです」

主人「謂はゞ寄附か、若しくは月謝の如き點料によつて、相當な生活をしてゐたであらう、とお思ひになるわけですね」

客「どうして相當な生活などゝは、思ひもよらぬことです。乞食にも似た貧乏生活であつたらう、と推察してゐます」

主人「それは違ひます。今時大學出の安サラリーマンの生活などゝは、比べものになりません。まあ大會社の課長級か、それ以上の生活程度を保つてゐました」

客「それは又、どうしてそんなに錢がかゝるでせうか。これはこれは、驚いてしまひました。よくも又そんなに錢が得られたものですね。相當繁昌したといふわけでせうか」

主人「かうなると、芭蕉の贅澤なる日常生活の一つ一つに觸れて、順々に説明申上げねばならぬことになります。これについては、只今申並べなくとも、次第に觸れることになりませう。芭蕉は俳諧宗

匠として、繁昌したから金錢が入つた、といふやうなことは全然ありません。絶えず別途なる方法によつて、多額の金錢が手に入つてゐたわけであります。これも段々と申上げることにならませう。

先づ何よりも先に、芭蕉が金錢に執着があつたかどうか、さうした性格を解剖することが急務であらうと思ひます。あなたも一番最初に、芭蕉の經濟觀といふやうなことを云はれましたが、それから話を進めてゆくのが順序かと思ひます」

客「それではどうぞ、さういふことにお願ひませう。芭蕉が普通人のやうに金錢慾があつたかどうか、こゝを糺明していただき度いものです」

主人「女性の問題の時にもお話ししたので甚だくだいことになりませんが、芭蕉が伊賀城の藤堂家に奉公してゐましたときの仕事が何かといへば、野菜勘定方を勤めてゐたのです。それから三十歳の頃、小石川水道修築の金錢出納係をしたと傳へられてゐるところなどから推しても、相當金錢に關心ある仕事をしたものと考へられませう。金錢に關係ある仕事に携つたことが、必ずしも物慾・金錢慾とつながりがあるわけではありませんが、全然金錢を扱はぬ人よりは、金錢の效用を知つてくるだけに、錢に執着する心の多くなるのは、當然でもありません。殊に水道修築の金錢係を勤めてゐたとき公金を拐帶して逃亡した、といふやうな噂まで残つてゐるくらいですから、金錢に對する執着が薄か

つたとはいはれないでせう。勿論この噂はあてになりませんから、信じなくともよいですが。或ひは煙りが上つたのですから、多少の火種があつたものですかどうか。

それから富裕でない家に育つた人であるだけに、物の不自由から来る苦痛を、相當身に感じてゐたであらうと思はれます。これが直接間接に影響すれば、金錢又は物品に對する執着が、しらすしらすに嵩じてくるものとも考へられます。そんなところから芭蕉は、俳人としては珍らしいほど、若い頃から物に對しての執着力が強かつたではあるまいか、と思はれてなりません」

客「若しさうでしたら成程さうかなあ、と思はれるものが幾らもありません。それをぼつぼつと聞かせて欲しいものです。さうした事柄を聞くことは、如何に興味ある問題かしれません。これは獨り私ばかりが聞きたいところではなく、誰れも彼れも聞きたいところでせう」

主人「それでは申上げることゝしませう。但し年代順に拾ひあげるといふやうな、角ばつたことに拘泥されず、又嘘か本當か一々そんなことを鑿穿せず、取り上げてみることにゝいたしませう。驚いちゃいけません。

世人が旅人芭蕉といふほどに、芭蕉は次から次へと旅に出かけてゐますが、路銀に不自由したといふことは全くなく、馬子や船頭に與へる謝儀は、他人よりも決して少くはなく、あまつさへ道中徒歩

の人を見ては氣の毒に思ひ、馬を雇つてやつたといふくらゐであります。尙ほ元祿六年頃は、芭蕉庵に芭蕉の甥桃印と壽貞尼と二人の病人を抱へ、その上知合の僧や、其の他の人の生活まで支持してゐたやうなわけでありますから、生活費のかゝることは、實に夥しいものであつたらうと思はれます。そこで元祿六年には、菅沼曲翠に宛て、公金の融通迄も依頼することゝなつたのでせう。それにも拘らず、芭蕉を貧乏俳人であつたらうなどゝ見たら、芭蕉に叱られませう」

客「それにしても不思議ですね、そんな大金が何處から入りませうか」

主人「そこが謎です。ちよつとやそつとの錢ではないのですからね。それに選句料や添削料などゝいふものについて、莫大な錢を取つたといふ覺えもありませんし、又短冊を賣るではなく、俳書が賣れるでもありません。更に又大きなバトロンといふやうな人も居ないやうです。併しなかには杉風のやうに、芭蕉庵を提供したり、幾らか米薪代を届ける人もありました。それにしても月々さう多くの錢が入るといふには、何か別な道があつたに違ひありません。先づ住家は、芭蕉庵とか幻住庵といふやうなものでしたから、それほど贅澤といふことも云へないでせうが、衣類や食物に至つてはどうです、常に木綿物を着ることを好まず、羽織の如きは、茶色のものでなければ被なかつたさうです。それから行脚の笠に至つては、唯々驚嘆するばかりのもので、笠の表には目も眩むほどの蒔繪を施し

頭の當るところは、麻に眞綿を用ひてゐるのです。實に我々の想像を許さぬほど、立派なものであります。そればかりか、何時も背負つて歩くところの笈も亦、同様に立派なものであります。これは今日も尾張に遺つてゐるさうです。次に食べ物ですが、これ又なかなか好き嫌ひがあつて、どうして貧乏人の言ひた口ではありません。例へば酒にしても、油のやうなところとした酒、よい酒を飲みたい、など云つてゐるではありませんか。何彼につけて、我儘といへば我儘此上もないでせうが、ともかくもさうしたことを、爲通して行けたですから偉いではありませんか、否不思議ではありませんか」

客「開けば聞くほど不思議に思はれてなりません、どうしてそんな大金が入つたでせうか。幾度も繰返すことですが、その謎は解けないでせうか」

主人「この謎を解くには、恐らく現代の如何なる研究家と雖、手の下しやうのない有様です。或ひは極端になり、決して妥當の説とはいはれませんが、私の想像する範囲内に於ては、こんなことも考へられるではなからうかと思はれるのです。それは芭蕉を餘りに俗悪な人間に取扱ひますので、詩人芭蕉の半面を汚すことになりはせぬかとおそれますが、まあ云へば、隱密のやうな役割を荷つてゐたではあるまいか、と思はれるのです。どうもさうしたくさゝが見うけられるのです。例へば磐城城主内

藤露沾侯と親しく俳諧興行をしたり、又は其の他各藩の重要人物と知合つてゐたことなど、それから凡兆・杜國などいふ蕉門の傑才が大罪を犯して、或ひは流在になり、或ひは行方不明になつてゐるなど、この邊の事情を或程度まで考へさせるではありませんか。思へば芭蕉は、實に正濁を併せ呑んだ社交家でありますから、この位のことには容易に爲得たのもあらう、と考へられるのです。

一寸考へても御覽なさい、何の爲めに旅から旅へと出歩いてゐたか。唯芭蕉を純粹な俳人としてなく、つまり俳聖芭蕉といふやうな先入觀をぬきにして、一步立入つてから芭蕉を見て御覽なさい。さうするとあなたも、いろいろと疑問を持たれるでせう。先づ何處へ行くにも路銀に不自由をしなかつたといふことが、何よりも不思議なこととせう。そればかりでなく、乞食通路を救ひ出して門人としていたり、又奥羽行脚の歸途、万子が餞別として金三兩と白衣一つを呈上しようとしたところ、辭退して受取らなかつたといふではありませんか。

それから芭蕉が旅先で訪ひ且つ泊つたところは、悉くといつてよいほどに權門富豪であります。例へば鳴海の大酒屋なる知足、京の富豪三井秋風、それから奥州一の藍商人、尾花澤の鈴木清風、この人は吉原を買切つて、高尾太夫と遊興したいはれてゐるほどの富豪です。こんなのはその一例に過ぎませんが、芭蕉は何故にかうした富豪連中と知合ひがあつたか、こゝが臭いではありませんか。

推し進めてみれば、勿論變な考察にはなりますが、芭蕉がかうした人々を訪ふには、其處に何か俳諧以外の用事があつたからではなからうか。殊によると幕府と御用商人との間に入つて、何か口利きとか、又は橋渡しにも似た様な役をしてゐたではなからうか、などと考へられぬでもありません。勿論芭蕉のことですから、他人から感付かれるやうな、下手なことはしなかつた筈です。而かも又俳諧師といふ職業であつたために、仕事も非常に運びがよく、他方依頼する側にあつても、安神して托することが出来たといふわけでもありません。

これは想像に過ぎないことですが、若しも今申上げた様な仕事に似たことをしてゐたとすれば、確かに物に不自由もなかつた筈ですし、又種々なる物要りがあるにせよ、事欠くことなしに暮してゆけた筈でもあります。そして幕臣曲翠から公金融通も、平氣で依頼出来たものと考へられます。こんなことは、皆「だらう、だらう」の考察に過ぎませんから、決して誤解なさらぬやうに願ひます」

客「併し恐ろしいやうな考察です。あの芭蕉にそんなことが出来たでせうか」

主人「人は見かけによらぬものと申しますが、本當に俳人らしい俳人、詩人らしい詩人であつたならば、大抵性質が開けつばなしですから、そんなことは出来ませんけれども、芭蕉はかうも細心なところへ氣が付くのか、と思はれるほどによく氣が利いてゐます。その一つ二つをお目にかけてませう。

元祿七年九月です。難波へ旅をするときに、乞食行脚の身を忘れないやうにとの心遣ひから、訪問する人の家までに至らず、即ち途中で駕籠から下りた、と自ら云つてゐるではありませんか。それからパトロン杉風が躰であるところから、芭蕉は一生涯躰の句を作らず、しかも躰の事は口にさへ洩らさなかつたさうです。それから露沾侯の御前にては、好きな煙草さへも遠慮したといふことです。どうです、普通の人々の到底及びもつかないことでせう。或ひは禮儀として辨へてゐたとしても、自分が師である立場にありながら、よくこれを行ひ得た、とはなかなか以て尋常の人でないことが察せられませう」

客「天真爛漫な俳人、生れながらの俳聖的素質のある人かと思つてゐましたが、なかなかの苦勞人ですわね」

主人「芭蕉がよくそれを出来たといふのは、相當苦勞をして來たからには違ひありませんが、半分は生れながらの性格でもありません。これから私共は、その半分であるところの後天的性格、といつたやうなものを検討しなければならぬでせう」

客「さうです。何が芭蕉をして、さういふ行爲行動を取らしむるに至つたか、又容易にさういふ行爲行動を取ることが出来たか、この邊をもう少しさぐつて置きたいものです」

主人「大體芭蕉は生來身體が弱かつたために、武人として身を立てることの出来ない位は、百も承知してゐたらしいのです。そればかりでなく若い時に、即ち藤堂家に奉職中躰きましたから、仕官して出世出来ないことも充分知つてゐました。従つて落ちゆく道は、學者か作者かといふことになりませう。郷里出奔後の芭蕉が、西鶴の如き黄表紙作家にならう、と目指したのも無理からぬものと思はれます。併し出發が俳諧から行きましたため、通俗作家にはなれませんでした。それでは何故北村季吟のやうな學者にならうとしなかつたか、との質問もありませんが、もともと芭蕉は學問することが嫌ひなたちのやうです。これは終生勉強らしい勉強を、してゐないところを見てもよくわかることです。先づぶらりぶらりとして、それで好きな著物を着ながら、うまい飯を喰つて行かう、といふ樂な生き方を考へてゐたやうです。さういふことにかけて頭の利いた芭蕉ですから、巧妙な生活態度を探るに至つたのでありませう。

先づ芭蕉は歌人西行、俳諧師宗鑑などを目標に置いて、自分の生活を律しようと思つたやうです。このために佛頂和尚について禪を修め、それから半俗半僧の獨身生活を持續したのであります。これが又實にうまく當つたといひませうか。成程芭蕉なる哉、とその手際よさには敬服せざるを得ません。先づ云へば芭蕉は、何一つの不平もなく、誂ひ向きの生活をして行けた人であるといふことです」

客「只今の御説に従ひますと、壽貞との關係はどうなりますか。それから大金の出所などはどんなことになりますか」

主人「それは表と裏といふものです。先程まで申上げましたのは、裏の生活についての種々相であります。表向きには獨身者であり、半俗半僧でもあつたのです。そして職業は申すまでもなく俳諧師であります。それ故に表面は、妻帯も出来ない貧乏俳人の生活を示さなければなりません。この點を芭蕉は實によく辨へてゐます」

客「道理で自分で建てた家も、買つた家もありませんね。よく我慢が出来たものと思ひます」

主人「そこが俳人として成功した所以でもありません。裏面では可成りの世帯を切り廻し、錢に殆んど不自由を覚えぬ芭蕉でありながら、俳人は他人の喜捨によつて生計を立て、ゆくもの、即ち乞食のやうなものであることを、充分に知つてゐますために、或ひは卑下して乞食であるといひ、或ひは米二三升を、炭一俵を、酒二升を、貰ひ度いとの手紙なども認めてゐるくらゐです。又それらの御禮状などに至つても、慇懃極まる俳人振りを見せてゐます。それといひこれといひすべては、表面が俳諧師であるため、又半俗半僧の獨身者であつたから、有利な立場にあつたのです。若しこれが蕪村や一茶の如きになると、さういふ氣輕な態度は許されません。何となれば蕪村や一茶には、妻子があつた

からであります。芭蕉は獨身であるといふところから、芭蕉自身も氣輕に貰ふことが出来、それと、
もに與へる人も、氣輕に與へることが出来たであらうと思ひます。次に一々例を擧げて、さうした方
面を詳しく觀察することゝませう」

客「實例を擧げていたゞけば、何よりも結構と存じます」

主人「それでは金錢に關係のある書簡を、幾つか述べてみませう。」

一、近日芳野行脚存立候間金子二分御かし可給候押付もらひため返濟可申候されど吾等事に候へばなすまじく候
以上（貞享三年去來宛）

一、せり賣の十錢生涯かるきほど我世間に似たれば感慨不少候（元祿四年小春宛）

一、鹿笛も木曾より貰ひ申候、時鳥笛も御座候はゞほしき物に候、水雞笛作る人は作るべくと存候、御面倒なが
ら是も御聞可被下候、出来候はゞ御頼被下願入申候、何にても相應の物細工人へ謝禮致すべく候、殺生の道
具ながら水雞笛鹿笛も只吹はおかしく候（中略）籠をならべてこれは二兩の駒鳥なり、これは五兩の黄鳥なり
と云て、招餌に小袖の肌おしぬぎ高祿の人にもあさましきさまする人、武林連中には有ものに候（元祿五年
一笑宛）

一、新麥一斗筭三本油のやうな酒五升といふは富貴の沙汰なり、蕎麥粉一重小遣錢二百文忝ぞんじ候
水油なくて寐る夜や窓の月

一、津山より飛脚參候よし、歸り之時分何日御知らせ可被下候、若者に候間金子被遣候御無用く、

などがあります。これを讀んでもわかりますやうに、俳人だから平氣で貰ふといふやうな心は少しも
なく、金錢が如何に有難いものであるかを、よく承知しての手紙であります。しかも無駄なところ
へ、莫大な金錢を使ふ人々を、嘲笑してゐる心さへ見られるではありませんか。更に一步立ち入つて
芭蕉の心底を覗いてみると、同じ金錢に關することでも、人々によつて、即ち相手の人の心を充分に
察してから、金のことに觸れてゐるではありませんか。この邊はなかなか世故にたけたものと見られ
ませう。次に物を貰ふ依頼の書簡を調べてみませう。

一、上方邊繪色紙いまだ調ひ不申由重て可申遣候、將亦此度石摺大色紙四枚被懸御意忝、折節屏風入用にて別て
喜び申候、五老井の小豆も日やけにあひ可申候、煎茶被下よし遅てもくるしからず候、能便宜に少々可被懸
御意候、頃日あへ茶にも飽申候（許六宛）

一、 覺

一もち米一升 一里豆一升

一あられ見合

右今夕會之夜食に成申候間、御いらせ傳吉にもたせ御こし可被下候、茶は一森三井寺より澤山もらひ申候、貴

様にも早々御出まちな候(喜八宛)

一、昨日は漉紙澤山御惠辱存候、然處昨夜惟然一宿例之むだ書刺筆の先棒になし困入申候、今四五枚申請度候、此人に御こし可被下候(杉風宛)

一、只今田舎より僧達二三人参候、俄に出し可申貯無之候、さぶく候故にうめんいたし可申候、そうめんは澤山有之候、酒二升御こし頼入候、さがなはつぷ納豆茶碗に入、貴様御出候て世話頼入申候、其次手に引合せ可申はや、御出まちな候以上(茂作宛)

一、扱、大雪にて御座候、炭一俵御こし頼入候以上(喜七宛)

一、御庭のつゝじ盛候由、明後日可参候、むぎめし可然候間頼入候(青山宛)

一、昨日は御入來、其節御約束之炭一俵只今頼入候

一、新春目出度存候、早々ながら米二三升只今御こし頼入候(梅石宛)

一、明日岩戸へ可参候つもりに御座候、粟二三升みやげに致度候間頼入候(梅石宛)

一、殊外はい出申候、甚うるさく御座候間もち少々頼入候(梅石宛)

一、今晚でんがく被致候よし、かたく御やき頼入候、出來次第御遣可被下候(梅石宛)

一、今朝も殊に寒く御座候、紙子羽織今日中頼入候(梅石御内もじ宛)

一、初なすび十五被下忝存候、五つはとめ置、残りは其方に御つけ置可被下候以上(梅石宛)

一、とうふ汁よろしく候間今晚は頼入候、出來次第に遣可被下候(梅石宛)

一、先日のかけどうふ殊外味ひよろしく御座候、又々頼入候(梅石宛)

一、昨日は御法事相濟一段候、其節之油あげ殊外好味わすれかね候、御座候は少々御もらひ申度候以上(梅石宛)

一、暮歳いそがしく存候、明後日もちつきに御座候よし、出來次第頼入候(梅石宛)

一、橋普請に而道遠くなり申候間四五日之内に参り可申候間、鹽つけ置候へよろしく御座候、此段頼入候(梅石宛)

一、いも頭七つばかり只今御こし頼入候

一、まんぢう七つ、あぶら上げ五つ、からし三文御こし頼入候

一、遠江殿被参候間酒少々只今遣被可下候、頼入候(大雲寺納所宛)

一、青のり八

あぶらあげ五枚

とうふ一丁、味噌少々よく搦

右之通只今御こし頼入候以上

一、もち出來候時分に御知らせ可被下候(大松寺宛)

一、霜雨晴やらず投／＼淋しく御座候、米五合斗むぎも五合斗只今御こし頼入候（梅石宛）

等々枚擧に違がありません。それから物を貰つた人に對しての感謝状は、算へ切れないほどの數であります」

客「こう澤山ならべられると、全く見當がつきません。併しながら、梅石とかいふ人へ宛てた書簡が一番多いやうですから、この人とは別懇の間柄でもあつたでせうね」

主人「勿論さうです。誰しも同じことでせうが、あけすけ言へる間柄の人といふものが、誰にも一人二人はあるものです。芭蕉と梅石もこんな關係にあつた人と見てよいのです。梅石は特別ですが、概して物を貰ふことに氣兼ねしない芭蕉は、物を他人へ遺ることに於ても、案外平氣な態度を採つてゐます。それは苦しんで得たものでないだけに、遺るに惜しくないのが人情であると云はれませうが、そんなことよりは自分が困つて貰ふのであるから、他人の困ることにもよく氣が付き、そして容易に物を與へてやることも出来たやうです。例へば

此方京大阪貧乏弟子かけあつまり、日々宿を喰つぶし、大笑ひ致しくらし申候

なども云つてゐます。それから芭蕉が好かれたところは、米を貰ふ、酒を貰ふ、御馳走を貰ふにしても、たゞ無いから貰ふ、必要だから貰ふといふことでなしに、必ずそこには芭蕉の温かい心がついて

ゐるからです。例へば書簡にもありますやうに、好味が忘れられないから、貰ひたいものであるといひ、又僧達が見えたからにうめん酒がほしい、そして是非來ていたゞいて御世話を願ひたいとまでいつてゐるのです。萬事がかうした心遣ひでありますから、贈る方も喜んで届ける、更にそれ以上届けるといふ氣持にもなれるのです。そればかりでなく、どんなに急ぐ手紙、どんなに簡単な手紙に於ても、決して通り一遍の無愛想な書方はありません。否無愛想といふよりも、下手な技巧、わざとらしい心づかひといふやうなものがないのです。この點無技巧といふよりは、洗練された技巧であるかもしれません、芭蕉が何人からも好かれる所以であります。

若しこれが蕪村であつて御覽なさい。やれ旱天に雨を待つが如くに、あなたの援助を乞ひ奉るといひ、又は夜半亭が愈々成り立たないから、生活を援助して貰ひ度い、と三拜九拜してゐるやうなわけです。即ち餘りにもわざとらしい技巧であります。それにも拘らず蕪村は、畫が賣れると、その金を借金に充てやうとはせず、紅燈の巷を飲み歩き、果ては妾お雪の所へ通ふといふ始末です。従つて蕪村の生活内狀を段々知るにつれて、援助者も減るわけです。といふのは、援助者がだまされてゐる、利用されてゐる、といふやうな氣持になるからでせう。

そこへゆくと芭蕉は上手ですね、利口ですね、蕪村のやうには、裏を見せません。裏面の生活はど

んなことをしようと、表面は年中貧乏俳人としての態度を取つてゐます。先にも云ひましたやうに、俳人は僧が物を乞ふて生活するやうに、他人から施しものを貰つて生活するのである。謂はゞ乞食にも似たものであるといふことを、絶えず意識してゐたからこそ、巧みに游泳出来たのであります。これがよいかわるいかは、時代や道德觀念の相違により、俄かに批評を許されません」

客「正濁を併せ呑んで行けたところは偉いものです。矢張り統一者だけの資格を持つてゐたものと思はれます。俳諧にも可成の地位を得たのみならず、裏面には又それ相當暗躍するところがありながら、而かも絶えず乞食であるやうな態度を見せてゆけた點、そこは非難すべきでなく、偉とすべきであるかもしれません、結局俳諧の道を踏み外さなかつた、といふべきでせうか」

主人「これは本當かどうかはしませんが、會良の反古から集めたといふものに『深川八貧』と名づくるものがあります。これなどは俳人としての面目を、完全に行つてゐるものです。申上げませうか、

米買	ひに雪の袋や投頭巾	芭蕉
薪買	雪の夜はとりわき佐野のまき買はん	依水
酒買	酒やよき雪ふみたてし門の前	苔翠
炭買	炭一升雪にかさすや山折敷	泥芹

茶買	雪にかふはやしことせよちやん借	夕菊
豆麩買	手にすゑし豆麩を照らす雪の月	友五

さしこもるむぐらの友か冬菜買	芭蕉
さりとは寒きものなり枯薄	杉風
さばけても愚とつく我も年れ暮ぬ	會良

若しもこんなことが事實であるとすれば、雪の夜の腹拵へをするために、實際の行動を行つたものとするれば、蕉風の名聲は愈々天下にひびきわたらざるを得なかつた、といふことになりませう」

客「これは芭蕉の、蕉風の大收穫でせう。これによつてみると、頭陀袋を掛けた旅人芭蕉、いや俳聖芭蕉の姿が髣髴として現前してくるではないでせうか。よく繪にあります芭蕉の尊い姿がそのまゝに」

主人「さうです。若しこの深川八貧が事實であつたならば、今あなたが云はれた通りに、俳聖芭蕉として信すべきでせうが、實際は甚だあやしいのです。史實をさぐつてみると、この『深川八貧』は、會良の反古の中から、姪の周徳が集めたものであります。従つて最後の芭蕉・杉風・會良の句などはこの時の句であるかどうか疑問であります。ともかくも芭蕉庵に幾人か集つたので、雪の夜の運

座にさうした句を作つた、といふところではあるまいかと思ひます」

客「それにしても芭蕉には、當時さうした気分が多分にあつたからでせうね」

主人「それはさうです。故積翠園は、『取頭上葛布漉酒畢還復著之』なる詩の境地を逐うて作られたものであらうと云つてゐます。蓋しこれが本當ではないでせうか」

客「ちと買ひ過ぎました。わざと芭蕉を偉く見ようとするのではありませんが、又盲目的に世間の噂に従ふとするのではありませんが、私は俳句に熱心であるせい、か、すべてを體驗の句、實感の句にしてしまふ癖があるのです」

○主人「思想と行動とを一しよにしてはいけません。思想があるからといつて、必ずしも行動があるわけではありません。芭蕉はどちらかといへば、非常に手際がよかつたからと申しませうか、思想を表現することに、獨自な妙味をそなへてゐたのです。ですから行動がなくとも、行動があつたごとくに思はせるのです。あながちこの句に限りませんが、或ひは文章に、或ひは消息に、或ひは發句に、さうした例は恐らく枚擧に遑がないでせう。但し思想があつたことは、何としても否認ない事實です。これは文章・遺語・發句等を見れば、直ぐにわかることです。あたりまへといへばあたりまへかもしませんが、普通人の到底及ばないところを思想し、普通人よりも一層深く、一層温かく思想してゐる

るところは、確かに芭蕉の勝れた點でせう。

大分話が横道に反れましたが、芭蕉はよくよく貧乏人のやうな氣持も、多分に持つてゐました。それ故に貧乏人をさげすむやうな氣持は、露ほどもありません。前にも申し上げましたやうに、生活に必要なものだけは、相當な苦心を拂つても求め得ようと思つてゐます。これは又當然なことでもあります。併し芭蕉は普通の俳人のやうに、僅かな物資では生活が支へ切れなかつたから、それについて種々と憶測がめぐらされるのです。

さてさて私は、物慾恬淡といふやうなことに觸れてみようと思ひながら、どうも話が横に入つて仕方がありません。簡単に申上げて、今回の話も畢りを告げることゝいたしませう。どうぞ重複の點は悪しからず御聞き流し下さい。芭蕉は入要のものだけは求めたが、必要以上のものは、決して求めなかつたといふことが云ひます。入要とは云ひますものゝ、これがなかなか六ヶ敷いものですが、芭蕉の入要は、或ひは贅澤と思はれる點に迄及んでゐるやうです。然し芭蕉自身にあつては、自分の趣味を満足させるためのものであるから、決して贅澤とは思つてゐないでせう。さうした衣食住についてのことは、前に度々申上げましたから、こゝには觸れないことにいたしませう。實際芭蕉は自分の好きなものを求めるためには、あらん限りの努力を拂つて求めるのですが、必要でなくなれば、弊履の如

くに捨て、惜しみません。こんな性分ですから、金銭を残すとか、物を貯へるといふやうなことは、全然ありません。かうした例はいくらもあります」

客「それでは一つ聞かせて下さる」

主人「奥羽行脚の歸途大垣の如行の家に寛いだ時のことです。如行の門人なる鍛冶竹戸が、旅に疲れ
た芭蕉に按摩をしてやりました。芭蕉はその懇ろなる心をいたく感じ、最上で貰つて、今日迄肌身離
さずに着て来た紙衾を、御禮のしるしとして、竹戸に與へたといふことです。其處に居合せた曾良
は、自分が記念に貰ひたいものと心の中で羨んだやうです。又普通ならば、永い道中を師のために仕
へて来た、曾良に遣るべきでありませう。それから墨塗金泥の手箱ですが、これは熱田の俳人桐葉に
與へてゐます。なほ又大事に大事に愛玩してゐた水雞笛を、無造作にも配刀といふ俳人に與へてゐる
のです。こんなことを一々算へ立てたら、限りもありません。それよりも第一に、芭蕉が死んだとき
の遺物を調べてみると、一層はつきりいたしませう。

- | | | |
|-----------|-------------|----------------|
| 一、出山佛(一體) | 一、鐵如意(一本) | 一、觀音經(小本一部) |
| 一、紙縷袈裟 | 一、被風 | 一、銅鉢(一口) |
| 一、木硯 | 一、古今集序説(一部) | 一、百人一首(書入有、一部) |

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 一、新式(一部) | 一、奥之細道(一部) | 一、御笠(一蓋) |
| 一、菅簞(一被) | 一、御杖(一本) | 一、御頭陀(一) |
| 一、杜子美詩集 | 一、山家集 | 一、歌仙三卷 |
| 一、發句四五十吟 | 一、書拾ノ反故 | 一、紙ニ卷キタル布切 |
| 一、和歌ノ古短冊二枚 | 一、松岸蛸湯ノ繪二枚 | |

大體こんなものです。これから察しても、如何に所藏品が少なかつたか、到底話にもならぬほどで
す」

客「案外貧乏なのは驚きました。有つたら使つてしまふといふ、貧乏性分でせうか」

主人「いや、必要だから止むなく求めるが、必要でないものは、求めようとしなかつたやうです。
要するに金銭や物質を獲得せんがための種々なる技巧、時には藝術家としてあるまじき技巧さへ用ひ
たであらうと思はれるのも、畢竟するに必要なものを得なければならぬ、といふ意志に驅られたから
でありませう」

客「さういはれてみるとさうです。物慾に恬淡なる芭蕉の半面もよくわかりましたが、これは後天性
といふよりは先天性によるものでせうか」

主人「思ふにさうした性格は、芭蕉が私淑せる西行其他先人の生活行状と、自分が得た宗教観・道徳観の影響ではありますまいか。即ち後天的の性格であらうと思ひます」

客「聞けば聞くほど面白く、又有益であります。といつて際限もないことです。大分夜も更けましたから、今夜はこれで失禮させていただきます、この次には別な問題を持つてお伺ひいたします」

敬神崇佛

客「今夜はぐつと變つたところをお伺ひしたいものです。今までは芭蕉の卑俗な方面をあげてきたかたちですから、いさゝかすまないといふやうな氣もいたします。そこで今夜は芭蕉の宗教観といひませうか、神佛崇拜の念が篤かつたか否か、といふ點についてお話を願ひます。話が甚だ年寄りじみてきますが、よくさうしたことを尋ねられ、又聞かされることもありますから、此際もう少し深く理解して置きたいと思ふ次第であります」

主人「承知しました。併し宗教観といつても、餘り漠然としてゐますから、何から先に申上げてよいか迷ひます。若し一つ一つと質問でもしていただければ更に結構と思ひますが、如何でせうか」

客「それではお尋ねすることにいたします。芭蕉は子供の頃から、信仰心が篤かつたでせうか」

主人「子供といつても、そんなに幼い時代のことについては、唯に信仰心のみならず、すべてのことに關しても知ることが出来ません。従つて揣摩憶測するくらゐのところは關の山でせう。私の想像も亦妥當か否か、保證の限りではありません。それでは申上げませう。芭蕉は二歳にして病氣を防ぐ意味から金作と改名したくらゐですから、生れながらにして病身だつたといふことがいへませう。病身の者が必ずしも信仰心が深いとは限りませんが、非常に異つた環境に置かれたものでなければ、即ち素直に育てられたとすれば、一般に健康體の人よりも病弱の人の方が、より一層信仰心に富んでゐるやうに思はれます。殊に現代と異つた當時にあつては、尙更この傾向が強かつたではないかと思ひます。例へば、この子供のどこが弱い、それにはあの神様にお参りすればよい、あの佛様が治して下さる、などといふ迷信は數へ立てられぬ程多くありませう。先づこの點から推しても、芭蕉が割合に神佛崇拜の念が強かつたものと考へられませう。勿論それは無意識のごとく、或ひは強ひられるまゝに崇拜したかもしれませんが、それからです、芭蕉は三歳頃ですか、生母を失つてゐます。こんなことも直接間接の原因となつて御佛を大切にするといふ心も、普通の人よりは一入深められたではないかと思はれます」

客「それから青年時代は如何ですか」

主人「芭蕉は二十三歳のとき、主君なる藤堂蟬吟公の早世に遭ひました。芭蕉の悲しみは一と通りではなかつたであらうと思ひます。何となれば親鳥を失つた子鳥の如く、今後如何にして生きてゆくか一寸先が眞暗闇といふやうなわけでありませう。芭蕉はやがて主君の遺骨を抱いて高野山に登り、手厚い供養を施して歸つたやうです。儂い人生をまさまざと觀じた芭蕉ですから、自然神佛に對する崇敬の念が深まつたことは、火を見るよりも明かなることゝ云はねばなりません。それから後年のことですが、佛頂和尚について禪を體得し、俳諧渡世の心境から、西行・宗祇などを私淑したといふことも、云はず語らずの間に神佛崇敬の念を深からしめ、又神佛崇敬の念に深かつたといふことを實證するものであらうと思ひます」

客「よく耳にすることですが、芭蕉の篤い信仰心が神に通じて、神靈が句を作らせたものであるとか、又芭蕉の發句は、禪に悟入してはじめて作られたものであるから、禪を知らなければ理解することが出来ない、などといふ人が尠くありません。果してそんなことがあるのでせうか」

主人「それは極端な觀察で、正鵠を缺いたものです。それ故芭蕉にとつては、非常に迷惑なものではあるまいかと思ひます。いふまでもなく俳句は禪に通ふところがありますけれども、俳句は宗教では

ありません。かやうに偏頗的な解釋を下しては、芭蕉の正しい人間性も、亦藝術も看取することが出来ないでせう。芭蕉は佛頂和尚に禪を學んで、安心立命の境地を體得しました。それが偶々芭蕉の性格と作風に影響を及ぼした、といふ程度のものでありませう。それから芭蕉の句が神がかつてゐるなどといふことは、徒に芭蕉を神格化せるあまり、捏造された架空の説話であります」

客「此の間、芭蕉は一生涯半僧半俗の生活を持続したと云はれましたが、只今伺つたところより想像しますと、どうしても僧になりたかつたがなり切れぬ。といつて普通人のやうな生活をしても行けない、といふ敬虔な氣持があつたからではないでせうか」

主人「それもさうでせう。一概に生活手段のためにのみ、半僧半俗の生活態度を採つたものとはばかり卑下してもならぬでせう。僧侶になりたいやうな氣持、或ひは其處迄は強くなかつたかもしれませんが、御佛に近づかうとする氣持は可成多かつたことゝ察せられます。それが證據には佛の句、佛のことを書いた文章、佛寺に參詣したこと等が、ものすごく多いのです。かの問題の半僧半俗、一つはかうした氣持と、もう一つは俗人的な満足を追ふ、追はずには居れなかつた、といふやうなところではありますまいか。それが結果的には、生活上甚だ都合だつたといふわけでせう」

客「神や佛に關して、どんなことを書いて居りませうか、どんな句を遺して居りませうか」

主人「芭蕉の信仰心は到るところにあらはれてゐますが、今その二三を御披露いたしませう」

往時此御山を二荒山と書しを、空海大師開墓の時日光とあらため給ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今此御光り一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の柄おだやかなり。猶はゞかりおほくて筆をさしおきぬ。

あらたふと青葉わか葉の日の光り

と全身的に崇拜の念を披瀝してゐます。又

高野の奥に登れば、靈場さかんにして法の燈消ゆる時なく、坊舎地を占めて佛閣堂をならべ、一卵頓成の春の花は寂寞の霞の空に匂ひておぼえ、猿の聲・鳥の啼聲にも腸を破るばかりにて、御廟を心靜かに拜み、骨堂のあたりにぞみて情々思ふやうあり、此處は多くの人のかたみのあつまれる所にして、我が先祖の鬢髪をはじめ、親しき懐しき限りの白骨も、このうちにこそおもひこめつれと、袂をせきあへずそらにこぼる涙をとどめて

父母のしきりに戀し雉の聲

と感極はまつて、落涙止まるところを知らざる状態であります。尙ほ又

かの西行の跡をしたひ、増賀のまことを悲しびて、内外の御前にぬかづき乍ら、袂をしぼるばかりになん侍ると熱涙をこめて記してゐるではありませんか。

客「さうすると神社佛閣の句も多く、又知合ひのお坊さんなども随分多かつたこととせう」

主人「それは多いのです、一寸拾ひ出してみませうか。野晒紀行に於ては、外宮參拜・常盤の墳・二上山常麻寺・後醍醐帝の御廟・桑名本當寺・熱田神宮・二月堂・伏見西岸寺等あります。又鹿島紀行に於ては、只管に鹿島神社の神靈を感じて止まるところを知らず、やがて佛頂和尙に思ひを移して、根本寺などを訪れてゐます。又吉野紀行に於ては、俊乘上人の舊跡・護峰山新大佛寺・故蟬吟公を追憶して御佛をおろがみ、尙伊勢神宮・初瀬・葛城山・勝尾寺・紀三井寺・奈良・須磨寺等に詣でてゐます。又更科紀行に於ては、途中逢ふたる寺僧のことどもを記して、善光寺に筆をとどめてゐます。又奥之細道に於ては、室の八島・二荒神社・東照宮・玉藻の前の古墳・八幡宮・修驗光明寺・雲岸寺・藤中將實方の塚・松島瑞岩寺・中尊寺・山形の山寺・羽黒月山湯殿の出羽三山・干満珠寺・太田神社・丸岡天龍寺・仲哀天皇の御廟等々、これは唯紀行などに現れた一部分を申上げたものに過ぎませんが、神社佛閣を訪ひ歩くことを目的とさへしてゐたくらゐでありますから、有名でない佛寺・祠社舊跡などへ參詣したことを算へたら、凡そ測り知れないといふほどでせう。更に敬神敬佛の發句に至つては、餘りに多いため、擧げるだけが無駄であらうとも思はれます」

客「何故に芭蕉はかくも到るところに、神社佛閣を參詣し歩いて句を求めたか。これから芭蕉の信仰心に、メスを入れて貰ひませうか」

主人「今も昔も同じことで、俳句を作る人なら誰れしも思ふことでせうが、神社佛閣は俳句の對象として、無條件に好都合であります。それはいふまでもなく、我が國民性の然らしむるところであります。尙ほ俳句から云へば、外面的にはうごきの少い對象であり、内面的には測り知ることの出来ない、深遠さを秘めてゐます。更に云へば神や佛は、われわれ人間以上の抽象的存在であるばかりでなく、其處には人間の力を以ては到底計ることの出来ない、神秘的に醸成された何ものかがあると思はれます。それ故に聖地や靈地に於て、われわれは安心して想像力を働かすことが出来、そしてわれわれ人間以上の、偉大なる力に近づかうとさへするのであります。或ひは自然に還れといひ、或ひは造化の妙に近づかうとした芭蕉に於ては、更にこの傾向が強かつたものであらうと思ひます」

客「矢張芭蕉は偉かつたやうにも推察されます。修養に修養を積んだ人のやうにも見られます。この修養も、時には善い意味に、時には悪い意味にも解釋されませうが、世の中といふことゝ、われわれ人間の道といふことをよく知つてゐたやうに見られるのです。神社に參拜する、佛寺に參詣するにしても、附け刃的なところがないといふのは、矢張芭蕉の人間がよく出来てゐたからではないでせうか。われわれと雖も、神や佛を敬仰しますが、一から十まで、しかも技巧らしい技巧などを少しも見せないで、或ひは行爲行動に、或ひは句に文に移すといふことは、容易な業ではなく、眞實に相當以

上の心がなければ出来ぬものであらうと考へられます」

主人「あなたの言はれる通りですが、芭蕉獨りを特別視することも出来ないと思ひます。何故ならばかやうな敬神崇佛の心念は、濃淡の差こそはあれ、當時の社會を支配してゐた大きな波でもありません。遊びに出かけたい、旅に出かけたいといふ心はあつても、容易に他所へ出掛けることの出来なかつた當時にありては、或ひは神詣で、或ひは佛參りといふ名目を以てのみ、旅が出来たといふことではありません。それにしても芭蕉は多感であり、世俗の煩惱にも飽きて來てゐたやうですから、一入敬神崇佛の念が強かつたといふことも云ひ得ませう。これは逸話に過ぎないでせうが、芭蕉後傳にこんなことがあります。元祿二年（四十六歳）奥之細道行脚の歸途、越後直江津の聽心寺を訪ふとき、芭蕉は添書を示して一夜の宿を乞ふたのです。寺僧は芭蕉と曾良を見て、乞食坊主の風態であつたがために、すげなく門前拂ひをしました。やがて芭蕉は佛壇の方を見て恭しく黙禮し、しばし旅の疲勞を醫して後、歸らうとしました。この時この寺の僧某が現れ、芭蕉を俳人であることを知つて、句を所望しました。そこで芭蕉は望まれるまゝに句を記しましたが、曾良は大いに憤慨したさうです。芭蕉は曾良を戒めて、行脚の目的やら佛の尊さなどを、光風霽月の氣持でしみじみと説いたといふことあります。勿論宿を借さなかつたので、寺の軒端に夜を明かしたと云はれてゐます。併しこれは事實ら

しくありませんが、ともかくも芭蕉が崇佛の念に篤かつた、といふ片鱗を窺はせるものと見てもよいでせう」

客「芭蕉の旅は、あの奥之細道行脚は、芭蕉庵に同棲してゐた壽貞尼の病氣に氣を腐らした揚句、その苦痛かれ逃れようとして出掛けたのである、といふことを聞きましたね。それから旅から旅を重ねたのは、隠密のやうな役を荷つてゐたからではなからうか、なども云はれましたが。それにも拘らず旅先では、悉く神社佛閣を尋ねて、参拜参詣してゐるのですが、かうなると辻褄が合はぬやうに思はれて來ます」

主人「そこですよ、あゝも思はれ、かうも思はれるといふやうなわけです。よく云へば純粹な俳人的氣質の然らしめたものと見られ、わるく云へば生活のカムフラージとも見られるわけです。本當のところは、生きてゐる芭蕉から聞かなければわかりません。まあまあ解けない謎として置くより仕方がないでせう」

客「一寸變なことをお尋ねしますが、芭蕉は信仰心が強かつたから、神佛に關した句を澤山詠んだでせうか、それとも俳諧發句のために、信仰心が強められたといふわけでせうか。どちらが先になつてゐるものでせうか」

主人「芭蕉に社寺句を多く作らせたといふ原因を大きく眺めてみますと、先程述べましたことゝもの他に、杜甫の詩藻の影響、それに西行の山家集の影響などが、與つて力あつたものではあるまいかと思はれます。山家集は肌身離さずに愛誦してゐたくらゐですから、西行のやうに偉くならうといふやうな心構へが、相當支配してゐたものゝやうに見うけられます。自然人間生活の美しさを探求するといふよりは、旅に出でゝ大自然に觸れ、汚れなき神佛を逐ふといふやうな心に傾いて行つたものではなからうかと思はれます。そこでどちらかといふと、信仰心の赴くまゝに、神佛に關する俳諧・發句が生れたものでなく、俳諧・發句のために愈々信仰心が深められて行つたものゝやうであります。この點蕪村や一茶などとは全然趣きを異にしてゐます」

客「簡単に云へば、蕪村や一茶とはどんなところが違ひますですか」

主人「蕪村は神佛崇拝の念が非常に薄いのです。時には佛寺の行事などを茶化してゐます。こんなために當時一般の人々からは、非常に損な立場に見られたわけです。なほ蕪村自身にしても、大きな據りどころ、即ち宗教的背景がなかつたために、藝術は勿論生活もぐらつてゐます。云はゞ腰の坐つたところがないのです。芭蕉は生涯を通じて、藝術にも生活にも落着きがあり、腰が坐つてゐます。更に人一倍神佛崇敬の念が強かつたから、一般大衆からは慕はれたわけであり、一茶になると、

芭蕉とも違ひ又蕪村とも違ひます。即ち一茶は、割合に神佛崇敬の念が強かつたのですが、時に應じて佛像何ものぞ、といつた心も動いてゐるやうです。従つて非常に統一のとれない精神をもつてゐたと考へられます。勿論一茶の自我が露骨に俳句化されたといふまでのことでせう。たゞに神佛崇敬の心から觀察しても、三人のうちでは芭蕉が斷然頭角をぬき、大衆の上に立つだけの地位を具へてゐたといふことを認めうるのです」

客「これは一寸話が違ひますが、かつて綱島梁川氏が芭蕉を稱して、風流三昧の奥龍に神を見た詩人である、といふやうなことを云つてゐましたが、一體あれはどんなところを云つたものでせうか」

主人「早い話が風流三昧に徹したため、俳諧のまことを極め、其處に嚴然犯すべからざるもの、即ち超人的な何ものかを見出したであらう、と云つたのではありますまいか」

客「さう云はれますとそれには違ひありませんが、言葉が高尙過ぎて、腑に落ちませんです。もう少し平易に、わかり易く例でも擧げてから、お話し願ひませうか」

主人「さうですか、そんなつもりで六ヶ敷く申上げたわけではありませんでしたが。それではいさゝかくどくなるかもしれませんが、ぼつぼつと申述べて行きませう。梁川氏が假りにも、芭蕉は神を見たであらうといふからには、文學だけでは解決の出来ないものが横たはつて居ります。それが何であ

るかといへば、申す迄もなく宗教であります。そこで芭蕉の藝術は、單なる藝術ではなくして、其處に宗教の力といふものが多分に加はつてゐた、といふことがいはれるわけです」

客「はあ、よくわかります。それから」

主人「芭蕉がどの程度に宗教を理解し體得してゐたか、この邊を調べると、大體この問題は解決されることになりませう。それでは先を急ぎますが、これから申上げることが、今迄申上げて來ましたことゝ大分重複するところもありませうが、この點は我慢をして聞いていただくことゝしませう」

客「結構です、わからんところがわかるやうになればよいのです。重複位は大いに我慢します」

主人「芭蕉は一番初めに默宗禪師に參じて禪を學び、後佛頂和尚に就て禪を學びました。勿論學問教義だけではなく、禪の實際的な行動、例へば坐禪も組んだといふことは容易に推察されます。そしてこの參禪がどのくらゐに、芭蕉に役立つたか。普通人が參禪しても、大いに役立つところがありますのに、芭蕉のやうに際立つて利巧な人——萬葉集撰集の方法に關して一隻眼を有してゐたと季吟が驚嘆し、其角・素堂の如き該博なる學藝を持てる人々と交遊してゐるくらゐですから、參禪によつて藝道が愈々深かまつたことは申すまでもないでせう。云はゞ學藝は宗教によつて愈々深遠なる境へ、宗教は學藝によつて愈々深遠なる境へと入つて行つたわけでありませう。それ故に、例へば卯辰紀行に

百骸九竅の中に物あり、かりに名づけて風羅坊といふ、誠にうすものゝ風に破れやすからんことをいふにやあらん

といつてゐるではありませんか。これは取りも直さず、俳諧一徹に生きる己が身をよく觀じ、佛道の深さに迄悟入し、而して其處に安身立命の境を求めてゐるわけであります。それから旅先々々で洩らしてゐる言葉、幻住庵に於ける生活等、皆さうした芭蕉の心境を物語つてゐるもの、といつてよいでせう」

客「何ですかさう云はれますと、芭蕉は求道者か或ひは尊い佛様のやうに思はれてきて、以前に伺ひました現實主義者の姿は消えてしまひますが、どちらが本當ですか。昨日は赤今日は白と云はれるやうで、薩張り本體を掴めません」

主人「私は度々申上げてゐるやうに、あゝも見られかうも見られるといふのです。つまり芭蕉のやうに言ふことが判つきりせず、稍とぼかしてありますと、白く見ると白く見られるが、若し反對に赤くはなからうかと思つて見ると、赤くも見られるといふやうなわけであります。第一あなたは、私の言ふことばかりでなく、他人の言ふことも、直ぐに素直に肯定しますため、さうした疑問が起きるのです。誰しも芭蕉の眞を掴めない今日、赤といふ人が正しいか、白といふ人が正しいか、其處が問題で

あります。まあ止むを得ませんから、研究の深さと洞察力の鋭さといふものに頼るより他ないでせう。餘談は扱っておき本論に戻りますが、今何を論じてゐましたかなア」

客「芭蕉は神を見たといふが、どんな程度に於て神を見たといはれるか。それから芭蕉は現實主義者か超現實主義者かといふことに就いて伺つてゐたのであります」

主人「芭蕉は純然たる現實主義者であります。これは聲を大きくして云へることであります。あなたが女性問題、半僧半俗の生活態度等々を擧げて證據附けるのではなく、宗教的方面から觀察しても、芭蕉には未來信仰といふやうなものが絶対にありませんでした。従つて芭蕉は參禪したにせよ、又は宗教的に訓練されたにせよ、飽くまで現實主義であつたわけです。但しこの現實主義といつても、普通一般の現實主義者とは異つてゐますところに、芭蕉の偉らさが見出されます」

客「さうですか、そこを急いでお願いいたします」

主人「普通一般の人々は、只現實々に捉はれてゐます。これが所謂一般の現實主義者であります。然るに芭蕉は現實から離れようとはしないが、現實に捉はれてはゐません。現實をよく自分の身と對應させて生きてゐます。これを別の言葉でいへば、普通の人々は現實を知らないがために、目を廻しながら現實に縋つて生きてゐる。これに反して芭蕉はよく現實を知つてゐたがために、平然として現

實を歩いてゐるといふところであります。大變な相違であります。例へば見て御覽なさい、芭蕉は金銭が欲しいときには、種々なる手段を弄しても取入れようとしますが、必要でない金銭や物質は求めようとしてゐません。全く現實を凝視して生きてゐながら、現實には捉はれてゐません。従つて旅の具多きは道のさほりなりと、物みな捨てたれども、夜の料にと紙衣一ツ羽やうの物、硯筆紙藥書筒などに包て背負たれば、いとどすね弱く、力なき身の跡さまにひかふるやうにて、道猶すゝまず、たゞ物うき事のみ多し

草 臥 て 宿 かる 頃 や 藤 の 花

などと、現實の中から寂光を求めることが出来たのであります。又

初 し ぐ れ 猿 も 小 簀 を ほ し げ な り

の句のやうに、現實と自然との靈感の境地を把握することが出来たのであります。こんなところを稱して芭蕉は神を見たのである、といふ説も出てくるのでせう」

客「といひますと、芭蕉が現實主義者でありながら、現實に捉はれないといふ、それは生れながらの性質がさせたものでせうか、それとも何か他に大きな原因がありますか」

主人「大あります。斷じて生れながらの性格ではありません。その原因は先に申述べましたやうに、

參禪其他に依る宗教力のお蔭であります。要するに芭蕉は宗教に捉はれることなく、宗教をして完全にわが身に活かした人といふことが出来ませう」

客「さうですか、わかりました。これで芭蕉の心臓を捉んだやうな氣がします。併し芭蕉には未だまだ大きな鑛脈があるのでせうね。この次には大きな金鑛を掘り當てゝ貰ふやう、充分用意をして伺ひします。これで今夜は打切つていたゞきませう」

芭蕉の嗜好物

客「どうも御馳走様で御座いました。ゆつくり頂戴しましたゞめか、近頃になく酔ひました。御忙はしいところ恐縮では御座いますが、ほんの僅かの時間で結構ですから、何か芭蕉に就いてのお話を願ひませんでせうか」

主人「宜しう御座います。今夜は別に忙はしい仕事ありませんから、悠つくりしていらつしやい。ところで芭蕉の何を話させうか。こんな調子ですから、多少的が外れるかもしれませんよ」

客「それでは芭蕉の嗜好物に就て、お話願ひませう」

主人「食べ物ですね、どんなものを好んで食べたかとおつしやるですね」

客「さうです、先づ大雑把に云つて、くだい物が好きなのか、あつさりした物が好きなのか、一體どちらでせう」

主人「それはいふまでもなく、淡泊な物を好んで食べたやうです。第一瘦せた身體から想像してもわかりませうし、又芭蕉が説く俳諧の寂菜から推しても、さう思はれるのが普通でせう」

客「成程それに違ひありません。そしてどんなものを特に好みましたかね」

主人「酒は勿論のことですが、萹藪・獨活・野老・豆類・茶漬などは大好物らしかつたやうに思はれます。萹藪を好んだことは支考の「削りかけの返詞」にも云はれてゐますし、又

萹 藪 の 刺 身 も 少 し 梅 の 花

と作つてゐるやうに、萹藪の刺身が少し食べられるほど、身體の調子がよくなつたと喜んでゐるのを見てもわかりませう。それから野老では、門人乙州が江戸へ行くとき、その餞けの句に

梅 若 菜 鞠 子 の 宿 の と ろ ゝ 汁

と詠んでゐます。即ち駿河鞠子の宿で食つた、とろゝ汁の美味を思ひ出して作つてゐるほどであります。其の他獨活・豆類が好きであつたことは、喰べたいから貰ひたいといひ、又貰つたゝめに書いた

禮狀などから推し考へても、充分に證據づけられると思ひます」

客「何故さう淡泊なものが好きだつたでせうか」

主人「それは身體が弱かつたこと、殊に胃腸が丈夫でなかつたからでせう。大體芭蕉は好き嫌ひが激しかつたやうですが、それなどは矢張り胃腸が弱かつたゝめと思はれます。胃腸が弱いといへば、恐ろしく冷性で、折角棲み慣れた幻住庵であるにも拘らず、秋の冷氣に堪へられぬために、そこを逃れて山を下りてしまつたといふことです。こんなわけですから、養生のために、特に淡泊な食物を愛好したといふやうな點は毫も認められないのです。何といつても、胃腸が弱いために、自然に食物もさうした方面に傾いてしまつたのです。さう見るのが穩當ではありますまいか」

客「弱い人程に食べ物に好き嫌ひがある、といふことはよく聞きます。さうしてみると、芭蕉も亦胃腸なり、又は身體全體的に頑丈でなかつたから、さうした方向に片寄つたわけですね。然し俳諧に又生活に、あれだけ用意周到であつたところを見ると、食べ物にも相當用心してよかつたと思ひますが、さうした個所は窺はれないものでせうか」

主人「そこが弱いものゝ食ひ心棒ですね。大體園女の邸にて、御馳走の茸を好むまゝに食つたゝめに遂に痼病にかゝつて終命したといふわけですから、そこを考へても亂暴ちやありませんか。食べ物に

は實際我儘な人であつたといはれても、辯解は出来ないでせう。つまり食べ物だけには、どうしても攝生が出来なかつたといふわけです。若し芭蕉がですね、俳諧に用意周到である如く、又生活に用意周到である如く、食べ物に養生するところがあつたならば、まだまだ永く存命したに違ひあるまいと思ひます。とはいひますものゝ、生來胃腸の弱い人でありますから、或ひはさういふ方が無理であるかもしれません。併し私は思ひます。その我儘にも似た物の喰べ方こそは、詩人芭蕉としての赤裸な性行のあらはれであり、これが取りも直さず、偉大なる俳諧事業、即ち蕉風樹立を完うした所以ではなからうか、と思はれてならないのであります。それでは何故さうか、といはれると一朝一夕には申上げられませんが、これは芭蕉の生涯を通じて、或ひは心に、或ひは行爲行動に、いろ／＼と長所を形づくつてゐるやうに見られるのであります。

客「さうでせう。さう云はれると、ほのかに理解出来るやうな氣がいたします。時に酒にも攝生がありませんでしたか」

主人「いやいや、これは遠ひます。酒だけは例外といひませうか、酒は如何に好きでも、相當な攝生を拂つてゐます。こゝが偉いところでせう。確かに偉くなれた所以がこゝにあります」

客「それでは愈々酒の話に入つて貰ひませう」

主人「さてさて芭蕉の嗜好物中、白眉をなすものは酒でありませう。この點酒飲みの芭蕉を見なくては、本當の芭蕉の素性が見出されないといふことになりませう」

客「酒に對しての思慮深い性質とは、何か面白い資料でも御座いますか」

主人「それでは申上げますが、『好んで酒を飲むべからず、饗應により固辭し難くとも微醺にして止むべし』何とうまいことを云つてゐるではありませんか。下戸ならいざ知らず、酒の好きな者がこれだけ用心深いことをいふのですから、並大抵ではありません。實行したかどうかはわかりませんが、兎も角もこれだけ云ふのですから偉いものでせう。古來中庸を行くといふことは、言ひ易くして行ひ難きことです。にもかゝはらず、芭蕉は中庸の道を歩み得たのですから、偉いと言はざるを得ません」

客「それにしても本當に行ひ得たかどうかは、わからぬでせうね」

主人「さう一概に排撃したものではありません。酒豪寶井其角を戒めて、飲酒一枚起請の寫しを送つてをります。何と温情のある芭蕉ではありませんか。これは非常に珍らしく面白いものですから、永たらしいが申上げませう。

もろこし我朝にもろ／＼の上戸達の沙汰し申さるゝ酒盛にもあらず、又かちんを喰ひ茶をのみて飲る酒にもあらず、たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するとぞ思ひとりて、一杯飲むより外別の仔細

候はず、但三獻四種の肴など申す事の候は、酒宴も決定して珍らしき肴もとめたると思ふうちにこもり候や、此外に奥深き大盃は二尊の御あはれみにはづれ、本性を失ひ候、九獻を愛せん人はたとひ一代の法を學ばずとも、一文不智愚鈍の身にして下戸にも常に振舞はせて、唯一向に酒を飲むべし、右飲酒一枚起請は尊朝親王御作のよし承り候、尤さる人の許に御直筆にて掛物にして床にかゝり有之候、あまりく面白き御作故一寸寫し來候、貴丈常々大酒をせられ候故此文句を寫して大酒御無用存候仍而一句

朝がほに我は飯くふ男かな 芭蕉

いかゞ、くはしき事はやがて御目にかゝり、萬々可申述候以上、十七日其角丈、はせを

であります。何故酒に對してさうした心情が働いてゐるか、この邊を考察してみると非常におもしろく、凡夫と異つた芭蕉の心底を見探ることが出來ませう。それは何あらう、酒は美味いから大いに愛すべきであるが、酒に吞まれてはならない、といふ心情の發露であります。換言すれば、酒を憎むこと勿れ、下手に用ふることを避けよといふのであります」

客「實によい老人ですね、すべての酒飲みもかくありたいものです。併し芭蕉にしても、さうした酒飲説を得るまでには、相當酒に苦勞もしたことでせう。恐らくは酒で失敗したことも、二度や三度ではなかつたでせう。そしてその達觀説を得る直接の原因、若しくは道機といふやうなものがあつた

でせうか」

主人「こつした性行は、一言にして云へば、芭蕉の圓滿謙虛なる人格の表れであります。もう一步突込んで解剖してみると、次のやうな觀察が下されるではないでせうか。即ち一つは、芭蕉自身の虚弱なる身體から深酒の害が植ゑつけられて來てゐること、もう一つは、世の生活に無用なる俳諧に遊ぶ者として、世間に對しても大酒は禁すべきもの、遠慮すべきものであるといふ、深い考慮に原因してゐるものではないでせうか」

客「それに違ひありません。全く痒いところに手が届いたやうに、疑雲がすうつと晴れてしまひました。かうなると芭蕉をくさしても、斷然偉いところはありますね。この位の技巧は當然許さるべきものでせう。否これは技巧といふのではなく、世を渡るものゝ道であるかもしれませぬ。容易に眞似の出來ないところ、そこを凡人は何の彼のと批判し、非難しますが、それは要するに及ばないものゝ不満であるかもしれませぬ」

主人「今度は馬鹿に芭蕉を善意に解釋されましたな。今申上げましたやうに、この二つの思想がもつれもつれて、遂に酒に對する芭蕉獨特の考へが作られたものであらうと思はれます。尙ほこれは後年のことに屬しますが、俳諧の宗匠といふ立場から、酒に對する節制、すなはち美味いからといつて

飲み放題に飲み、やがて泥酔するやうなことがあつては、師の面目は丸潰れとなり、大俳諧の樹立は達成されない、といふ懸念が多分に働いてゐたのではあるまいか。始終さうした意識を以て、酒を手にしたのではあるまいか、と考へられる方が妙からずあるだらうと想像されますが、如何です」

客「私もさう思ふ一人であります。それが間違ひとおつしやるですか」

主人「いやさういふわけではありません。芭蕉のやうに用心深い性質として、さうした意識がないものとは否定出来ません。往々さうした意識が随時随所に働いたものと見られます。けれども芭蕉の正直な性質が強かつたために、かやうな意識が全然没却されてゐる場合も、決して妙くはないのであります」

客「今、正直と云はれましたが、先刻申された大俳諧蕉風樹立のための用意周到、それは不正直な性質の反映であると云はれるわけですか。さうすると芭蕉は、不正直な性質の發展に専ら努力を拂つてゐたといふことになり、われわれは不正直な性質に於ける芭蕉を、本當の芭蕉の姿であると思ひ込んでゐたことになります。こんなことでせうか。先生の揚足を取る私ではありませんが、意外な言葉に驚いたあまり、質問申上げた次第であります」

主人「それは失言でした。正直不正直などと云つたのが、抑々誤解を招いた原因でありますから、取

消しませう。今あなたが云はれた不正直な性質とは、謂はゞ大人の芭蕉の性質であり、私が正直な性質と申上げたのは、子供の芭蕉の性質とでも云ふべきでせうか。或ひはそれも當を得ない言葉かも知れません。ところで本題に移りませう。芭蕉は酒に對して、大抵の場合に深い考慮を拂つてゐたと申上げましたが、唯酒といふことでなしに、そこに特別な雰圍氣が入つた場合は、赤裸々な芭蕉といひませうか、全く心構ひがなく、無邪氣な芭蕉の姿が見られるのです。所謂修養による性格の色が少しも見られず、感情が感情によつて動いてゐるのです」

客「一寸六ヶ敷くなりました。早い話が、氣分がよい時には、酒の友に對して氣をおかずに振舞つたといふのでせうか」

主人「それです、それです。そんな時には宗匠芭蕉の姿もなく、又おつとり取りすました芭蕉の顔でもなかつたといふのです。そんなことが度々あつたらしく思はれます。それを私は性質の使ひわけなどとは云ひたくありません。これは酒飲みにして、容易に察知し得るところのもので、あなたも御承知のやうに、堅くなつて飲む場合と、くだけて飲む場合との相違であります。どちらかといふと、人間芭蕉の眞の姿は、却つてくだけただけ芭蕉の姿に多く見られますから、われわれには一層親しさがあります。これからその方を少し研究しませうか」

客「それは面白いですね、お話願ひます」

主人「貞享四年芭蕉が四十五歳のときです。その年の暮に、郷里伊賀の無名庵に猿雖・土芳・風麥其の他の親しい人々と酒宴を張つて、心を慰め合ひました。勿論郷里の人々との酒盛りですから、少しも氣を置くところはなかつたでせう。そのためにとうとう元朝を寐過してしまひました。そのときの句が

二日にもぬかりはせじな花の春

です。こうした屈託のない自由な心境——舊友に逢ふたよろこび、それから酒のうまさ、その折何等の心構へも持たず、その境地に浸るといふころ、これが芭蕉の眞の心でなくて何ですか。或ひは不用意といへば不用意であるかもしれませんが、不用意を責める人は本當に芭蕉の心を知らないではないでせうか。私どもの場合を芭蕉に比較するのは、或ひはおこがましいことでせうが、私どもが東京の俳人、即ち周圍の俳人と酒を酌むとき、自分より目の上の人、若しくは目下の人と酌む場合は、多少氣を置くやうに思はれます。それが同輩ですと、全く寛いで飲めるといふことになりませう。それは多少自分といふ立場に、不知不識支配されるからではないでせうか。然るに郷里の俳人と酌むに至つては、全く氣が弛むといひますか、何も彼もお構ひなしといふ氣持になつてしまひますね。それは故

郷といふものが、影に大きな力を持つてゐるからでせう。即ち温かさ親しさといふものが、又一段と遠つてくるためであらうかと存ぜられます。従つて芭蕉の場合などもよく推察出来るのです」

客「微妙ですね、酒の場合だけは何としても、理窟ではわかりません。それから人々によつても状態が異なりますから、かうであるからさうなる、といふ式には参りません。私も少し行けますから、それはなしに芭蕉の氣持が理解出来ます」

主人「酒の好きな芭蕉は、到るところに發見されます。貞享二年深川の芭蕉庵にゐて獨り靜かに酒を酌んで月を愛し、雪を賞してゐたといふことは、『本朝文鑑』に閑居箴を作つてゐたといふことによつても推察されます。

酒のめばいとゞ寐られぬ夜の雪

はその頃の句であらうと思ひます。又貞享五年八月のことですが、木曾の月見へ向ふ途中、或る宿舍に於て、同行の越人と道連れの僧と三人して月見をしたとき、蒔繪のしてある盃を手取るや、喜びあふれて

あの中に蒔繪書たし宿の月

といふ句をしたゝめたではありませんか。それから貞享五年の春、萬菊丸即ち杜國と吉野の花見に赴

き、曾つて其角が作つた

明星や櫻さだめぬ山かつら

の句を想ひ出して羨望に堪へず、成程其角は酒を飲んでこそ、このやうな名吟を吐けたわけであると痛く感じ、いつぞや飲酒一枚起請を寫して、大酒を戒めたことは確かに人を見ざるの忠告であつたわい、とつくづく自分の輕卒を省みたやうであります。勿論それからといふものは、其角に酒の苦言をおくるところか、反對に酒をすゝめたといふことであります。流石は詩人芭蕉ではありませんか」

客「ほうう、話せる芭蕉ですね、そこまでものわかりがいゝとは思ひませんでした。そんなに人情味のある芭蕉でしたか。私はもう少し頑固なおぢいさん、厳格なおぢいさん、瘦せ衰へた神経質のおぢいさんかと思つてゐました。従つて飲めば酒友とゝもに酔ふ、といふやうなあたゝかさは見られぬ人と考へてゐました。今夜から私も芭蕉觀を少し訂正してゆきます」

主人「といつても、蕪村や一茶のやうに、全然氣をゆるして飲む、謂はゞ市井の凡人と同じになつて、踊つたり唄つたりするほどに酔ひ潰れるものではありません。其處には芭蕉独自の品といひませうか、性格といふやうなものがありますから、蕪村や一茶と同様に眺めてはなりません」

客「蕪村や一茶はわれわれと同じ酔ひ方ですか。簡単に云へば、芭蕉とはどんなところが違ひます

か。先づ蕪村や一茶の泥酔模様を聞かせていたゞき度いですね。それも一つづつで結構ですから」

主人「芭蕉の例は先きに話しました通りです。元朝を忘れて寐過ごしたとはいつても、あなたが想像されましたやうに、實に穩かな酔ひつ振りです。それが一生涯の不覺と申しませうか、一番徹底した酔ひ潰れです。それに較べて蕪村は、われわれが日常酒場で目撃しますと同じやうに、酔へば近所お構ひなしに話をしかけ、やがては共に唄ひ、共に踊るといふ始末であります。本當に酔ふと、畫人であることも俳人であることも打忘れ、市井の一吞兵衛になり切つてしまふのです。甚だ愉快ではありませんか。よい方に解釋すると、酒の效能が十二分に發揮されるとでも申しませうか。併し溜つた家賃の支拂も忘れ、家族の生活のことなども忘れて、有金を全部酒と女に費してしまふのですから家庭上から見ると、芳しい酒飲み部類には入れられませんまい。こんなところが蕪村の徹底した飲み方でせうか。次には一茶ですね、一茶は酔ひ潰れて、小便を洩らしてしまつたといふやうなことを云つてゐます。非常にだらしないぢやありませんか。芭蕉・蕪村・一茶とこんな風に違ひます。お互氣を置かずに酒を飲むにしても、芭蕉はどこか違つて居りませう」

客「芭蕉は本當に酒が好きであつたかどうか、こんなところが多少疑問ではないでせうか。して、好きで好きで堪らなく飲む、といふことが幾度もあつたでせうか」

主人「私は本當に好きであつたらうと思ひます。いや芭蕉は並々ならぬ愛酒家であつたらうと思ひます。第一、酒を贈られたゞめの禮狀やら、酒の馳走に對する禮狀の多いことが、何よりもこれを物語つてゐるではありませんか。更に油の如き美酒を所望してゐるあたり、本當の酒飲みでなくてこんなことがありますか。或時は尾張の門人から酒一樽を貰ひ、或時は敦賀の種の濱に於て酒を煖め、或時は琵琶湖上の舟遊に酒を以て興する等々、こんな例は數へたてられぬほど多くあります」

客「俳人にありさうなことですね、まして宗匠なら尙更ありさうなことゝ察せられます」

主人「あなたは同意して居られるのですか、それとも事實らしくはあるが、信じられないとおつしやるのですか。若し信じられぬと云はれるなら、最後の切札のやうな事實を提供いたしませう。それは

頼むぞよ寐酒無き夜の紙衾

どうです。これで芭蕉が愛酒家でないとは云はれないでせう。まさか伊達や愛嬌では、こんな句を作れないでせう」

客「わかりました。敢て信じなかつたといふのではありませんが、これぢや無理にも信ぜざるを得なくなつてしまひました。酒飲芭蕉と呼びたくくなりましたが如何でせう」

主人「それは御隨意に、但し芭蕉は大酒家ではありません」

客「さうでせう、胃が弱かつたこと、それから身體が虛弱であることから、私もさう思つてゐました」

主人「それもさうですが、大酒を慎んだといふ理由はもう一つありませう。それは即ち奔放に走ることを、絶えず警戒してゐたらしく思はれるのです。あなたがち趣味性や嗜好を満足させる程、生活に餘裕がなかつたといふばかりではなく、世に處するわれとわが身をよく辨へてゐたから、自由奔放に傾かなかつたものと云ひ度いのです」

客「よくわれわれも聞きますが、酒を愛しながら、しかも上手に飲んで行ける人があります。芭蕉もさういつた人でせう」

主人「さうです、何時かお話しましたやうに、内藤露沾侯の前では、好きな煙草も遠慮したといふくらゐですから、酒に對しても充分禮儀を重んじたことゝ推測されます」

客「今度は俳諧や發句に、酒をどんな風に詠んで行つたか、それを伺ひませう。案外そんなところから、芭蕉の素顔が見出されるかもしれません。殊にわれわれ俳人が句作する場合などにも、非常に參考になるものと思はれます」

主人「さあ、さう云はれますと困りますね。酒と芭蕉とか、酒の句と芭蕉などゝいふことに就いては、

未だ論じた人もないでせう。私は芭蕉の性格を解剖してみる關係上、酒の句を丹念に調べてみたことがありました。併しそれはすつと以前のことです。けれども酒の句に就てならば、ぼつぼつと申上げることも出来ませうが、最も重要な俳諧、その連句の中から酒を選ぶとなれば大變なことです。これからあの數多い連句を、一々読み直さねばならぬといふことになります。さうなると十日や二十日はかゝりませう。又酒のことを調べんがために、たゞそれだけに連句を読み直すことは、到底今の私には出来ませんよ。どうしませう」

客「連句は聞かなくとも結構です。いや聞きたくありません。これは私ばかりでなく、現代の俳人は大抵さうだらうと思ひます。よい幸ひですから、連句には觸れず、酒の發句だけに就いての御感想を承り度いのです」

主人「實際は連句の方に芭蕉の主力があるのですから、發句よりは連句が大事なんです、今回は止むを得ぬことゝして、酒の發句だけに就いて、出来るだけ詳しく申上げませう。一つ一つ句を解釋し又解剖もしてみませうか」

客「是非さう願ひます」

主人「今頭に浮んだところ、次のやうな句があります。」

川舟やよい茶よい酒よい月夜
花に浮世我が酒白く食黒し
頼むぞよ寐酒なき夜の紙衾
酒のめばいとゞ寐られぬ夜の雪
飲みあけて花いけにせん二升樽
御命講や油のやうな酒五升
柴つけし馬のもどりや田うへ樽
夕顔や酔うて顔出す窓の穴
少しくどいかもしれませんが、一つ一つ解釋してみませう。

川舟やよい茶よい酒よい月夜

どうですか、讀めば大凡の景色が浮かんでくるではありませんか」

客「川に舟を泛べ、よい茶を飲み、よい酒を飲み、而して後によい月を眺めるといふ。三拍子も四拍子も揃つたところ、實にうまいことを云つたものですね」

主人「さうですよ、酒が句の中心をなしてゐるわけではありませんが、舟遊びに無くてはならぬ酒、



又月見に無くてはならぬ酒、何といつても酒飲みでなければ、こんな句は作らんでせう。「酒なくて何のおのれが櫻かな」先づこういつた式で、酒が、それもうまい酒が無かつたならば、舟遊びも、亦月見も気が抜けたやうなものでせう。平凡ではありますが、こゝを突つ込んで詠んだのが、この句であります。凡そ風流三昧とはこんなところでせう。古來俳人が世間離れをしてゐるとか、世事に屈託なくのんびりしてゐるなど、云はれるのは、要するにこんな境地を追ひ求めてゐるからでせう。實際一生涯をこんなことをしながら、こんな句を作りながら、悠々と送つていけるのでしたら、誰しも羨むのは無理がないでせう」

客「さうです、現代は、殊にわれわれ如き俳人は、とてもそんなことが夢にも實現されませんから、せめてこんな句を読み味つて満足するくらゐのところではせう」

主人「次の句に移りませう。読んでみますか」

花に浮世我が酒白く食黒し

少し六ヶ敷いでせう」

客「何を云つてゐるのかわかりません。馬鹿に六ヶ敷い句を作つてゐるものですね」

主人「この句には

憂方知酒聖、貧始覺錢神

といふ前書が附いてゐます。即ち白氏文集の

草合門無徑、煙消甌有塵、憂方知酒聖、貧始覺錢神

から取つたものです。この前書の意味は、憂のあるときには酒の聖なるを知り、貧乏のときには始めて錢の神なるを覺ゆといふのであります。つまり芭蕉自身の境遇を句に寄せたものでせう。さて句の意味は、世の中は今や花が咲いてゐて、人々の心は浮き立つてゐるにも拘らず、自分は色のない水のやうな白い酒を飲み、黒い飯を食つてゐるのである。しかしこれが浮世であるから、誰に不平を言はう、不平などは言はれない、といふやうなところであります。こゝに於て酒ですが、芭蕉は確かに油のやうにこくのある酒を飲みたかつたでせう。いや私だつて、水の様な酒を浴びるほど飲むよりは、こくのある酒をちよつびり飲む方が、どれだけうれしいかわかりません。酒が聖とは、偉いことを云ひましたね、私も同感です。私などは憂がなくても、共鳴することが度々あります」

客「私も共鳴いたします」

主人「さあ、餘り陶醉してゐないで次へ移りませう」

頼むぞよ寐酒なき夜の紙衾

これはどうですか、直ぐに御わかりでせう。今時紙袋でもありませんが、酒が無くて困つたなあ、もう午前二時ちや酒場もカフェーも起きては居まい。仕方がないから寐るとしようか、寒いから蒲團でも餘計に被よう、と思ひつゝ蒲團を撫でゝやるがあります。それでも私は家内を起して、一合でもよいから酒を頒けて貰つてくるやうにと、あつちのカフェー、こつちの蕎麥屋へと走らせたことがあります。全く酒と心中したいやうな、こんな氣持は、どうしてどうして普通の氣持ではないでせう。この句にあらはれた芭蕉の氣持も、手に取るやうにわかります」

客「寐酒のうまさ、私はまだ其處までは達してゐませんが、充分に推察が出来ます」

主人「それでは次の句に移ります」

酒のめばいとゞ寐られぬ夜の雪

これは又酒のみに似合はぬことを云つてゐる、と思はれるでせう」

客「本當です、前の句とは正反對ではありませんか。これでも同一人の作か、と不思議に思はれてなりません」

主人「それにはいはくがあります。又成程と思はれるところもあります。これには御存じかもしれませんが、「閑居箴」といふ前書が置いてあります。その閑居箴とは

あらものぐさの翁や、日頃は人のとひくるにもうるさく、人にもまみえじ人をもまねかじとあまたたび心にちかふ。されど月の夜雪のあしたのみ、友のしたはるゝもわりなしや。物をもいはず、ひとり酒のみて、こゝろにとひこゝろにかたる。庵の戸おしあけて雪をながめ、又は盃をとりて筆をそめ筆をすつ。あら物くるおしの翁や。であります。これで御察しがつきますやうに、深川の芭蕉庵に雪が降つたゝめ、その寒さを凌ごうとして、酒をあたゝめ飲んだのでせう。ところが飲み過ぎたのか、それとも身體の調子がよくなかつたのか、反つて酒が邪魔をして、どうしても寐むることが出来なかつたといふのです。如何に酒の好きな人でも、かういふことは間々あります。勿論俄かの寒さのせいもありますやうが、それよりは鬱々として氣が晴れなかつたためであらうと思はれます」

客「さうですか、閑居箴に洩らした芭蕉の心的状態からして、成程と領けます」

主人「次には

飲みあけて花いけにせん二升樽

であります、この作は、尾張の俳人から酒一樽と、獨活・茶を贈られたときに出来たのであります。即ちこの美味しい酒をみんなで賞味し、そして飲みあけてしまひ、やがて樽があいたならば、花活けにしたいものである、といつてその厚意を謝してゐるところが見られます」

客「贈つて貰つた酒なるがゆゑに、酒を褒めるのは當然でせうが、明樽を花活けにしようとは、芭蕉もなかなかぬけのないことを云つておますね。餘りにお世辭が上手過ぎるではないでせうか」

主人「いやそれは芭蕉の思ひ付きではなく、漢詩に『酒瓶今既花瓶』といふのがありますから、それを芭蕉が拜借したといふわけでせう。それはそれとしても、芭蕉が酒が好きだからこそ、かうしたことに氣が附くのであります。酒飲みの芭蕉、風流な芭蕉が髣髴として來るではありませんか」

客「このごろは養命酒・泡盛・支那酒其他いろいろ、全く珍らしい酒瓶が多く、素敵な花瓶をなしてゐるのを見うけますが、芭蕉にこの句があつては、もう詠んでも無駄なことになつてしまひました」

主人「先づこのくらゐにして、次の句に移りませう」

御命講 や 油 の や う な 酒 五 升

とは何かいはれがありさうでせう。たゞこの句を読んだゞけ、聞いたゞけでは、何が何だかわからな

いませうね」

客「その通りです。御命講とは歳事記で知りましたやうに、十月十三日日蓮宗の寺院にて御影講を修せらるゝこととせう。それにしても油のやうな酒五升と何の關係がありますか、これは私ばかりでなく、故事を知らぬ人には解せられない句でせう」

主人「さうかもしれませんが。それでは解説しませう。この句は日蓮上人の報書

新麥一斗筭三本油のやうな酒五升南無妙法蓮華經と回向いたし候

から來た句であります」

客「さうですか、そんなところですか。それちや御命講や、と季題を持つてきたゞけで、あとは『油のやうな油五升』とそのまゝ文字を拜借したゞけのものですか。さうすると句意は、御命講だから日蓮様のやうに、さういつて回向しようといふのですか、それとも御命講であるから、油のやうな酒五升を得たいといふのでせうか」

主人「今日は御命講だ、あゝさう云へば、日蓮様の報書が思ひ出されるわい、といふやうなところでせう。即ち酒の好きな芭蕉であるから、直ぐに『油のやうな酒五升』と思ひ出し、それを句に入れたといふまでのこととせう。こんなところにも、うまい酒を飲みたい、といふ芭蕉の心が覗かれるではありませんか」

客「次にはどんな句がありますか」

主人「もう三つ四つあります」

柴 つけし馬のもどりや田うへ樽

これは芭蕉が眺めた光景を、そのまゝ句にしたものでせう。改めて説明を施すまでもなく、柴をつけてきた戻り馬が、田植酒を御馳走になつてゐるといふやうなところ、と見てよいでせう。次にこんな句があります。

夕顔や酔うて顔出す窓の穴

これは芭蕉自身を詠んだものでせう。即ち夕顔の咲いてゐる小窓に、ほろ酔ひの顔をさらしたといふところですか。窓の穴から顔を出すとは、なかなか趣のあるところを詠んだものです。次には先刻申上げなかつたと思ひますが、

ますほの小貝ひろはむと種の濱に舟

のり出たり法花寺にあがりて酒のむ

浪の間や小がひてまじる萩の塵

いろの濱に誘引れて

小萩ちれますほの小貝小盃

などといふ句があります。句は説明するまでもないでせう。次には

おなじ年九月九日乙州が一椀をたづさへ來りけるに

草の戸や日暮てくれし菊の酒

の句があります。これは泊船集といふ本に「此句は乙州が酒を携えて來りし時の事なるよし」と記してあります。普通ならば九月九日重陽の佳節でありますから、朝早くから此日を祝ふのですが、芭蕉は隠者であるところから、日が暮て後、菊の酒を貰つたと述懐してゐるところでせう。それから

榎の實や花なき蝶の世捨酒

といふのがあります。これは桑の實で造つた酒に對する、芭蕉の感想を云つたゞけのことで、蝶々に花が無いやうに、桑の實で造つた酒は、全く世捨酒ともいふべく、人々から忘れられてゐる、と云つてゐます。まあどちらかといふと、酒の味などは第二のことで、たゞ世捨酒世捨蝶などの、所謂物や文字の配合に面白味を感じて作つたものでせう。それから又こんなのがあります。

伊羅古に行道越人酔て馬に乗る

ゆきや砂むまより落て酒の酔

これは芭蕉と越人が、伊良古崎に流配されてゐる杜國を問ふときの途中に出來た作でせう。寒いので二人とも酒を飲んだのでせう、ところが越人は大分酔つたと見えて、馬に乗つてゐたのに、雪の降る道、砂埃の吹く道に轉げ落ちてしまつた。そのときは雪にまみれ、又砂にもまみれたこととせう。芭

蕉はこの光景を早速句に移したのであります。又こんな句もあつたやうです。

名 月 や 雨 に 深 川 酒 う す し

勿論これは果して芭蕉の作かどうかわかりませんが、芭蕉の句であらうとして傳へられてゐます。た
いした句でもなく、又説明を加へるほどの句でもありません。これで大體私の知つてゐる酒の句
は、お話したやうな氣がします」

客「そんなに澤山あらうとは思ひませんでした、相當あるものですね」

主人「私ばかり随分勝手にしやべり散らしましたが、おわかりでしたか」

客「大體わかりました。けれども酒が好きであつた割合に、案外酒の美味さを句に表現出来なかつた
ものですね。芭蕉ともあらう名人ですから、もう少し深く、酒の味を句にあらはして欲しかつたです
ね」

主人「それはさう思はれますが、芭蕉は敢て酒の美味を句に入れよう、などと意識を働かせなかつた
やうです。又反對に酒の句はなるべく作らぬことにしよう、なども思はなかつたやうです。要する
に酒を特別扱ひしなかつたといひませうか、酒に捉はれなかつたものと見てよいでせう」

客「もう充分承りました。又々今夜も貴重な時間を運くまで割いていただき、本當にありがたう御座

いました。それではこれで失禮させていただきます」

喜 怒 哀 樂

主人「今夜は何を話しませうか。大分芭蕉に就て申上げたやうですが、日數が未だ幾らも経つてゐま
せんから、割合に話は進んでゐないですね」

客「度々で恐縮とは存じますが、もう幾回か御講述を煩はし度いと思ひます。今夜は芭蕉の感情、詩
人的に又個人的に、喜怒哀樂の感情がどんな程度であつたか、つまり感情を露骨に現はす人であつた
か、抑制した人であつたか、それに就て詳しく承り度いと思ひます」

主人「それではぼつぼつと進めて参りませう。こんなことは今更申上げるまでもありませんが、概し
て詩人は喜怒哀樂の感情が露骨にあらはれるものです。いさゝか講義めいて御迷惑でせうが、吾が國
の歌、即ち我が發句の祖先ともいふべき萬葉歌そのものなども、當代の人々の朴訥なる感情、云ひ換
へれば喜怒哀樂の感情、がそのまゝ歌になつたといふべきであります。さうなるとわれわれの發句
も、その本質はわれわれの喜怒哀樂の反映でなければならぬ、といふことになりませう。この論法か

ら推せば、喜怒哀樂の感情が激しい人ほど、名句を吐けるといふ結果に到達いたします。従つてわが芭蕉は正風の樹立者であり、日本が生んだ大俳人でありますから、いふまでもなく、喜怒哀樂の感情はとても激しかった、と決定してもよいことになりませんか」

客「さうです、若しその見方が眞なりとすればですね。とはいひますものゝ、さう簡単に片付けてよいものでせうか」

主人「さう行かぬところが、人おのおのといひませうか、面白いところでもあり、研究すべき價値のあるところでもあります」

客「それではそこをお願いします」

主人「さあ、待つてゐましたといふわけではありませんが、愈々芭蕉に觸れることゝしませう。芭蕉も御多聞に洩れず、喜怒哀樂の感情は相當に激しかったと見てよいでせう。併し今迄度々申し上げましたやうに、相當苦勞をした人でもあり、又生活的に、或ひは俳諧地位的になどといふ意識も、それはなしに影響しましたゝめか、生まな感情が随分抑制されてゐます。否強いて制することに努力もしたやうであります。従つて普通に考へると、甚だきざな人間のやうに見られませうが、そこは芭蕉であるだけに一寸違つてゐます。それがどう違つてゐるかといひますと、對人的には喜怒哀樂の感情が

非常に洗練されたといひませうか、抑制すべき場合は抑制し、激しく現はしてよい場合は激しく現はしたのであります。これに反して、自然相に對しては、飽く迄生まの喜怒哀樂を以つてのぞんでゐます。こゝが即ち俳人として大成功を博し得た所以でありませう。何故ならば人々からは實に素直なよい人として讃えられ、他方向作に向つては、常に眞實の句を把握することが出来たわけであります」

客「それでは具體的に一二の例を擧げて、御説明を願ひたいものです。先づ詩人的な生まな感情の見られるところから話していただきます」

主人「或時俳諧の座に於て、徒然なるまゝに爪に文字などを書いて居るものがゐるので、それを見るなり、酷く叱りつけたといふことであります。これは皆が熱心に句を案じてゐるにも拘らず、ふざけた眞似をしてゐると見たゝめ、俄かに腹立たしくなつたものと思はれます。こうした嚴格な態度、尙云へば露骨な感情表現が、芭蕉にはどんな結果をもたらしたか、それを考へてみるのも相當意義あることかと思はれます。普通だつたら、氣の短かい師匠である、と憤慨して逃げ出してしまふかもしれない。それにも拘らず芭蕉の場合は正反對である。芭蕉の叱責によつて一座は益々緊張し、蕉風運座の眞面目は一段と光りを添へてくるのです。そして叱られた本人は芭蕉を怨むでなしに、却つて申譯ないことをしたと思つて、一層芭蕉を敬ひ、熱心に句を案ずるといふ次第であります。何故さうなの

か。それは芭蕉の叱り方にあるのです。私は聞いてゐたのでないから、どんな叱り方をしたか知らないが、厳格なる叱責の中にも、どこか違つたものがあつたに違ひありません。こゝが芭蕉のとくなくところですね。或ひは持つて生れたところか、それとも後天的のものか、それは一寸簡単に片附けられませんがね」

客「常平生は非常に門人を可愛がり、親切である芭蕉がたまに叱るから、そんな好結果を得るのではないでせうか」

主人「それもありませう。時々しか怒らんでせうが、その時々になまな感情があらはれるわけです。さういへば、高弟其角の如きが、芭蕉の側に居るのを窮窟がつたといふやうなことは、確かに芭蕉の生まな感情が現れるので、それを氣にして落付けなかつたではなからうかと思ひます。たとへさういふ性格を呑み込んでゐても、藝術上の師弟關係などにあつては、親しくなればなるほど、生まな感情の露出をおそれ、若しや豫想外に爆發することがあつては、などと餘計に氣を廻すことが多いのではないかと思はれます。それだけ芭蕉には威厳もあつた、と見なければなりません」

客「それは芭蕉に有利な結果を招いたものでせうか」

主人「勿論有利ですとも。たとへどんなことがあらうとも師は師です。然るに親しくなればなるほど

師の影が薄れ、友達同様に遠慮會釋もなくなつたらどうです。ちつとも師の値打がなくなり、有難がらなくなつてしまひます。やがては師の俳句を學ばないのみか、師の句をいい加減に取扱ふことになります。其結果は門葉の宣傳どころか、蕉風樹立など迎も出来るものではありません。芭蕉が何時まで経つても、如何に親しくならうとも、門人と同和しないところを持つてゐたといふのは、或ひは偉いといふのはおかしいが、大俳人たるの資格を具へてゐたといふべきであります」

客「それでは可成寄りつき難い性格を持つてゐたやうですから、師芭蕉の方から門人へ呼びかける、といふやうなことは滅多にありませんでせう」

主人「いや、それは違ひます。厳格なところは嚴格に、同和すべきでないところは同和しません、といつてそれを明瞭に意識してゐるのではなく、どちらかといふと我慢に近い、喜怒哀樂の露骨な現れであつたやうに見られるのですから、時には門人に對しても、肉身以上の哀樂を感じてゐることが尠くありません。例へば罪を得て流在されてゐる萬菊丸こと杜國を、わざわざ雪の道を引返して尋ねてゐること、又無節操なために同門から排斥されてゐた路通の行末を案じて、臨終の際に依頼したと、又恩を仇で報いた荷兮を自ら訪ふて、温情をふりかけてやつたことなど、親兄弟の愛情すら及ばない親切が、到るところに見出されます。かうした師弟の關係についての詳しいことは、いづれ別の

機會に於て申上げることゝしませう」

客「前の説法で行きますと、それにはそれ相當の理由があつたからではないでせうか。殊に萬菊丸を慰問したことや、恩を仇で報えた人を、わざわざ芭蕉が訪問するといふやうなことは、どうも普通の親切、唯門人を愛する師の心だけとは受取れないやうですが」

主人「さういふ様な見方も、至極御尤もとうなづけます。けれども其處まで押しつけずに置いても、よいやうな氣がいたします。といふのは、芭蕉の露骨な哀樂感情、例へば、『折角こゝまで來たのだ、あれ（萬菊丸・荷兮など）に逢つて行かう』といふ心が主になつて、さうした行動を採らせたものと見られるからであります。それから『あれには會つて置いた方がよい、是非會ふとしよう』などといふ氣持は、第二次的のものであらうと見たいのであります。若し或る特定の人だけに限つて、さうした氣持が働いたに過ぎないとしたならば、其處には必ず權謀術策が秘められてゐたもの、と推定しなければなりません、さうでないのです。大人に對しても子供に對しても、又身内の者に對しても他人に對しても、又王侯貴族に對しても乞食に對しても、餘り隔てのない感情を披瀝してゐるのです」

客「それは間違ひなく禪を修得した影響で御座いませうね。それから俳諧練達に伴ふ修養で御座いませうね」

主人「それも間接の影響には違ひありませんが、最も直接的なものは、喜怒哀樂の感情表現が洗練されてゐるところへ、搗てゝ加へて、童心的なる純粹性が混つたからではあるまいかと思はれます。一寸やゝこしい言ひ方になりましたな。これをもつと端的に云ひますと、私の申上げた直接的な影響にあなたの云はれたる間接的な影響も加はり、しかも芭蕉が持つて生れた童心的な、よい性格が影響して、其處に俄かに解剖の出來ない獨特なものが構成された、といふわけのものであります」

客「それではその、童心的な純粹性の見出される例といふやうなものは」

主人「さう遠かに云はれましても困りますが、例へば茶屋女の乞ふまゝに句を書いてやつたり、伊勢へ行く越後の遊女に同情して、旅の安堵を計つてやつたりしてゐることなどもさうでせう。それから子供を持つたことのない芭蕉でありながら、童心的な行爲行動のあらはれは、隨分澤山あります。しかもその一つ一つが、芭蕉の心の底からなる哀みであり樂しみであります」

客「それは初耳です。是非聞かせて貰はねばなりません」

主人「それ、御承知でせうが、野晒紀行にあるではありませんか。讀み上げてみますか」

富士川のほとりをゆくに、三ばかりなる捨子のあはれけに泣くあり、此川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨置きけん、小萩がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすやしをれんと、袂よ

りくひ物なげて通るに

猿を聞く人拾子に秋の風いかに

いかにぞや汝父に憎まれたるか、母にうとまれたる歟、ちよは汝を惡にあらじ、母は汝をうとむにあらじ、只れ天にして汝が性のつたなきを泣け

と捨子を見て落涙萬斛、深刻なる心情を吐露してゐるのであります。又良寛和尚ではないが、芭蕉は特別水雞笛・鹿笛・時鳥笛などの玩具を愛してゐたやうです。或時子供が寄つてたかつて、芭蕉に水雞笛を吹いて呉れとせがみます。そこで芭蕉はこれを吹いてやります。或る書簡の一節にも

然は御約束之水雞笛贈給恭珍重存候、此さとの人々聞馴ず、女子共も集り我を藝者の様に申しをかしく候、行脚先國所により、一向音をしらぬ人御座候間、吹て聞せ可申と悦び申候、鹿笛も木曾より貰ひ申候、時鳥笛も御座候はゞほしき物に候

などゝあります。若し水雞笛を御覽になりたければ、御見せいたしませう。先年伊賀へ芭蕉を調べに行かれた葭汀氏から、お土産に貰ひましたのがあります」

客「後に見せていただきますませう」

主人「何と童心に充ちた芭蕉ではありませんか。童心といへば、山中に子供と遊び戯れて

初雪に兎の皮の髭作れ

いざ子供走りあるかん玉霰

などの句をものしてゐます。思へば子供を誘つて、兎の髭を作つて喜び、降りくる霰の中に遊び戯れることが出来る、この天真爛漫なる心が芭蕉の底を流れてゐたに違ひありません。それからおかしいことには、許六の「宇陀法師」にも記してありますやうに

例の鼻をくん／＼と吹き鳴らして喜ばれたり

と。こうなると全くおかしさを通り越して、子供じみた振舞ひではありませんか。更に芭蕉にはこんな心もあります。

乙州上津之節、御細翰忝なく存候、其元大雪之由、一尺許は此方へ申請度候

洒落といへば洒落でせうが、他愛のないことを云つてゐるではありませんか」

客「かうまで茶目氣があるとは知りませんでした。實は子供を持たぬ芭蕉に無理な注文かもしれないが、若し芭蕉に稚氣満々たるところがあつたならば、どんな句を作つたであらう、などゝ想像してみることがありました。私はこれから芭蕉の句を見直してゆくことゝします。今までは餘りに冷たく厳しく見過ぎて來たやうであります」

主人「さうでせう、蕉門の傑士小川破笠が名優市川栢庭に語つたといふ言葉として、『老の樂』といふ本の中に

嵐雲なども俳情の外に、翁をはづし逃げなどいたし候よし、殊の外氣がつまり面白からぬ故なり

など、ありますからね。あの濃厚謹嚴そのものと見られる嵐雪が、芭蕉と對座してゐることが氣苦しいと云ふくらゐですから、以て芭蕉の嚴格、いや全く融通の利かぬ人だつた、と見られるのも無理からぬこととせう。話が大分中心を外れて來たやうです。もとへ引き戻しませう」

客「捨子に泣いた芭蕉、そして芭蕉の童心を聞かせて貰ひました。それでは芭蕉は、自然に對して涙を注ぐことが多かつたか、人事に對して涙を注ぐことが多かつたか、それを伺ひませう」

主人「昔から文人は案外つまらぬことに、泣いたり笑つたりしてゐます。それは本當かどうかわかりませんが、文字の上ではさう見えますね。宗鑑・貞徳なども先づこの類のものであると見てよいでせう。従つて芭蕉の發句に全然この流れがないとは云はれませんが、芭蕉は人間本然的な感情を割合克明に表現した作家であります。こゝが蕉風の蕉風たるところでありませう。發句を暇潰しの道具とせず、といつて藝術のための藝術に捉はれもせず、自然との交感による自分の姿を詠まうとしたのですから、自然自己本然の叫びが加はつてくるといふやうなわけでありませう。芭蕉をして何がさうさせ

たか、これを解かねばなりません。芭蕉が俳道に自覺するところがあつたといふのは、第二のことと、その第一は、後天的性格が支配する靜・淡・暗といつたやうな、境遇がさうさせたのではあるまいかと思はれます。勿論これが蕉風を樹立させることとなり、蕉風の方角も決定してくれたのであると信じます」

客「その通りと思はれます」

主人「あなたもさう思ひますか。私はこれを證明するのに、最も手近な例として、芭蕉の涙を見ればよろしいと思ひます。俳諧・發句は勿論のこと、紀行文を展げて、或時は哀愁に泣き、或時は有難さに泣き、又或時は嬉しさに泣いてゐます。こゝまでは普通でせう。必ずしも文人でなくとも、誰れでも人間生活的なものに關しての落涙は、多い筈であります。芭蕉は家庭らしい家庭をも持たぬのだから、この人事的・生活的な事に關しての落涙は、凡そ欠くところがあらうとさへ思はれませう。それにも拘らず、芭蕉は人事にも自然にも、等しい涙の感情を灑いで居ります。これはいふべくして行ひ難いものです。それが一二の例ではないのですから、單に感情の矯飾として見放すことは許されませう」

客「それでは實證するに足る例を示していただきます」

主人「例へば郷里伊賀の實家を訪ふたときのことです」

北堂の萱草も霜枯て、今は跡だになし。何事も昔にかはりて、はらからの鬢白く、眉皺寄て、只命ありてとのみ言て、詞はなきに、兄の守袋をほどきて、母の白髪拜めよ、浦島が玉手箱、汝が眉もや、老いたりと、暫泣て

手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜

この熱い涙、讀む人をして、忽ち目頭を熱くさせます。それから奥之細道行脚に於ては

衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る、康衡等が舊跡は、衣ヶ關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり、借ても義臣すぐつて、此城にこもり、功名一時の叢となる、國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打ち敷て、時のうつるまで涙を落し待りぬ、

夏草や兵どもが夢の跡

と多涙多感の句を吐いてゐます。尙ほ壺の碑を眼前にしては

山崩れ川流れて、道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至つて疑なき千歳の紀念、今眼前に古人の心を閲す、行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の勞をわすれて、涙落つるばかりなり、

と暗涙に咽んで哭泣してゐます。次に一の谷の古戰場にイみては

鉢伏のぞき、逆落しなど、おそろしき名のみ残りて、鐘懸松より見下すに、一の谷内裏やしき目の下に見ゆ、其代のみだれ、其時のさわぎ、さながら心にうかび、佛につどひて、二位のあま君皇子を抱き奉り、女院の御裳の御足もたれ、船やかたにまろび入らせ給ふ御有様、内侍局女嬭曹子のたぐひ、さまざまの御調度もあつかひ、琵琶などしとねふとんにくるみて船中に投入れ、供御はこぼれてうるくつの餌となり、櫓筒はみだれて、あまの捨草となりつゝ、千歳のかなしび此浦にとまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや

とそゞろに往時をしのびて涕泣し、吉野紀行に於ては

吉野の花に三日留りて、曙黄昏の氣色にむかひ、有明の月の哀れるさまなど、心にせまり胸にみちて、或は攝政公の眺めに奪はれ、西行技折にまよひ、かの貞室が是はくくと打なべりたるに、我いはん言葉もなく、いたづらに口をとぢたる、いと口惜し、思ひ立ちたる風流いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり、

と感激動情の極致に、口を閉ぢてゐます。又

貞享五年きさらぎの末、伊勢に詣ず、我白州の土を踏むこと、既に五たびに及び侍りぬ、ひとつくとしのくははるにしたがひて、かしこきおほん光りも思ひまされる心地して、かの西行の跡をしたひ、増賀のまことを悲しびて、内外の御前にぬかづきながら、衣をしぼるばかりになん侍る

何の木の花とはしらす匂ひ哉

と神靈聖賢の上に涙を漉ぎ、又此の間申述べましたやうに、高野山に登りては

此處は多くの人のかたみのあつまれる所にして、我が先祖の鬢髪をはじめ、親しき懐かしき限りの白骨も、このうちにてぞおもひこめつれど、袂もせきあへず、そらにこぼる涙をといめて

父母のしきりに戀し雉の聲

と靈場に伏して涙を絞つてゐます。更に

此御山二荒山と書しを、空海大師開基のとき、日光と改め玉ふ、千歳未來をさとり給ふにや、今此の御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵のすみか程かなり、猶憚多くて筆を擱きぬ

あらたふと青葉若葉の日の光り

と感極まつて、涙の出づるのをさへ忘れてゐるではありませんか。もうこの邊で止めませうか、随分例を挙げましたな。私も相當草臥れましたが、聽いてゐるあなたもお疲れになつたでせう」

客「勿體ないことです、私は聽いてゐるだけですから、至つて氣樂ですが、一々例を挙げて下さるのは、實際並大抵のことではないと拜察いたして居ります」

主人「もつと時間があるならば、さうした例を挙げるばかりでなく、一々微細に検討してこそ、本當の芭蕉を眺めることになるのですが、それはなかなかのことでもありますから、御推測を願ふことゝいたしませう」

客「例言だけで充分であります。合點が行かなかつたら、例言を熟讀含味いたします。それでも尙ほ不審なところがありましたら、改めて質問に参ります」

主人「これでどうやら芭蕉の性格の一面、或ひは可成見逃されてゐたかもしれませんが、涙脆い性格を具へてゐたことがおわかりになられたでせう」

客「御蔭様でとてもよくわかりました。一般俳人と違つた性格、不可解なほど複雑な性格でありますため、芭蕉の句は噛みしめれば噛みしめるほど味がある、といふわけでせうね」

主人「確かにこの複雑極まりないやうな性格では、なかなか解剖もしかねる次第です。先年私は精神分析研究家とゝもに、芭蕉を精神分析してみよう、などゝ計畫したことがありましたが、結局精神分析法に捉はれて、こちつけた觀察になりはせぬかとあやぶみ、そのまゝになつてゐます。今あなたが云はれましたやうに、芭蕉の句は、單純な批判をもつてしては、つねに眞を外れる、といふことだけは承知して置かねばならぬことです。今夜申上げたことからがさうぢやありませんか。自然にも人事にも、勿論こゝで申上げる自然はあるがまゝといふことでなく、人事以外の事象を指してゐるのです。實に芭蕉は何も彼も彼もに向つて、同じやうな感情を瀝いでゐる、即ち人だから木だからといふ差別を置かずに、おなじやうな涙を瀝いでゐます。この結果は自然にも人事にも、徹底した俳句を吐けた

といふことになりませう」

客「一般俳人の句とは違ひますね、昔から芭蕉の句が良いと云はれて来たのも、一つはこんなところにも原因がひそんでゐるからでせうか」

主人「とかく一般の文人は、表現文字だけの涙や感激が多いのですから成程さうか、とはうなづけませんが、心から感じさせるといふことが少いでせう。そこはどうして偽れるものではありません。この點芭蕉に、迫力のある人生詩句が、割合に多く見られるといふことがいひませう」

客「それに相違ありませんが」

主人「この邊でそろそろあなたも迷はれるところでせう。私は言ふ毎に、芭蕉の性格を褒めたり貶したりしてゐるでせう。或ひは技巧であるといひ、眞であるといひ、右といひ、左といひ、又黒といひ、白といつて来たやうです。あなたばかりでなく、私の言つてきたことを聞く人々は、誰しもいふかしく思はれるのが當然でせう。そしてどれが本當の芭蕉の性格か、と問はれるでせう。いづれはあなたからも、これに就て詰問があるだらうと思ひ、反問せられる前に、私からこゝにお答へして置くこととさせう。簡単に申し上げます。今迄申上げて来たのが、私の鏡に寫つた芭蕉の性格であります。或ひは嘘のやうで嘘でなかつたり、或ひは偽つたやうに見えたり、或ひは眞偽の間を巧に泳ぐと見えた

り、それはく千變萬化の性格とさへ思はれませう。とかく芭蕉は多感な詩人的素質を備へた人であり、遠慮深く、嚴格で、童心的な柔さを持ち、さうして眞面目な俳人であつたかの如く思惟される人が少くはないやうです。しかし先程も觸れたやうに、洒落味は多分にあつたらしく思はれます」

客「それは又どうしてとせう」

主人「どうしてといふことはありませんが、生れながらではなくて、俳諧の滑稽諧謔が不知不識の間に影響したといふよりは、禪の心境と童心などの發露であることが多いやうに眺められます。例へば痔で長雪隠だつたからでもありませんが、生涯の半ばを後架で暮らしたなどと云つて、人を笑はせてゐます。それから鼻をクンクン鳴らして、人を笑はせたりするではありませんか。尙ほ洒落の發句は、數へ切れない程澤山あります」

客「段々話しは面白くなつて來ますが、といつてこのまゝ聽いてゐると、夜が明けてしまひませう。お伺ひする毎に、言葉通りにお邪魔をしてしまひます。芭蕉ちやありませんが、愛想をつかさねぬうちに歸るといたしませう」

師弟關係

主人「今夜は何をお話しませうか、何か豫定でも御座いますか」

客「實は芭蕉と門人との關係に就いて、いろいろ承りたいと思つて参りました」

主人「それではさういふことにいたします」

客「先づ大雜把に云つて、他の俳人や宗匠と比べてですがね、芭蕉は門人を特別に愛したものでせうか、如何でせう」

主人「私は他の俳人を深く研究してゐませんから、自然蕪村や一茶、それから若干の偉俳人を頭に置いて比較することになります。芭蕉は尤もよく門人を愛した師匠といふことが出来ませう。私が何時も芭蕉を成程々々と思ひ、それだからこそあの大きな正風俳諧を樹立した、門人の悉くから敬仰され、否他派の俳人からも慕はれたのだと思ふのは、實に門人を無差別に見たこと、即ちいこそ最負なしに俳諧を見てやり、又その人を愛して行つたといふことであります。これは口にくそ樂々と云はれますが、實行することは容易なわざではないと思ひます」

客「それは尤もであります。併し門人を平等に見るといふことは、一利あつて一害があるぢやないでせうか。といひますのは、各人頭も違つて居りますでせうし、又職業も違つて居りますでせう。さうした場合、門人が無差別に見られるとしたならば、師の耳には入らぬかもしれないが、門人間に於て不平の起ることは、止むを得ないといふよりはむしろ、理の當然なことゝも思はれますが、さうぢやありませんか」

主人「さう云はれるとさうですが、要するに私の説明が足りなかつたのです。無差別に愛し接するといふことも、嚴密に云へば、盲目的なる無差別愛と、さうでない無差別愛とがあります。例へば親が子を愛するにしても、唯可愛々々で、子供の性格がどんなであらうとお構ひなしに、一様に愛してゆく親もあります。それから愛してゆくことに於ては變りはないのであるが、子供の性格を見ることは勿論、時と場合によつて、それに順應した愛をふり注いでやる親があります。この結果はどうです。前者は多くの場合、出來損ひの人間、親不幸の人間となり、後者は立派な人間、親思ひの人間となるではありません。これはこれは大分話が横道へ入つてしまひましたね。芭蕉が門人を愛したといふのは、後者の愛なのです。私は簡単に無差別に愛したと申上げましたが、實にこの後者の愛を指して云つたわけであります。それをあなたは、前者の愛であらうと考へられたのです」

客「今の御説から察すると、よく云へば相手を尊重して愛したことになる、わるく云へば手加減を施しながら愛したといふことにもなりますね。これでは無差別といふよりか、甚だ狡猾な愛し方ではありませんか。金持な門人に對してはそれに合ふやうに、貧乏な門人に對してはそれに合ふやうに、それから學問のある人に對してはそれに合ふやうに、學問のない人に對しても亦それに合ふやうにと、無差別どころか、大いに色を付けて行つたことになりませう」

主人「どうした風の吹き廻しか、大分からまつて來ますね。ところであなたが云はれるやうに、門人愛に色別けがあつたに違ひない、と云はれてみると、それもさうですと、云はざるを得ません。それ故に無差別愛が當薇まらない、と云はれることに對しては、私もこゝに釋明しなければなりません。あなたの反問に依ると、芭蕉は常に相手の人を見てから、それに適應するやうな門人愛を向けて行つた。即ちあの門人は金持ちであるから、この位愛して行かう、その門人は學問に浅いから、この程度に愛して行かうといふやうに、自分から打算的にも似た技巧の愛を持つて、接したかの如くに聞えませぬ。これは私の説を充分了解されない、あなたの推測であります。勿論この原因は私に在ることですから、私の責任でもありません。依つて私は次に詳しく申上げることになりますから、今度は私のいふことをはつきり酌み取つていたゞき度いと思ひます。一言にして云へば、芭蕉は門人の職業、社會的

地位、貧富の程度に拘はることなく、一樣に平等なる愛を以て接してゆけた人です。尙ほ別の言葉で云へば、相手なる門人の人格を重んじて、精一杯の愛を以て接したのです。但し相手の門人に、同量の愛を以て接したといふのではありません。相手が富豪なる場合は、富豪としての對面を傷けない程度に相手を重んじ、師は師としての精一杯の愛を以て接したのです。それから相手が乞食である場合は、乞食であるからといつて見下げるやうなことがなく、自分も乞食と同様であるやうなつもりで、これ又精一杯に愛敬したのです。老人に對しても、若者に對しても、女に對しても、將又如何なる職業の門人に對しても、高位高官の門人に對しても、すべてかうした眞面目な心、心からなる愛を以て接したやうです。さればこそ芭蕉は、如何なる門人からも敬仰されたといふわけであります。これも見方によつては、甚だ狡い愛し方のやうに見うけられますが、本人芭蕉の心は、確かに眞面目なものであつたと思はれます。さう思はれるのも無理はないでせう。富豪の門人、高祿の門人に對しても、精一杯愛敬の心を以て接してゐますから、物質的にも甚だ恵まれ、蕉風擴張にも有利であつたことは、疑ふ餘地もありません。又反對に路通のやうな乞食俳人を救ひ、大阪から來たといふ貧乏俳人には、自分の米飯を頒けて與へるといふ愛し方ですから、敬仰されることはいふ迄もなく、師芭蕉に對することはとりもなほさず、親に接する如く、門人の誰彼に有難い涙をさへ絞らせることになります。何と

見ても得な芭蕉であり、徳のある芭蕉であります」

客「仰言ることが、これですつかりわかりました。時に芭蕉は、折角の重要な門人を破門した、とさへ云はれてゐるではありませんか」

主人「それは違ひます。許六が路通・荷兮・野水・越人・木因等は勘當の門人であるといつてゐますが、その勘當は今日考へるほどの厳格な勘當でもなく、どちらかと云へば勘當されたといふのではなくて、門人の方から師に對して宜しくない行爲態度を採つたために、蕉風を離れなければならなかつた、又眞面目な門人達から、それとはなしに仲間外れにされたといふやうなことであります。芭蕉が激して勘當した、といふやうなことではありません。それが證據に、蕉風を裏切つた荷兮であるにも拘らず、行脚の途すがら、芭蕉はわざわざ荷兮を訪ふて、俳諧を語り、且つは何くれとなく慰めの言葉をさへかけてゐるではありませんか」

客「それは芭蕉獨特の人心收攬の技巧とは見られますまいか」

主人「それは酷ど過ぎませう。荷兮などは芭蕉の温い情けに泣いて、前非を悔ひ、愈々俳諧に勵んだやうです。それから破門されたといふ路通ですが、路通といへば師の短冊を賣り歩いたり、其の他度度輕薄の行動をとつたために、門人達から痛く排斥されてゐましたが、大阪で或る後家と一緒になつ

たといふことを聞いた芭蕉は、昔の乞食よりは増しである、といつただけで、些かも憤怒の色を示さなかつたといふではありませんか。そればかりか、花屋日記の記すところに據りますと、臨終の刹那去來に向つて

先頃實永阿闍梨より路通が事を仰あり、其後汝が文章・乙州等に送りし消息、露霜とは聞捨ず、併し少しいみはどかる事ありて、雲井のよそには成し待りぬ、彼が數年の薪水の勞、努々わすれおかず、我なきあとにはおよそに見捨て給はず、風流交り給へ、此事願置侍る、諸國にも傳へ給はれかし

と言ひ終りて合掌され、觀音經を唱へられながら永眠されたさうです。これが芭蕉の巧言や技巧などと、どうして云はれませう。芭蕉が門人を思ふ愛情の深きこと、唯々計るべからざるものがあるばかりです。何人といへどもこの遺言を讀んで落涙數斛、何時迄も幻の慈顏を拜するに相違ありません。こんな例は數へ切れないほど澤山あります」

客「それではぼつぼつ聞かせていたゞきたく思ひます」

主人「自分が旅に出かけるとき、門人の見送りに接しては、我が子と別れるやうに悲しみ

行 春 や 鳥 啼 き 魚 の 目 は 泪

と詠んだ芭蕉は、奥州大行脚、前途三千里の思ひが胸に塞つて、別離の涙が盡きなかつたことゝ察せ

られます。従つて芭蕉送別の俳諧興行などにて、歸國する芭蕉に露沾(磐城城主内藤侯の嫡)は

時は秋よし野をこめし旅のつと

などと句を贈られるわけでもありません。それから旅先で迎ひ接する門人を、我子か兄弟の如くに思ひ、又門人の旅立に際しては、例へば大津の乙州が江戸へ旅立をするといふので、

梅若菜まりこの宿のころゝ汁

の句を餞にしてゐます。何と心厚い餞別の句でせう。これから江戸へ向ふ東海道の道々には、梅の花も美しく咲いてゐるであらうし、又若菜も萌え出でて、長閑な春先の景を樂しませて呉れるであらう。乙州よ、何はともあれ、駿河の鞠子の宿場に着いたら、名物のころゝ汁を腹一杯に食べるがよい。あのころゝ汁は素敵に美味しいものだ。わしも一緒に旅行つて共に食べたいものだよ、と弟子を愛する心を傾けて作つた句であります。それから門人の死に遭うては、身内の者と別れるやうに悲傷の感を抱いてゐます。例へば、嵐蘭が七十餘歳の老母と、七才の子を残して逝くや、熱涙を以て嵐蘭誄を綴つてゐます。これを讀む者は、誰れでも貰ひ泣きをするでせう。今これを讀み上げてみませうか。一寸長いですが我慢して下さい。

金革を擣にして、敢てたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて、君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は義を

骨にして實を腸にし、老莊をたましひにかけて、風雅を肺腑の間に遊ばしむ。予とちなむこと十とせあまり九とせにや。此三とせばかり官を辭して、岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ、稚子をほだしとして、いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間にをらず、日々風雲に坐して、今年仲秋中の三日、由井金澤の波の枕に、月をそふとて鎌倉に杖を曳く。其歸るさより心地なやましうして、終に息たえぬ。同じき廿七日の夜のことによ、七十年の母にさきだち、七歳の稚子におもひを残す。いまだをしむべき齡の五十年にだにたらず。公の爲には腹おしきりても悔まじき器の、はかなき秋風に吹しをれたる草の袂、いかにも露けくも、口をしくも有べき今はの時の心さへしられて悲しきに、老母のうらみ、はらからのなげき、したしき限りは開つたへて、ひとへに親族の別れにひとし。過ぎつるむ月ばかりに、稚子が手とりて予が草庵に來り、かれに號えさすべきよしを乞ふ。王戎五歳のまなごさしうるはしと、戎の一字をつみて、蘭戎と名づく。其悦る色、今日のあたりをさらす。いける時むづまじからぬをだに、なくてぞ人はとしのばるゝならひ、まして父の如く子の如く、手の如く足の如く、年ごろいひなれむつびたる佛の、愁の袂にむすばれて、枕もうきぬべきばかりなり。筆をとりておもひを述べんとすれば、才つたなく、いはんとすれば、胸ふたがりて、只おしまずきにかゝりて、夕の雲にむかふのみ

秋風にをれてかなしき桑の杖

これ實に堪へ難い哀悼より生れた文章であり、句であるではありませんか。尙ほ芭蕉は初七日に墓参りをして

みしやその七日は墓の三日の月

と追悼して止まない心を寄せて居ります。それから奥羽行脚の歸途金澤に入り、去年他界した蕉門の重鎮小杉一笑の一周忌を、一笑の兄によつて催されたので、芭蕉はこれが追善に加はり

塚も動け我泣く聲は秋の風

の句を詠んで、早世した一笑を追憶哀惜して止まなかつたのです。又これは嵯峨日記にあるものが、元祿四年四月のこと、杜國の死を悲みて

廿八日。夢に杜國が事をいひ出して、涕泣して覺る。心氣相まじはる時は夢をなす。陰盡て火をゆめみ、陽おとるへこれを夢みる。飛鳥髪をふくむ時は飛鳥をゆめみ、帯を敷寝する時は蛇を夢みるといへり。睡枕記に槐安國莊周夢蝶なみ其理有て妙をつくさず。我夢は聖人君子の夢にあらず。終日妄想散亂の氣、夜陰に夢又しかり、まことに此ことを夢みるこそいはゆる念夢なれ。我に志深く、伊陽舊里までしたひ來りて、夜々床を同じく起ふし、行脚の勞をたすけて、百日がほど影のごとく伴ふ。片時もはなれず。或時はたはふれ、或時は悲しみ、其志わが心裏に染て、わするゝことなければなるべし。覺てまた袂をしぼる。

とあります。曾て杜國の在世中は、杜國が流配されてゐる地に、わざわざ二十五里も逆戻りして問ひ、温情を寄せた芭蕉であります。その情の濃かなること、全く骨肉にもたゞならざるものがある

いはねばなりません。芭蕉が門弟を思ふ切情たるや、確かに尋常一様ではないので、とかく芭蕉の心情も疑はれるといふやうなことになります。

客「聞けば聞くほどいろいろのことがあるものですね。私も一回は芭蕉全集を見て來たつもりなんです。いや本音を吐きますと、本を買つたゞけで、時折拾ひ讀みをしたくらゐのところだ。芭蕉を知つてゐるといふ人のうちでも、恰度私と同じくらゐの方は相當多いことゝ思はれます。黙つて居ればよいものを、とんだ恥さらしになります。これも本當のことですから止むを得ません。聞くは一時の恥ですから、もう少し聞かせて貰ふことゝいたします」

主人「芭蕉が門人を思ふ心はあらゆる方面にゆきわたり、旅に在る門人を思ふては苦勞の程を察して同情し、其角の大酒を案じては、わざわざ飲酒一枚起請を寫し來りて之を贈り、恩人杉風の讐に同情しては、一生涯讐の句を作らず、更に讐のことは口にさへ洩らさなかつた、といふことであります。こんなこともあります。北枝に宛てた書簡ですが、

地魚の災承り、我も甲斐の山里に引うつり、さまざま苦勞いたし候へば、御難儀のほど察し申候、されども焼にけりの御秀作（註。焼にけりされども花は散すまじ）斯る時に望み、大丈夫感心、去來・丈草も御作驚き申ばかりに候、名歌を命にかへたる古人も候へば、かゝる名句に御指被成候へば、さのみをしかるまじくと存候、知音

たれく此度の難にまぬかれずや、連中たしかなること不承候間、短紙も不遣候、能御侍達可被下候、以上
火災に遭つた北枝に同情しては、萬金にも勝る慰めの言葉をおくつてゐるのであります。又金澤の小
春亭に遊ぶや、山海の珍味を列べられたので

今宵の饗なし、心使の程は云ふべくもあらざれど、恨らくは大名の御成の如くにして、茲に風雅の寂なしと云は
んか、我は世を浮草の寄るべ定める類にして、或は草深き野邊に晝寢の夢を結び、或は残りたる木の下に一村雨
を凌ぐる外、浮世に望み更になし、況やかゝる珍物厚味、豈世を避くる者の本意ならんや、
と云つて、温情にあふれた訓戒を與へてゐるかと思ふと、

席もはや閑なれば、人々の腹空かるべし、冷飯あらば鉢ながら出さるべしとありければ、主人いとやすき事なり
と云ひつゝ、手づから鉢を抱きて來り、其設けの心ゆかぬを謝するに、翁微笑みながら、諸禮停止は風雅の舊制
なり、何の謝する事やあらん、皆々近う圍居し給へとて、あたりの茶碗やらの物取あつめ、手づから杓子とりし
て、茶漬一二碗さらしくしたため、風雅はかくこそあらまほしけれ。

と門人の茶漬馳走に感謝の意を表はしてゐます。多分其時の句でありませうか。

しら露のさびしき味をわするゝな

と真心こめた饗宴に、大いに満足してゐるではありませんか」

客「これから少し俳諧方面のことに就て伺ひたいものです。俳諧發句に於ては門人をどんな風に取扱
つたか。上手な門人と下手な門人とは、自ら違つた心が働いたものでせうし、又お偉い方の加つて
ゐる運座と、門人だけの運座とに於ては、自ら異つた態度が働いたものと思はれますが、如何でせう
か」

主人「同じ俳諧でありながらも、露沾候の御前にては、好きな煙草を遠慮したり、又俳諧の席に於て
は、下座でよいからといつて、上座に坐らなかつたといふやうなこともあります。併しこれは禮儀で
すからね」

客「聞くところに依ると、芭蕉は其角と去來とを特に重く見たといふことですが。さうすると門人を
取扱ふのに片寄つたことになりはしませんか」

主人「御尤も、其角と去來とを、他の門人よりも重要人物視してゐたことは事實ですが、それは全く
偏愛に依るものではなく、取わけこの二人が學問に深かつたから、正風俳諧達成のために、重要視し
たものと見なくてはなりません。片寄つてゐないといふ證據には、入門して幾何も経てゐない若輩
凡兆をして、かの芭蕉七部集の一なる「猿蓑」の選に當らしめてゐるではありませんか。いふまでも
なく、門人を愛することに色分けをしてゐなかつたからこそ、正風を天下に大ならしめたものと思は

れます」

客「師弟の間柄には、所謂主従の関係にも似た、冷厳な儀節といふものがありましたでせうか、芭蕉が餘りにも偉いので、自然そんな風に思はれるのですが」

主人「その見方は全く的が外れて居りませう。簡単に云へば、謙讓・慇懃といつた態度ではなかつたかと思はれます。それだからこそ門人が近づき易く、益々殖えるといふわけです。しかもその中に非常な温情がありますので、一度門人となれば、容易に去らないといふ結果を招いて居るやうであります。芭蕉が門人に對する親しさ温かさは、今更申上げる迄もなく、度々申上げてきた通りであります。例へば、芭蕉庵・幻住庵に於ける生活を見ても、師とか門人とかいふ間柄を抜きにしたやうな、極めて打寛いだ、あたゝかい生活をしてゐるではありませんか。尙ほ芭蕉は門人から翁と呼ばれるのを、非常に恐れてゐたといふことです。これなどもその一例で、門人から尊稱を以て呼ばれるのを嫌つてゐたことがわかります。俺は師であるといふやうな態度を、特に嫌つてゐたものと思はれます。

これは申すまでもなく、人間がよく出来てゐたからで、私はそれを禪の影響であると思つてゐます。かうした行爲行動、つまりは世俗と同化したやうなところが、遂に門前市をなさしめたわけでありませう。併しこれが人間の出来てゐない者の世俗同化であるならば、それまでのことですが、芭蕉は人間

が出来てゐたのですから、即ち單なる世俗同化だけで終らず、その結果は師芭蕉の雅量徳量となつて行つたものであります。よく昔から親しき仲にも禮儀ありと云はれてゐますね。芭蕉は確かにこれを實踐してゐます。その一例を申上げてみますと、これは先達でも申上げたことですが、普段は俳人同志としての睦じき仲にありながら、俳席に於て、爪に字などを書いてゐた者を見つけるや、青筋立てて叱りつけたといふことがあります」

客「私などは、師と門人との間に嚴格さがあつてこそ、師には寄りつき難いところがあつてこそ、師の値打があり、又門人も敬服するといふやうなことを聞きますが、芭蕉はこの反對を行つて、大成功を収めたことになりませうね」

主人「それは人間のよく出来てゐない師の採る態度でせう。即ちこけおどかしみたいなものではありませんか。人間が本當に出来てゐたら、どんなことをしようと、必ず光るものでせう。芭蕉にも稍々これに似たものがあつたらしく思はれます。度量の寛大さを裏書する言葉に、芭蕉は何時だつたか他門と交りて苦しからずや。

苦しからず。交りて悪しきものは、博奕打と盗人なり。

と云つてゐるではありません。これですから、いくら他派の宗匠でも門人でも、文句をいふわけには

いかんでせう。自然芭蕉を敬服することになつてしまひます」

客「芭蕉は門人の發句をどんな風に見てゐますか、又どんな風に教へてゐますか」

主人「御承知のやうに、千歳不易一時流行と教へてゐるではありませんか。それから門人の誰彼に向つても、實に良き指導法や教訓を與へてゐます。今その一二を窺つてみませうか。

一、他門の句は彩色のごとし。我門の句は墨繪のごとくすべし。折にふれては彩色のなきにしもあらず。心他門にかはりて、さびしをりを第一とす。

等類作例第一に吟味すべし。

古書撰集にまなこをさらすべし。

一、初心のうちは句數をもとむべし。夫より姿情をわかち、大山をこえて、向の麓へ下たる所を案ずべし。六尺をこえんと欲するものは、まさに七尺を望むべし。されば心高き時は、邪路に入やすからん。心卑き時は、古人の胸中を知ることあたはず。

一、俳諧は中人以下のものとあやまれるは、俗談平語とのみ覺たる故なり。俗談平語をたゞさんが爲なり。拙きことばかり云を俳諧と覺たるは、淺ましき事なり。俳諧は萬葉の心なり。されば貴となく、賤となく味ふべき道なり。

一、誰もせまじきものは點取なりと、是をいませしめ給ふ。まことに今日は誰をとり、明日は誰點と云て其氣をか

ね、しかも我と我句のよしあしをしらず、本式をうしなふ。たとへば天然に妻二人持たるものあり、一人は若く、一人は年老たり。或時老たる妻の方へ行しに、老女の心をかねて黒き髪をぬく、又ある時わかき女房の許へゆきしに、又心かねて白髪をぬく、心多き故に我しらず法師になりたるよし、或書に出たり。是點取に及び本式をうしなふに似たり。勝ちたればとて上手にもあらず、負けたればとて下手にもあらず、只本式をわすれぬこそよけれ。孟子曰、爲富不仁仁者不富とあり、此心を能々心得べし。

一、俳談の外雑話すべからず、雑話出でなば居眠りして勞を休ふべし。

一、席にして壁によりかゝり眠るべからず。

一、一字の師恩たりとも忘るゝ事勿れ。一句の理をだに解せず、人の師となる事勿れ。人に教ゆるは已をなして後の事なり。

一、人のたばこ吞べからず。

このやうに、只俳諧だけに捉はれてはならぬこと、俳諧だけ上手にならうとあせつてはならぬこと、常に心を清く、高く、雅に持たねばならぬことを教へて居ります。この結果はいふまでもなく、單なる俳諧宗匠と見られるに止まらず、宗教的にも或る偉さが見出されるものです。従つて師と門人との間柄は、單に俳諧によつて結ばれるだけでなく、其處にはいふにいはれぬ、人間としての深いつながりが生じるわけでありませう。それから門人が俳諧發句の事を尋ねると、一度だに通り一べんのことを

答へて済ました事がなく、各々門人の個性を尊重して、之を啓蒙し、上達するやうにと努力してゐます。例へば、

去來云、師は門人に教給ふに其詞極りなし、或は大にかはりたることあり、たとへば予に示し給ふには、句々さのみ念を入るものにあらず、又一句は手づよく、俳意たしかに作すべしと也。凡兆には一句僅に十七字もおろそかに置べからず、俳諧もさすがに和歌の一體なり、一句にしをり有やうに作すべしと也。

これ師として當然採るべき態度とはいひながら、茲まで門人を思ふ師は滅多にないやうです。今も昔も同じことですが、兎角俳人は我流を守ることに致々たるものが多いのに、芭蕉の如くその人を見て、然る後に道を説くといふほどの親切な師は、珍らしいことゝ云はねばなりません」

客「かう良いところばかりを話していただくと、反駁するわけではありませんが、質問のしやうもありません」

主人「殊更良いところばかりを、拾ひ上げて話したつもりではないのですが、何の加減か知れませんが、途話がこんなことになつてしまつたのです。今更改まつて芭蕉のあらを申上げるのもどうかと思ひますから、今夜はこの美しい師弟関係を以て、終らせることにいたしませう」

客「もう終りですか」

主人「終りとしても結構でせうし、又もう少しと仰言れば、次ぎ足しても結構です。けれども今迄だけでは、尻切蜻蛉のやうなかたちですから、最後のしめくりをいたしませう。それは芭蕉がこの世から息を引き取らうとするとき、門人達はどんな心であつたか、といふことです。これを見れば、さながら明鏡に照し出されたごとく、師弟の関係を鮮かに看取出来ることゝ思ひます」

客「云はれるまでもなく、さうであります」

主人「實に慈父の如き温情を以て門人に接したのですから、師芭蕉の病床に在るを聞くや、門人といふ門人は、遠路を厭はず悉く駆け集つて來たのであります。尙ほ師の他界後、其角は「終焉の記」を作りて悲しみ、去來は一七日の追善に、悲痛の極に達して悼句を作れない有様、杉風は店を閉ぢ、門を閉ぢて喪に服し、丈草は三年間の喪に服して、一石一字の法華經書寫に従ひ、支考は京に翁の碑を立て、生前の恩を謝し、惟然は幻住庵の椎の木を以て翁百體を刻み、許六は庭前の愛木なる櫻樹を伐り倒して、翁像を彫り、路通は翁の死を聞くや深く前非を悔ひいて泣き、埋葬の間に合はなかつたので、墓前に額いて哀働したさうであります。この他同門の悲哀心傷は、今更私の拙い表現を以て申上げるまでもなく、或ひは追善興行となり、或ひは芭蕉忌となり、或ひは翁碑建立となりて、全國津々浦々にその徳を讃えられたのであります。それからかの城主内藤露沾公は門人ではないが、翁の死を

聞くや去來に宛て、

以飛札得御意申候益御清雅奉賀候受許無異に居申候然者師翁遺化の事承り途方に暮候いかに成行可申哉只暗夜と以相成唯恐涙迄に候取あえず一句案候靈前に御敬手可被下候、以上

告に來て死顔ゆかし冬の山

と書を送つて、痛切なる哀悼の意を表して居られるではありませんか。又あれほど傲慢な支考が「日の本廣しと雖も生前に其名豊葦原の波に響き其徳芙蓉の絶頂に並ぶ人丸赤人の昔はいざしらず、末代の今にしては實に我翁一人といふべし」、と絶叫してゐるではありませんか。どう考へてみても、門人一同がまさに太陽を失つた如くに失望落膽し、悲傷の極に沈んでゐる有様は、尋常一様のつながりではなく、全くわれわれの想像を許さぬほどの、深い、そして温い師弟關係であつたことを物語つてゐるものと信じられます。云へば限りもないことですから、この邊で打切つては如何でせうか」

客「もうそんな時間でせうか。私は今の御話を聞きながら、芭蕉の華かなる葬式、そして大きな光りを失つた人々の悲しい面持ちと、次から次へと打續く野邊の送りの人々を、まのあたりに夢みてゐました。行蹟は永遠に讃えられ、俳句は永久に愛誦せられる、芭蕉は實に幸福な人です。芭蕉死んで二百四十四年、今尚ほ義仲寺の焚香は絶えないとか、美しいといふやうなことを、子規も云つてゐたやうであります」

容、貌・體格

客「今日はぐつと變つたところで、芭蕉の容貌と體格とに就いてお話を承りたいのです。これは獨り私ばかりが聞きたいところではなく、多くの人々が知らう、聞かうとしてゐるところのもの、亦芭蕉が英雄化されてゐますだけに、大變に興味のある問題ではないでせうか」

主人「それは本當でせう。私もあなた以上に知らうとしてゐます。現在でさへも詳しく知らうとして随分調べてもゐます。それにも拘らず、誰一人として突込んだことを云つてくれる人がないので、實際ならばかうした方面のことを、どしどし雑誌に發表されるなり、又單行本にも書かれてよい筈です。どうですか、こんな方面のことを本に纏めて見ては。素晴らしく賣れませう、大儲けが出来ませう。假りに百萬の俳人のうち、一萬人が買ふとしても相當ぢやありませんか。眞先に私も買ひますよ」

客「それはあべこべです。私が聞かうとしてゐますのに、さう云はれると、何にも云ひなくなつてしまひます。併し聞きたいですね。知つていらつしやるだけでも、聞かせて貰ひたいものです」

主人「冗談ぢやありませんが、それほど迄に聞きたいことが、誰れ一人云つてくれないのです。これは要するに資料が乏しいからです。うっかりしたことを云つて笑はれるよりは、云はぬ方が増しだと思ふからでせう。私もその説を採りたいところですよ」

客「今日はさう堅く仰言らずに、私にだけといふ、極く内證のところ、お話しを願ひたいものです。従つて今日承ることは本當らしく、仰々しく他人にも云ひませんから、忌憚なく云ひ放つていただきますと思ひます」

主人「あなたがそこまで承知ならば、ぼつぼつと出掛けませうか」

客「ありがたう存じます。それでは一つ一つお伺ひします。先づ頭の大きさはどんなものでせうか」

主人「これは六ヶ敷いですね。あたりさわりのないところ、うまい逃げ方かもしれません、大きくもなし小さくもなし、といふところでせう。これはいろいろな芭蕉像・畫像からの推測であります」

客「髪の毛はどうでせうか」

主人「髪の毛は多少長かつたが、薄かつたやうです。何しろ若い時から老人に見えた、といふくらゐですからね」

客「眉毛はどうですか」

主人「眉毛は非常に長かつたやうです」

客「顔のかたちはどんな風だつたでせうか」

主人「若い頃は圓顔にも見えたが、中年からは面長の相が見られます。何せ芭蕉を畫いた畫像若しくは彫物などは随分澤山ありまして、どれが本當の芭蕉に近いかと、誰しも迷ふところでせう。併し芭蕉によく接近してゐた人の畫いたもの、例へば杉風が畫いた芭蕉像、桃隣が畫いた芭蕉像、それから許六が彫つたといふ芭蕉像などは、可成芭蕉の眞を傳へてくれるものと見てよいでせう。それからですね、先年發見されたといふ、盛岡市の長松寺に秘藏されてある芭蕉木彫像、これは芭蕉翁自らも小刀を以て彫つたといふとですから、最もよく芭蕉を物語つてゐるものと信じたのです。長松寺から寫眞を撮つて私に送つてくれましたから、後で御覽下さい。その像を見ると、さう瘦せてもゐず、ふつくりとしたところも見られます」

客「眼はどうでせうか」

主人「眼中すこやかに、と云はれてゐます」

客「耳はどうでせう」

主人「耳朶は大變に厚かつたさうです。芭蕉の木像も、随分大きく且つ厚い耳を着けて居ります」

客「鼻はどんな形でせうか」

主人「鈍骨の雙柱と云はれてゐますから、大抵は想像がつきませう」

客「頬はどうですか、張つてゐましたかそれとも落ちてゐましたか」

主人「若い時ならいざ知らず、四十過ぎてからは、大分そば立つてゐたらしく見えます」

客「芭蕉は無口でもあり、饒舌でもあるやうに見られますが、唇はどんなものでせうか」

主人「唇は甚だ薄かつたさうです。昔の繪を見ると、かうしたところははつきりわかりませんが、勿論薄いといつても、並外れに薄かつたといふのではないでせう」

客「さうさう、忘れてゐましたが、丈の高さはどんなものですか。大男ですか小男ですか」

主人「昔からうまいことを云つてあります。脊高からず、低からずとのことです。私が見るところによつてと畫像其の他を綜合してみると、中位といふよりは、いさゝか大きい男といふべきではないかと思はれます。これは瘦身であつたがために、殊にさう見えるのかもしれないが、蕪村などと比較すると、随分大男といふやうな感じがします」

客「それから御面相は如何だつたでせうか。美男ですか醜男ですか」

主人「こんなことは聞くまでもないぢやありませんか。若しも醜男でしたら、どうしてあんな繪が、

又彫物が作られますか。いくら師であるからといつても、醜いものをあゝまでも品のある芭蕉に誇張が出来ますか。それを考へても、決して醜い男であつたなどとは云はれないでせう。といつて美男であつたかどうか。女が首つたけになるほどの美男であつたかどうか、それは疑問でせう。青年時代盛んに女性との關係を繰返してゐる芭蕉ですから、一見色男型に見られるかもしれませんが、それは普通の容貌であるところへ、神経質的な緊張が漲つてゐたから、女性に好かれたのではないかと思はれます。まあ十人並みの顔であつたと見てよいではないでせうか」

客「見たところ温といふべきでせうか、將た險といふべきでせうか」

主人「腺病質であり、又神経質でありましたゝめに、穩かといふよりは、多分にけはしさがあつたと見なくてはなりません。併しながらよく見てゐると、けはしさの中に穩かさが見出されるといふ顔でせう」

客「髭はありましたか」

主人「お坊さんのやうな姿の繪を、ちよいちよい御覽になるでせう。あれを見ると、まさか髭があるとは思はれないでせう。併し髭を生やしてゐたことは、事實であります。門人小川破笠が寫生したといふ、芭蕉翁行脚の姿を見ると、迎も立派な髭が生えてゐます。無精髭などと云つては、餘りに禮を

失したことになるやうな髭であります。又或る本には、四十前後から髭が白かつたと云はれてゐます。かうしてみると驚くほど老け性であつたことが知られます。いふまでもなく髭が白いからには、頭髮も白かつたと見なければなりません。何はともあれ、生れつき弱いところに、持病即ち痔疾があつたから、一入老い込んだといふことになりませう」

客「御迷惑で御座いましたでせうが、ずつとお伺ひしましたことによつて、芭蕉の姿が髣髴として展開して來ます。これを畫家に頼んで畫いて貰つたならば、最も正しい芭蕉、今日迄の畫像よりも、ずつとずつと素晴らしい姿が出來上りはせぬかと思ひます」

主人「さあ、それはどうでせうか。私の申上げたことが、どれだけ眞實性があるか疑問です」

客「それはそれとして、體格のことに就いて、一寸伺ひたいと思ひます」

主人「大凡體格の如何は、想像されたことと思ひますが、思ひつくまゝを簡單に申上げませう。元來が腺病質でありますから、強健な體格であつたとは申されません。それから自然想像されるやうに、神經質なところが多分にありましたから、どうしても肥ることなどは出來ません。畫像木像によつても推察される通り、何時も瘦せてゐます。そのためにすつきりとした體格に見え、且つ頑丈さうに見られることもありませう」

先にも申上げましたやうに、生涯の半分を後架で暮らす、などと冗談にも云つてくるくらゐ痔に苦んでゐたやうです。たゞこれだけでも、如何に神經質にならざるを得なかつたか、改めて私が言ひ添へるまでもないことでせう」

客「略々見當が附きました。先づ體格は丙といふところでせうかね。今事變に芭蕉がゐたら、お前の身體ぢや役に立たんといはれるところ、そこで芭蕉はさすがと奥之細道行脚に出かけますかね、やがて芭蕉は越後に出て『荒海や佐渡に横たふ天の川』などの句を蹴飛ばし、ソ聯を睨んで感慨無量湧然と生れ出づる憂國の句を書きしるす。これは面白い芝居になりさうです。さてさてとんでもない冗談をならべて、すみませんでした」

主人「いや、なかなか面白いではありませんか。その續きを聞きたいくらゐです。一つ銃後の喜劇を作つては如何です。時に芭蕉は、さつきの話ですがね、癩病であらうなどといふ人があるのです。

それは醫者の立場から觀察した言葉でした。併しこれはどの程度まで信用してよいかと疑問です。私に言はせると、それは常軌を逸した酷評だと思ひません。さうぢやありませんか、芭蕉の一生涯の生活を手繰つてみても、そんなことは夢にだに想像されるところがありませんから」

客「さうです、私もそんなことには耳を傾けたくありません。それよりか、芭蕉が自分の體格や容貌

について、どんな句を詠んでゐるか、それを少しでも知りたいものです」

主人「さあ、それは大變なことです。嚴格に申上げるとすれば、芭蕉の俳句を一々虱潰しに調べ上げなければなりませんから。併し何時でしたか、そんなことを試みようとして、句を若干拾ひ出して見たこともあつたやうです。今思ひ出しただけでも申上げてみませう。

顔に似ぬ發句も出よ初ざくら

老備

蝸よりは海苔をば老の賣りもせで
おとろひや齒に喰ひあてし海苔の砂
みな月やふく病やみの暑さかな
晝は猶腹病煩の暑さかな

自詠

髪はえて容顔蒼し五月雨
結ぶより早齒にひよく清水かな
初霜や菊冷初る腰の綿

古郷墓

一家みな白髪に杖や墓参り

深川冬夜の感

櫓の聲波ヲうつて腸氷ル夜やなみだ
明月や鼻の先なる光明寺

十二月二十九日

髭つらを人なとがめそとしの暮

こんな句がありますが、自分の容貌や身體のことについては、餘り詳しいことを詠んでゐません。無理に詠まうとはしなかつた、といふやうな氣配は窺はれませんが、又強いて詠まうともしなかつたやうであります。普通ならば神経質の芭蕉でありますから、もつともつと鋭い感じのする句を詠んでもいい筈であります。それにも拘らずかうした句を作るといふのは、常に自然の妙を主とし、成るべく自分の露骨な感覺を入れないやうといふ、芭蕉の俳句精神に因るものではなからうかと思ひます。それも不知不識に影響してゐますまいか、芭蕉の句には自然を詠むにしても、自分の感覺を詠むにしても、無理なところ、わざとらしい工夫が見えません。従つて先刻申上げた句も、さういふやうな觀點

に立つて眺めなければならぬと思ひます。さうすると成程芭蕉らしい句となり、芭蕉の身體に關すること、容貌に關することなども、ほのかに窺ふことが出来ませう」

客「御序といつては失禮で御座いますが、勿論私のために、先程聞かせていただきました俳句を、簡単に解釋して下さいませんか」

主人「承知しました。佛造つて魂入れずとあつても困りますから、蛇足ながらに解釋を施ませう。或ひは幾分か御参考になるかと思ひます。

顔に似ぬ發句も出でよ初ざくら

初ざくら、それは人に譬へて見れば、ふつくりと膨んだ美しい處女のやうなものである。そのやうに美しい初櫻を詠まうとする自分は、餘りにもみすばらしい、きたならしい顔をしてゐる。これでは全く以て不釣合な對照である。併しこのやうに黒い、老いた自分に、似ない俳句を作りたいものだ、と初々しい初ざくらに對して、我身の老をかこちたる句であります。

老 備

蠟よりは海苔をば老の賣りもせで

老備をこゝでは「おいものうし」と詠みます。老人が牡蠣貝を賣り歩いてゐるが、同じ海のものだつ

たら海苔があるのに、何故わざわざ重い牡蠣貝などを賣り歩くであらうか。その老人の呼聲を聞くだにもものうくなり、又その姿を見るからに一入ものうくなるといつたのである。芭蕉の無精もさることながら、自分の老いものうさから、老人の身に同情したやうなところも見られるが、その實芭蕉は老備をたのしんでゐるのです。

おとろひや齒に喰ひあてし海苔の砂

「齒にあたる身の衰ひや海苔の砂」と作つてもゐます。全くその通りで海苔の中に混つてゐた砂を、齒に喰ひあて、しみじみ身にこたへた、即ち自分も衰へたと感じたのである。芭蕉は今更のやうに老の早きに驚き、且つ嘆いたことでせう。この一句によつても、如何に早老の芭蕉であつたかを理解出来ませう。

みな月やふく病やみの暑さかな

晝は猶腹病煩の暑さかな

この水無月に腹下しをしてゐるので、一層暑さを苦しく感じるといふ。後の句は、夏の腹下しは朝夕ならば左程でもないが、殊に晝がつらく、暑さも一としほと身にこたへるといふのです。これは平凡な取材で夏の下痢を経験した人ならば、何だあたりまへぢやないか、と一笑に附されるかもしれない

い。併し芭蕉は胃腸が弱かつたから、殊更に苦痛を感じて、この句をものしたものと思ひます。

自 詠

髪はえて容顔蒼し五月雨

これはいふまでもなく病中の句でせう。病氣故に髭は蓬々と生え、顔の色は蒼白く、あまつさへ五月雨の陰氣さが身に迫るので、自分の身體をもてあますかの如くに、憂鬱な心に沈むといふところを詠んだのでせう。「髪はえて」は頭髮も含まれてゐますが、それよりは此場合、髭を指して云つたものと思はれます。

結ぶより早齒にひゞく清水かな

この句は解釋するまでもないでせう。水を飲みたくて堪らぬ時に清水を見つけ、手に掬ひ飲まうとする前に、たちまち清水の冷たさが感じられ、齒にじーんと泌みるのである。かうしたことはわれわれもよく経験するところであります。例へば梅干を見たゞけで、酸つばく齒にこたへるといふのと同じです。齒の丈夫でない芭蕉は、他人よりは一層鋭くこの感じを得たものと思はれます。

初霜や菊冷初る腰の綿

初霜が降りたので、菊は順に冷えはじめた、これでは早速菊に霜構ひをして、暖めてやらなければな

らない。さういへば、自分も痔疾のため冷性であるから、腰綿をして暖めなければならぬ、と自分の身のかよわさを綴つてゐるのです。氣分に敏感といへばいへるが、併しそれは芭蕉が殊の他弱かつたからであると思ひます。

古郷墓

一家みな白髪に杖や墓参り

古郷に於ての墓参である。芭蕉は亡き両親を想ひ、子供の頃の自分を想ひ、それから現實にたちかへつて、兄夫婦、兄夫婦の家族達をまのあたりにし、且つ自分自身の姿を顧みた。さうすると兄も、嫂も亦自分も白髪を交へてゐる。何と年老いたことか、白髪頭に杖持つ身になつたのか、としばらく溜息を吐いて、今昔の感に耽つたことでありませう。しかも五十一歳で死んだ芭蕉が、生前にこんな句を吐いてゐるので、想像以上に早老の身であつたことが知られませう。

深川冬夜の感

櫓の聲波ヲうつて腸氷ル夜やなみだ

櫓をあやつる音、キイキイといふ聲、即ち櫓が波をうつ聲が聞えてくる。それも冬の夜であるがために、一入の悲痛を呼び、その聲を聞くことに腸が氷りさうで、思はず哀はれに堪へかねてか、涙があ

ふれることである。といふ意でありませう。腸の字があるから、腸がどうのかうのといふのではありませんが、所謂斷腸の思ひなどといふくらゐの意に、用ひられたものと考へられます。

明月や鼻の先なる光明寺

これは明月に對して光明なる文字を選ばれたやうに見えて、いさゝか嫌味がないでもありません。この句は説明を加へるまでもなく、明月を浴び乍ら歩いてゐたら、鼻先に光明寺が聳立してゐたといふところです。芭蕉が鼻の文字を用ひるくらゐですから、鼻が低かつたとは思はれないでせう。その通りです、芭蕉が自刻したといはれる像を見ても、團子鼻のやうに大きな鼻の形であり、又繪にしても割合に鼻が大きく畫かれてゐます。

十二月二十九日

髭つらを人などがめそとしの暮

生え放題の無精髭。忙はしくて剃れないのではないが、剃るのが億劫だから、遂々こんな無精髭になつてしまつた。もう二三日で新年を迎ひるのだが、併し自分は商人や役人のやうに、顔を綺麗にしなければならぬといふやうなこともなさうだ、まあこのまゝでゐるとしよう、人よ許せ、といふ心持ちの句でありませう。無精であり、面倒臭がり屋の芭蕉の半面と、髭深い顔の半面がうかゞはれる句

であります。先づさつとこんなところですが、御わかりになりましたか。それから自分が瘦せてゐますために、瘦せるといふ文字を使つてある句が二三あります。

瘦ながらわりなき菊のつぼみ哉

から 鮭も空也の瘦も寒の内

麥めしにやつるゝ戀か猫の妻

相當お話しつゞけたやうですから、これで一と先づ打切りといたしませうか」

客「御蔭様で芭蕉の容貌・體格の各方面に亘つて、充分あきらかに理解することが出来、非常にありがたく思つてをります。本當にかうして芭蕉の句を解釋していただいてみますと、芭蕉の顔容ちや身體などが、髭髯として目の前にあらはれ、私はそれを如實に目撃することが出来るのであります」

芭蕉の愛國心

客「古來俳諧發句といひますと、日本國民精神の具現、高揚でありませうから、日本精神とは密接な關係にあるものですね。さうすると俳人は、一般人民よりは一層日本精神に關心を持つてゐた、とい

ふことが出来ることになりす。そこで私は日本國民精神のうち、愛國心といふことについて、こゝに佛聖と云はるゝ芭蕉を検討してみたいと思ふのであります。これについては私も前々から注意を拂つてゐたのですが、芭蕉に關して書かるゝことの甚だ多いのにも拘らず、未だこの方面については、何人も論じて居られないやうですが。今夜は一つその方面についての御説を、拜聴出来ませんでせうか」

主人「さうですか、これはこれは全く思ひもかけぬ問題であります。是非と云はれるならば引込むわけにも行きません。恰好がつかつかぬかは知りませんが、御質問に對してお答へするといたしませうか」

客「有難う存じます、これで私も願つたり叶つたりで御座います。實はこんなことを、今迄誰も論じてゐないやうなことを聞くのが失禮ではないかと思ひ、随分躊躇してゐた次第であります。今日は先生の御言葉に甘へまして、元氣を出してお伺ひいたします。

芭蕉には愛國の志士と見らるゝやうな心、さういつたものを披瀝した文章が御座いませうか」

主人「悲しい哉、それはありませんやうです」

客「さうしますと、愛國心が非常に薄かつたといふことになりませうか」

主人「否、愛國の文章を遺さないからといつて、直ちに愛國心が薄いとは申されません。所謂直接的な愛國心を吐いてゐないにしても、間接的に愛國心をこめたものがあるとするれば、愛國心の厚かつた人だと云へるではありませんか」

客「芭蕉にはそれがありますか」

主人「澤山あります。帝とか、大御代とか、我が日本國とか、愛國とか、忠義とかいふ言葉は殆んど用ひてはゐませんが、それに代る言葉を用ひ、しかも愛國的内容を盛つたものは澤山あるやうです。

たまには

花 ち ら す 風 は 皇 帝 の 臣 下 か な

といふやうな句もありますけれど」

客「それは又何故でせうか」

主人「例へばです、外國の侵略、又交渉といふやうなものが殆んどなかつたから、敢て我國がどうの、日本がどうの、といふやうなことを、自然言ひ立てることも妙かつたではないでせうか。又外國の智識をさう知る必要もなく、生活が出来たやうなわけですから、殊更日本を強調するとか、外國と比較することも少なかつたと見なければなりません。そんなこんなで、愛國心を無理賣りする必要

にも迫まられなかつたから、文章は勿論俳諧發句にも、わざとらしい愛國の表現語が使はれなかつたものと見てよいでせう」

客「それはわかりますが、芭蕉とて日本の國に棲んで居ります以上、如何に外國との交渉が無いにしても、日本の國の有難さといふことについては、人一倍に感ずるところがなかつたでせうか」

主人「それはありましたでせうが、そこまで言ふ必要がなかつたと見てよいでせう。つまり天下泰平徳川三代將軍家光の時代に生れたのでありますから、何も苦がなかつたといふわけです。抑々日本といふ國を再認識するといふよりは、寧ろ徳川の治世に酔ふ方が多かつたのでせう。或ひは若しさうでなかつたにせよ、餘程のひねくれ者か、又は並外れの愛國の士でなければ、徳川の治世に對して、そんなことを云ひないといふことになりませう」

客「左様です。それでは先に話されました、間接表現の愛國心とはどんなものですか」

主人「愛郷即愛國、といふやうな見方からいひますと、芭蕉はなかなかの愛國心を持つてゐた、といひるのです。それから神國日本といふ立場からですが、芭蕉は神を敬ふことに於ては、決して人後に墜ちなかつた人であります。斯様な點から綜合して、私は芭蕉を非常に愛國心に富んだ人と見たいのであります。これに就ては第三章の敬神崇佛のところにて、種々と申上げたやうに思つてをります」

客「さう云はれてみますと、それに違ひありませんが、なほこの場合として、若干の例を聞かせいた
だきたいものです」

主人「それでは幾つかの例を引いてみることにしませう。甲子吟行（野晒紀行、草枕、芭蕉翁道の記
などともいひます）に於て、
先づ後醍醐帝の御廟を拜む。

御廟年を経てしのぶは何をししのぶ草

といひ、鹿島紀行に於ては

神前

此杉の實ばえせし代や神の秋

と詠み、卯辰紀行（芳野紀行）に於ては

伊勢山田

何の木の花とはしらずにほひかな

と敬神の念に打たれ、更に須磨明石から一の谷を覗いては、二位の尼君に抱かれて、船屋形にまるび
入らせ給へるといふ皇子の御いたいけなる姿を遠く拜して、とめどなき涙に袖を濡らしてゐるのであ

ります。それから「奥之細道」に於ては

往昔此御山を二荒山と書しを、空海大師開基の時日光とあらため給ふ。千歳未來をさとり給ふにや。今此御光り一天にかゞやきて恩深八荒にあふれ、四民安堵の栖おだやかなり。猶はゞかりおほくて筆をさしおきぬ。

あらたふと青葉わか葉の日の光り

又

鹽がまの明神に詣。國守再興せられて宮柱ふとしく、彩櫛きらびやかに石の階九段に重り、朝日あけの玉がきをかゞやかす。斯る道の果塵土のさかひまで、神靈あらたにましますこそ、吾國の風俗なれどいと尊けれ。

又元祿元年杉風に宛てた書簡には

其元御無事と見え候而歳且伊勢にて一覽珍重に存候拙者無事に越年いたし今程山田に居申候二月四日參宮いたし當月十八日親年忌御座候付伊賀へかへり候て暖氣に成次第吉野へ花を見に出立んと心がけ支度いたし候

とありますやうに、先づ伊勢に參拜し、次で故郷の土を踏み、その次に花見をするといふ心がけ、これは何ともないやうなことでありませうが、敬神愛郷の念に篤い人であつたからこそ、といふ個所が伺はれるではありませんか。

尙ほ元祿三年北枝に宛てた書簡に

元日や壘の上に米だはら 北枝

さてく感心不斜神代のこともおもはると云ける句の下にたゞん事かたく候神代の句は守武神主身分相應に姿の妙なる處有之候別而歳且歳暮不相應なるは名句にても感概なきものに候今天下第一の歳且なるべしと京大津の作者も致稱美候不備

正月二十四日

芭蕉

と、日本、米、元日、神代などとの感慨から、北枝の句を褒めてゐる芭蕉であります。かうした手紙の寸評に於てさへも、芭蕉は如何に日本中心主義の思想に豊富であつたかを推察することが出来ませう。

客「充分了解出来ました。併し何時ぞやの御説に依りますと、芭蕉の俳諧發句は漢詩の影響が多く、又老子莊子などの思想に影響されることが尠くなかつたと聞いてゐますが、さうすると所謂支那かぶれの思想家に似て、日本的なるものを忘れたやうなことはなかつたでせうか」

主人「そこはなかなか巧みな芭蕉で、凡人ではありませんから、そんなぬかるやうなことはしてゐません。即ち思想にせよ詩句の表現にせよ、よきところは眞似て、いや眞似るといふよりは、取つてもつて自分のものにするといふ遣り方です。従つて盲目的に私淑するところがありません。實際公平な

ところからみると、芭蕉が正風を樹立することが出来たといふのも、その下地の若干には老莊思想なども與つて力あつたことゝ思はれます」

客「してみると、芭蕉にとつて支那人は恩人みたいなものですから、支那人を悪くいふことは出来なかつたでせう。その結果は明かに支那禮讚といふことになりはしないのでせうか」

主人「勿論支那の偉いところ、偉い人を褒めてはゐますが、無闇矢鱈に支那を禮讚してゐません。支那がどうしても眞似の出来ない日本のよさは、飽くまでも強調し、高らかに支那を嘲笑してゐるやうなところも見出されます。支那に對する輕蔑は、時代が新しくなるほど著しく、芭蕉よりは蕪村、蕪村よりは一茶といふ順序をとつてゐます。これは餘分な話になりますが、例へば一茶の如きは

唐の風はかよわき扇哉

唐人も見よや田植の笛太鼓

などの句を吐いて、支那人を尻目に眺めてゐます。これは何故かと申し上げますと、芭蕉の時代には、例へば伊藤仁齋や新井白石の如き大漢學者が現はれるといふやうなわけで、いやが上にも支那を謳歌する時代ですから、自然芭蕉などもこれに影響されたことは、止むを得ない事情と云はねばなりません。それにしても神國なる我國には、唐の及ばぬものがあるよと氣を吐いた句もあります」

客「段々面白くなつて來さうです。それではさう云つた俳句を擧げて、わかり易く説明をしていただけませんか」

主人「それに先立つて、連句にもこんなのがあつた、といふことだけは云はねばなりませんから、三つ四つ讀み上げてみませう。

○ 御即位によき白髪とえり出され 芭蕉

植て常盤の百本の竹 桐葉

○ 皆拜め二見の七五三を年の暮 芭蕉

篠竹うたふ媒掃の風 岱水

○ 長生は殊更君の恩深き 北枝

賤が袴はやれるともなき 會良

初花は萬歳歸る時なれや 芭蕉

酒にいさめる宿の山ぶき 観生

○ 半日は神を友にや年わすれ 芭蕉

雪に土民の供物納る 示石

これらはすつと長く續いてゐる連句の中から、ほんの一部分宛を引出したものに過ぎませんが、芭蕉が國を思ひ、神を崇び、君を敬ふ心を體しての句と見ることが出来ます。次には愈々俳句に就て、話を進めてゆくことにしませう

客「芭蕉はどんな句を作つてゐるか、大凡の見當を附けたいと思ひますから、御面倒でも先づ最初に俳句だけをお聞かせ下さい」

主人「それでは新年の句から順々に、

仁徳天皇

高き屋にのぼりてみればとの御製の

有がたきを今も猶

叡慮にて賑ふ民の庭竈

太裏雛人形天皇の御宇とかや
我も神のひさうやあふぐ梅の花

子良館の後に梅有といへば

御子良子の一もと床し梅の花

伊勢御神前にて

何の木の花ともしれぬ匂ひかな
有難や雪をかほらす南谷

日光山にて

たふとさに皆おしあひぬ御遷宮
たふとさや青葉若葉の日のひかり

一寸順序が狂ひましたが、まだ句がありますから申上げます。

伊勢に居て三國一の初日の出
唐土の吉野は岩に牡丹哉
みなおがめ二見の七五三を年の暮

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍
乾鮭や何がし殿は毛唐人

伊勢にて

神垣やおもひもかけずねはん像
かびたんもつくばせけり君が春

この位のものだらうと思ひます。如何です、何かの見透しがつきましたか」

客「大いに得るところがありました。何せ芭蕉は造化の妙を極めたる詩人であり、所謂枯淡の句といひますか、寂び、栞り、輕み、細みなどの句ばかりが多いものだと思つてゐました。そこで芭蕉といへば、そんなやうな人であつたらうと想像し、又芭蕉の句といへば、古池や枯枝の句、乃至はそれに類するものばかりと思つてゐたのですが、只今こんな句を聞かせて貰ふと、それが芭蕉の句かと思ふほどに驚き、成程別な見方を下さなければならぬ、と痛切に感じます」

主人「今更改つて、芭蕉に別な見方を加へる必要はないと思ひます。あなたは、勿論あなただけではありませんが、芭蕉の句を一方的に眺めて居られたわけです。ですから、芭蕉にもこんな句があつたのか、と思ひになれば、それだけ芭蕉の句に對する見解が擴がるわけであります。それでよいではあ

りませんか」

客「かうして斜めから、誰も見ないやうなところから、メスを入れてみると、案外なところに意外な獲物が横たはつてゐることになりますね。このやうに十數句も揃へられると、資料適確といふやうなわけですから、新しい芭蕉小論が成立してしまひます。これで私も充分と申上げてよいですが、今聞きました句のそれぞれについて、簡単な解説をお願い出来ましたら、更に結構な次第であります」

主人「それでは大急ぎに片付けてみませう。

観慮にて賑ふ民の庭窟

これは前書にて、充分理解出来る句と思ひます。即ち仁徳天皇の仁慈のありがたさに、今も猶春の庭窟に煙が立ち、平和に賑ふ御代である、と聖恩に感謝して悦びを述べた句であります。

太裏雛人形天皇の御宇とかや

太裏雛は内裏雛である。「御宇とかや」が原句では「御宇かとよ」になつてゐます。句の大意を申せば、内裏雛の飾られてゐる様は、恰も人形の天皇の御治世のやうに思はれるといふのであります。謡曲に「仁明天皇の御宇かとよ」とありますから、芭蕉はこゝに心をうごかして句をものしたのではないでせうか。ともかくも芭蕉の若い時代の作ですから、或ひはさうかもしれないと思ひます。芭蕉が天皇又

は御宇といふ文字を用ひた句としては、本當に珍らしい句といはねばなりません。

我も神のひさうやあふぐ梅の花

或る神社に於て、梅の花を眺めたときの作であります。神をおろがむ自分は、勿論梅の花を打仰いでは居るものゝ、ぼんやりと神の姿を見まもりつゝ、打仰いでゐるのであるといつたのでせう。

御子良子の一もと床し梅の花

伊勢内宮外宮に子良の館があつて、社家の娘を大神宮の神僕に奉仕させることになつてゐます。この娘を子良と云はれてゐます。さうすると自然この句も解つて参りませう。即ち芭蕉は子良館の側に、今を盛りと咲いてゐる梅の花を見て、この梅の花の清淨なるさまは、白装束に紅の襟を着けた肌着の、あの子良子の清淨無垢なる姿に釣合つて、本當にゆかしく思はれてならないと讃えたのでありませう。勿論梅が一本であつたから、一段と床しく思はれたのであらうと思ひます。直接伊勢神宮がどうのかうのといふのではないが、氣高い感を得ての作でありますから、こゝに出してみたのです。

何の木の花もしれぬ句ひかな

これには「貞享五年きさらぎの末伊勢に詣づ、我御白洲の土を踏こと既に五たびに及び侍りぬ、ひとつひとつのくわゝれるにしたがひて、かけまくもかしこきおほん光りも思ひまされる心地して、

かの西行の涙の跡をしたひ増賀のまことを悲しびて、内外の御前にぬかづきながら、袂しぼるばかりになん侍る」と前置あるのもあります。これで大體芭蕉の心境も窺ふことが出来ますが、つまり神前に額くと、何の木の花の匂ひかはしれぬが、神々しい香が鼻をついてくるので、たゞたゞ有難さに涙がこぼれるばかりである、と感慨を述べた作であります。この句は前の句と違つて、只管伊勢太廟の神威に感泣したる作であります。

有難や雪をかほらす南谷

元祿二年六月出羽羽黒山にての作であります。或ひは「有難や雪をかほらす風の音」ともあります。雪とありますため、うつかりすると冬の句に見られることもありませうが、「雪をかほらす」とあるのですから、成程夏でなければならぬ句になります。句は解釋するまでもなく、靈山なる羽黒山は、風の音に雪をかほらしてゐる、あゝ有難いことである、と心に拜んでゐる句と見てよいでせう。南谷には別院があります。

たふとさや青葉若葉の日のひかり

これは先程「奥之細道」の文例を挙げました通り、日光山の恩澤に浴して、九拜して措くところを知らなかつた、芭蕉のこゝろを詠んだ作であります。

たふとさに皆おしあひぬ御遷宮

秋の外宮遷宮を詠んだ句で、その内容は蛇足を加へるまでもなく、『何の木の花ともしれぬ句ひかな』と同じく、大神宮の尊とさにひれふした芭蕉が、心を籠めて詠んだ句であります。

伊勢に居て三國一の初日の出

三國とは日本と唐土と天竺とを指したものであるか。初日の出を拜むには、この伊勢大神の鎮座まします伊勢で拜むのが、最も尊く、最も美しく、最も有難く感じられるといふのであります。即ち神國日本を絶讃したる句といふべきであります。

唐土の吉野は岩に牡丹哉

日本の吉野山は全山悉く櫻の花である。然るに若し唐土に吉野山があるとすれば、何が咲くであらうか。櫻の代りに牡丹の花が咲くであらう。國を異にすれば、花でさへもこれだけ違つてしまふ。即ち櫻花は日本魂であり、日本精神の象徴である。併し唐にはさういつたものがない。牡丹の花ではたゞ研爛といふだけではないか、と日本と唐土とを比較して、高らかに我國の勝を誇つたものであります。

みなおがめ二見の七五三を年の暮

年の暮の二見ヶ浦には七五三繩が張られてある。即ち元日を迎へんがための用意であることはいふま

でもありません。まだ元朝が來ないのに、早いかもしれないが、さあ、あの七五三繩を見たものは、誰れでも彼れでもおがみなさい。私も伊勢神宮を拜し、そして二見ヶ浦の七五三繩をおがみます、と遠き昔のこと、天照大神の事などを念頭に描いて、柏手を打つ芭蕉であります。

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

阿蘭陀は紅毛即ちオランダ人のことであります。日本の櫻花が美しいといつて、オランダ人でさへも花見にやつて來た。さあ、我々日本人はそれに負けず、馬に鞍を置いて出かけなければならぬ、といつたのであります。この句の半面には櫻を誇り、又日本の威風を誇つてゐる心も見られます。

乾 蛙 や 何 が し 殿 は 毛 唐 人

俳句を好む者は、古來寂び佗しさをたつとぶところから、乾蛙の味を愛するが、某殿は無風流のため乾蛙の味も知らない、謂はゞ日本人でなく、毛唐人のやうなものである、と卑下したのであります。この場合毛唐人は、本當の意味の毛唐人、即ち外人蠻夷を指したのではなく、毛唐人のやうに日本の趣味を解さぬ奴だ、といふ意に用ひられたのであるが、日本と毛唐とを比較して、斷然我れに優越感を覺えての作であることはいふまでもないでせう。無意識の裡にも、鬱勃たる愛國心の秘められてゐる作と云はねばなりません。芭蕉時代に、毛唐人に等しい奴だ、と芭蕉に罵られた日本人の

居たことを思ふと、情ない次第であります。

神垣やおもひもかけずねはん像

伊勢大神宮を参拜して、思ひがけなくも涅槃像を見たとき、非常に變な感じに打たれたことでありませう。昔は神佛混淆であつたから、尼さん等もゐたこともありませう。併し芭蕉は、伊勢は神廟でこそ有難い、尊いのだと感じ、佛はなくもがたとさへ思つたことでせう。即ち神第一の念を體しての作であらうと思ひます。

かびたんもつくば、せけり君が春

これはなかなか奇抜な句でせう。芭蕉の句としては、最も異色ある句として挙げなければなりません。かびたんとは甲比丹で、徳川時代に外國領事のことをかう云つてゐたやうです。この語源は外國船長のカピタンから來てゐるさうです。それがやがて外國人と見れば誰れ彼れを問はず、かびたんと稱するやうになつたのです。さてこの句の意味ですが、我國の新年に、かびたん即ち外國人をへいつくばはせて、禮拜させてやつたといふのです。即ち我が國の威光におびえさせてやつたわい、と偉張つたところを示した句であります。

客「芭蕉にこんな句があるとは、今始めて知りました。芭蕉もなかなか新らしいところを狙つたもの

ですね。これなどは全く愛國心の塊りともいふべく、愛國俳句の白眉と稱してもよいではないでせうか」

主人「さうです、直接愛國心を吐露した句としては、これが最も激しい句であらうと思はれます。まあ何といひましても、時代が時代ですから、かうした方面の句が割合に少いといふわけになりませう。例へば一茶ですが、文化元年露西亞の使節レサノフが長崎へ來て、我國に開國を迫つたとき、一茶は毛唐小癩など云はんばかりに

日本の年がおしいかオロシヤ人
春風の國にあやかれオロシヤ船
門の松オロシヤ夷魂消べし

などと痛棒を喰らはせてゐます。これが芭蕉だつたらどうです。此時に芭蕉が居たとするならば、恐らくは一茶と五十歩百歩の句を吐いたものと考へられます。芭蕉をして、國情騒然たる時代に置いたならば、必ずや一茶以上の慷慨家となり、愛國心を高唱するに違ひないと思ひます」

客「先づそんなところでせうか、カピタンの句などから押し進めると、如何にもさうでせう、とうなづくことが出来ます」

主人「句は大抵御わかりになりましたか。なかには私一流の獨斷もあつたりして、芭蕉の心持とは大分懸隔れてゐるのがあるかもしれません。併しいろんな句からして、芭蕉が國本を思ふ心に厚かつた人である、とそれを知ることが出来れば、お役に立つたわけであります」

客「それどころではありません。今日の御話は近頃のない大收穫でありまして、御禮の申上げようも御座いません」

芭蕉の人生觀

主人「この度は何をお話いたしませう」

客「あんまり鹿爪らしいことではありませんが、芭蕉の人生觀や社會觀といふ問題について、是非お聞きしたいと思ひます。かういつたことは、今迄聞きましたことを綜合して、略々見當のつくものではありませんが、又さうあるべきものかもしれませんが、特に先生のやうに、芭蕉の生活・人間・俳句等總てに亘つて、微細に研究して居られる方に聞きますと、全くわれわれの豫想もつかない筋道が立つてくるのでありますから、是非拜聽させていたゞきたいのであります」

主人「私が芭蕉を調べてゐると申しましたが、年がら年中芭蕉を調べてゐるのではありませんから、その點は甚だあやしいではありませんか。併しそんなことを云つてゐると、何も語れないといふことになりますから、ばしばしと思ふまゝをお話いたしませう」

客「相當範圍が汎くなり、時間も長くかゝりはせぬかと思ひますから、今日は人生觀だけについて、お話し願ひますれば結構であります」

主人「芭蕉の人生觀、かうはつきりと表題を立て、芭蕉を論じた人があつたかどうかはしりませんが、所謂芭蕉の人生觀らしいものに關しては、これまでもしばしば論じられて來たやうであります。私も數人ならず、かういつた方面の考察を讀んだことを覚えてをります。その大抵の論法が又申し合せたやうに、一致してゐるのであります。先づそれを申上げなければなりません。それは芭蕉が人間の生活から離脱し、宗教に徹したる大哲人であるといふことです。即ち造化の妙に還れ、と高唱して諸國を行脚したる大詩人大哲人である、といふ意味のことを述べてゐます。これを證據立てる句として、誰れも彼れも

もろもろの心柳にまかすべし

の句を擧げて居ります。例へば芭蕉の生涯を研究したと稱する或人の如きは「則ち此一句は彼の人生

観であつて、又彼の生涯は此句の活動であつたのである」と結んでゐます」

客「成程言はれさうなことであります。私もさう思ひますが、これがいけないとでも仰言るんでせうか。芭蕉の俳句、奥之細道其他の紀行文などから推しても、「もろもろの心」の句が、よく芭蕉の人生を代表し、反映させてゐるのではないでせうか」

主人「それに對して私は一矢を放ちたいと思つてゐるのです。つまりそれは出鱈目だと云ひたいのです」

客「それは又どうしてですか。句の見方が全然違ふと仰言るのですか」

主人「句の見方の話ではありません。その句は全然芭蕉の句ではないのです。蕉門の故老岩田涼菟が「猿山子の誹勇を示す」と前書を置いて作つた句であります。それを芭蕉の弟子なる「猿雖に對して」として誤り傳へられたものでありませう。このやうに作者がはつきりしてゐる以上、芭蕉の作でないことは誰しも認めなければなりません。それ故にこの句を擧げて、芭蕉の人生を説くことは、餘りに無謀ではないかと思ふのです」

客「さう云はれますと、返す言葉もありません」

主人「まあこんなことに、何時迄もこだはつてゐても仕方がありません。それよりも私の説を申上げ

なければなりません。詳しいことは、後から例を引いて申上げるとして、その前に大掴みなところを、眺めてみるとしませうか」

客「それでは一つ、手つ取り早いところをお願いします」

主人「芭蕉は地位名譽を追はず、富を斥け、只管に自然の懐に入り、且つは神威にぬかづき、佛の教に則はんとした人の如くに見えますため、ひどい厭世家ではなからうか、と思はれませう。又芭蕉をさう見る人が多いではないかと思ひます。併し私は、それが本當の芭蕉ではなからうと見るのです」

客「二重人格、三重人格者で、言ふこと行ふことすべてに虚偽があつた、といふことになりませうか」

主人「それは酷過ぎます。私はそんなことを云はうとしてゐるわけではありません。厭世家に見えてゐるが、實はさうでなく、厭世家に見えるといふ抑々の原因は、俳諧にあつたのです。即ち俳諧に没入すること餘りに眞剣なため、自然そんな風に見えたのです。そこで本當の心といふものは、人間社會に對して、非常に執着が強かつたのです」

客「何ですか六ヶ敷過ぎて、一寸わかりにくいですね」

主人「それでは平たく申上げてみます。所謂社會的名聲とは異なるかもしれませんが、俳諧成就、俳人としての第一人者にならうとする心が非常に強く、何時もその心に燃えてゐたのであります。そのた

めに身命を賭して、危険な土地を俳句行脚もしたのであります。この結果は、所謂名利などを追ひ求めてゐる餘裕がなかつた、といふことになりませう。金も要らない、物も要らない、家も要らない、求むるものはたゞ俳風成就だけであつたのです。これを側面から見ますと、全く無慾恬淡にして、人間離れをしてゐた、否人間の生活を厭つてゐたものゝ如くに見えたのであります」

客「それでわかりました。慾望が俳句の方に轉じてゐた、といふに過ぎないですね。それが厭世家のやうに見られたといふわけですね」

主人「早い話がさうです。慾望の轉化が俳句、その俳句が人間生活を詠むでなしに、主として自然を詠むことに傾いてゐたゝめ、どうしても厭世家らしく見られた、といふことになりませう。これを裏書するものに、こんな文章があるではありませんか。

ある時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛龕祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかりごとゝさへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながる。

これが偽りなき芭蕉の述懐と見てよろしいでせう。役人となつて立身出世しようとし、小石川水道修築の際に、大いに働いては見たものゝ、上がつかいてゐて、どうしても上役にはなれさうもない。しかも身體は丈夫でないからと考へて、身を轉じた。それから又高僧名僧にならうと志して、佛頂和尚

について禪を學んだ。しかしこれもなかなか掙が八釜敷くて、容易に名僧にはなれさうもないと觀じたのであります。こゝが芭蕉の偉いところでありませう。駄目だと知れば、直ちに身を轉ずる。それは諦めではなくて、芭蕉がよく自らを知つたからであります。そこで遂に俳諧にて身を立てよう、と決心するに至つたのであります。それからが大變です。たゞ芭蕉は幸運兒であつたとか、詩才があつたから、といつて簡単に片附けるわけには行きません。「花鳥に情を勞して」と自ら云つてゐますやうに、それはそれは自然の妙味、造化の妙を探らんとして、死を厭はずに努力したではありませんか。これから推測しても、芭蕉に厭世的思想などが何處にひそんで居りますか。どうですかね、

ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠さんとはあらず、やゝ病身人に傷みて世を厭ひし人に似たり。

と云つてゐることは、實際は厭世的氣持がないのだが、厭世家らしく見える、と洩らしてゐるではありませんか」

客「確かに一步突込んだ論でありまして、總てを肯定することが出来ます」

主人「甚だしいことには、芭蕉を釋迦やキリストと比較し、釋迦キリストと同様に、宗教の極致を歩んだ超人であるといふ、愚論も見られる今日であります。その例にはよくあの『閉關說』が引出されてゐます」

客「閉關説といひますと、あれも本當の芭蕉の氣持ではないでせうか。さうすると厭世云々はともかくとしても、餘程大悟徹底したところが見られますが、如何なものでせうか。矢張芭蕉の人生觀を代辯したものに違ひないでせうね。あの當時の芭蕉の生活態度からみても、眞實らしく見られますが」

主人「閉關説はなかなか問題ですね。今それに就て私の意見を申し上げます。最後の方に煩悩増長して一蕩にすぐるものは、是非の勝るものも、是をもて世のいとなみにあて、貪欲の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて、生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて、閑にならむこそ、老の樂とはいふべけれ、人來れば無用の辨あり、出で、は他の家業をさまたぐるもうし、孫敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖さむには、友なきを友とし、貧を當めりとして、五十年の頑夫、自書、みづから禁戒となす。

と云つてゐます。これはとりもなほさず自分を戒めてゐる言葉であります。又云へば、芭蕉自身にかうした氣持が多分にあつたからこそ、この言葉が出たといふことも云ひ得ます。これを以て直ちに、芭蕉が利害得失を超越し、貧に甘じてゐた士であるとは云ひ得ないのであります」

客「それにしても芭蕉は、常人以上に神を敬ひ、佛を信仰してゐたやうでありますから、そこには常人の容易に達し得ぬ、落ち着いた人生といふものを擲んでゐましたでせうね」

主人「假りに蕪村や一茶などと較べて見たならば、全く側に寄せつけぬほど、落ち着いた人生觀が見

られます。それはいふまでもなく宗教の御蔭であります。殊に崇佛心の御蔭であらうと思はれます。さうすると高僧名僧にはなり得なかつたけれども、芭蕉の參禪などは、生涯を通じて如何に芭蕉に役立つたか、計り知れぬものがあります。尙ほ俳諧が深くなるにつれて、老莊の思想などにも、可成影響されるところがあつたやうですから、じたばた藻掻いてみたところで仕方がない、といふ或る諦めに似たやうな心も幾分見られます」

客「それを證據立てる資料が御座いますか」

主人「澤山あります。餘りに多くて、語り切れないほどであります。例へばその二三をこゝに紹介してみませう。

歩行より行くものさへ眼くるめき、たましひしほみて足さだまらざりけるに、かのつれたる奴僕いともおそるゝけしき見えず、馬の上にてたゞねふりに眠りて、落ぬべきことあまたゝびなりけるを、跡より見あげて危きことかぎりなし、佛の御心に衆生のうき世を見給ふも、かゝる事にやと、無常迅速のいそがはしさも、我身にかへり見られて……………(更科紀行)

と佛の大きな慈悲心から、人の世の徒らなる苦勞を打眺めては、やがて我身の愚さを省み、さうして只管に佛に縋らうとさへしてゐるのであります。又

はるかなる行末をかゝへて、斯る病ひおぼつかなしといへど、羈旅邊土の行脚捨身無常の觀念、道路に死ん是れ天の命なりと氣力いさゝか取直し、道縦横に踏つて伊達の大木戸をこす……(奥之細道)

これ全く俳諧に一命を捧げんとした、芭蕉の眞實なる心であることはいふまでもありませんが、この心の一面には、自分の命などは物のかずでもなく、大きな天の力に支配されてゐるものである、と堅く信じてところがあつたものと見なければなりません。この力、それは俄かに説明も出来ませんが、宗教的な或る大きな力を信じてゐたからであります。芭蕉がかうした信仰を得たといふのは、恐らくは佛教其他の影響するところでありますが、これは即ち俳諧献身の捨見になれたからであります。ここにわれわれは所謂宗教以上に、芭蕉の落着いた人生觀を築くものがあつたのだ、と見て差支はないでせう。捨身、かういつてしまへば何ともないやうなことです。これを實行することは逆も容易な業ではありません。實際捨身になれたならば、どんなことでも成就出来ませう。しかもその言葉や動作に致つては、確かに常人離れのしたことがあらはれませう。従つて時には煩惱人芭蕉に又或時は超人芭蕉にもなれたことゝ察せられます。こんなことがありますね。

翁北國行脚の時、金城の萬子遅くして、別れの對面に後れたることをなげき待りて、翁の跡をしたひて、裸背馬に打のり追かけられしに、松任にておひ着きたり。さて對面ありて馬の饑とて、白衣一金三兩を取出さる。翁曰、

我は一簞一瓢をたのしひて、隨庵を家とする身なり、豈絹布のかざりを求めんや。まして金銀は大盜を惹くの媒にして、捨人の身には有りて詮なし、とてうけ給はず。

と。芭蕉とて人間であり、人間生活を營んでをります。従つて着物や金を欲しくない、といふことはないでせう。それにも拘らず即座に、「捨人の身には有りて詮なし」と云ひ、且つそれを行爲に移すことが出来るといふ、そこには技巧があつたと認められないでせう。自分は風雅のために身を捨てた人間である、と常に自覺してゐたからではありませんまいか」

客「何はともあれ、そこまで徹底出来たことが偉いですね」

主人「一茶のやうに現世の苦惱に愚痴をこぼしたり、又は浮世の苦痛を動物に托して、逃避したりするやうなことはありませんでした。この點一寸違ひますね。一茶は飽くまで人間的であつた、といひませうか。然るに芭蕉は、一たん俳諧に没入し、そして捨身になつた以上は、生きることの苦惱について、愚痴をならべてゐません。こゝらあたりが一茶と違ふ人生觀が窺はれるところです。たゞ一概に芭蕉には家庭がなかつたから、とも云はれないでせう。芭蕉とて壽貞尼他種々な人々とも交渉があり、又さういふ人々の生活を見てゐたこともありませうから、生活の苦痛は十二分に經驗してゐる筈であります。それを芭蕉はあまり口に出して言はなかつた、言はうとするときには、直ちに俳諧に没

入してゐる自分ではないか、と意識するのであります。これを約言すれば、芭蕉は蕪村や一茶よりもつともつと身を俳諧に没入させてゐた、といひたいのです。それ故に可成悠つくりした足取りを以て、世を渡ることが出来たものです。勿論そればかりではなく、世の中を巧みに生活してゆけるといふ、素質を多分に持合せてゐたことを見逃すわけには行きませんがね」

客「芭蕉の偉さは誰よりも早く自分を知り、最も的確に自分を知つたことである。これは先程お話し下されたことでありますが、全くその通りであると思ひ、靜かにうなづいてゐる次第であります。これで芭蕉の人生觀も、はつきりと見透すことが出来るやうな氣がいたします」

主人「このぐらゐにして、あとは御想像に委せるといたしませうか」

客「もう一つあります。極めて簡單でよいですが、芭蕉は生活してゆくことに於てどんな考へを持つてゐましたでせうか」

主人「これについては、ずつと前にお話申上げましたやうに、生活に必要な物資だけは欲しい、がそれ以上のものは必要としない、そんな考へらしいですね。但し所謂生活といふことに關しては、或ひは無能力者だつたかもしれません。いふまでもなく俳諧に没入してしまつたためですね。併しこんな人ですから、といふのは餘りに削巧であり、又必要な生活費獲得のために、とんでもない仕事、何時

ぞや申上げましたやうなことを爲たではないか、などと想像されることにもなりませう。かういつてくると限りがありませんから、先づこの問題はこのくらゐで打切つては如何ですか。次に私は俳句を擧げて、芭蕉の人生觀の一斑を覗いてみたいと思ひますが」

客「さうして貰ひます。それは私の待望してゐたところでありませう」

主人「先達てのやうに、最初に俳句だけを拾ひ上げてみませう」

起よ 起よ 我友に せんぬる 胡蝶

うら やまし うき世の 北の山 櫻

蝙蝠も 出よ 浮世の 華に 鳥

元祿七年六月廿一日大津木節庵にて

秋ち かき心の 寄や 四疊半

いぬの夏荷分亭

世を旅に 代かく 小田の 行戻り
命也 わづかの 笠の下 すゞみ
無常哉 脂燭の 烟破れ 蚊屋

西行のよめる

山ざとにこは又たれをよぶこ鳥

ひとりすまんと思ひしものを

○うき我をさびしがらせよかんど鳥

無常迅速

○^{ヤカ}頓て死ぬけしきも見へず蟬の聲

貞享甲子秋八月江上の破屋をいづる程

風の聲そゞろ寒氣也

○野ざらしを心に風のしむ身哉

死もせぬ旅寐のはてよ秋のくれ

死よしなぬ浮身の果は秋の暮

所思

○此道や行人なしに秋の暮

木曾路にて

棧や命をからむ葛もみち

笠は長途の雨にほころび帯衣はとまり／＼の
あらしにもめたり、佗つくしたるわび人我さ
へあはれにおぼえける、むかし狂歌の才士此
國にたどりし事を不圖おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉

病中吟

○旅に病て夢は枯野をかけ廻る

○行船や何國の浦に年取む

未だあるかもしれませんが、大體のところはこのくらゐかと思ひます」

客「お聞きしてゐて、一應漠然とはわかつたやうな氣がしますけれども、出来ることならば、もつと

はつきりと知りたいものであります。この際簡単な句解をお願い出来ませんか」

主人「人生觀云々と、特に縁因つけないで、句の内容に觸れてみることにしませう。

起よ起よ我友にせんぬる胡蝶

草花にとまつてゐる蝶、恰も眠つてゐるではないかと思はれるやうな蝶に、起きよ起きよ、起きてか
ら俺と一しよに、この春を遊び楽しまふではないか、と呼びかけてゐます。この童心、芭蕉は忘れる

ともなく人間生活を忘れて、相手のものと共に戯れてゐます。たゞし童心ばかりでは、これ又人間的に不具者であると云はねばならぬが、芭蕉は童心を多分に持合せてゐたから、落着いた人生を歩んで行けたのであります。尙ほ童心と云へば

山中に子供とあそびて

雪の中に兎の皮の髭つくれ
いざ子供走りありかむ玉あられ
などといひながら、子供と共に遊び戯れる芭蕉であります。

うらやまし浮世の北の山櫻

門人へ贈つた句であります。自分は都座にまみれてゐるが、貴殿は浮世を離れた山中に住んで居られるので、美しい限りである、いはゞ美はしい山櫻のやうに。あゝ自分も山櫻を眺めたいものだ、と云つてゐます。

蝙蝠も出よ浮世の華に鳥

世の中は花の盛りで、花には鳥も囀つてゐる。鳥に似て鳥でないやうな蝙蝠、お前も浮かれ出て遊んでどうか、と打興じたのであります。こゝにもほのかに芭蕉の處生觀が見出されませう。

秋ちかき心の寄や四疊半

夏が去つて秋が来ようとしてゐる、この四疊半なる書齋兼居間、見るほどに一入親しみが出てくる、といふのであります。季節といふ大きな法則に曳かれて生きてゐる、自分の喜びを發見したときの句であります。

世を旅に代かく小田の行戻り

自分は、昨日は東へ今日は西へと旅をしてゐる。これは丁度目の前に見る、百姓が東へ西へと行きつ戻りつして代を搔いてゐるのと同じである、と観じたのであります。こゝに芭蕉は働く人に對して恥ぢない自分、又醒醒しても仕様のない世の中を見て、悠々たる心をたのしんでゐます。

命也わづかの笠の下すゞみ

これは西行の「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」から來た句ではありますが、旅の苦即悦を述べた句であります。即ち僅かに笠の下の涼しさをたのみとして、そこに自分の命を觀た芭蕉でありまして、人生の寂しさをたゞえて居ります。

無常哉脂燭の烟破れ蚊屋

脂燭は紙燭であります。この句は細々とした燈火の烟りも、又破れた蚊帳もこの世の中に於ては、共

に有つて無いやうなものである、と人生の無常を看破した句でありませう。

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

獨り住むほどおもしろいことはない、といふ芭蕉の人生觀を含んでゐる句であります。自分は淋しいのであるが、それかといつて人の來ることを餘り好まない。だから閑古鳥よ、聞けばお前も寂しさを愛するといふことであるから、憂き我れを寂しがらせてはくれないか、と呼びかけたのであります。

頓て死ぬけしきも見へず蟬の聲

あのミン／＼と八釜敷く鳴いてゐる蟬、あんなに小さい身體から、あれほど大きな聲を出して鳴いてゐる蟬、あれが三日位しか生命がないといふことであるが、餘りに短い生命であるわい、あの聲から察してみると、やがて死んでしまふやうには思へない。併し生死は無常であり、而かも迅速である、これを思へば虫であらうが人間であらうが同じことである、とうたゝ感慨に耽つた芭蕉でありませう。

野ざらしを心に風のしむ身哉

野ざらしの風が心にも身にも必むといふ、かくて自然と我れとが一體になる芭蕉であります。一讀、寒さが身に迫るやうで、芭蕉の身の上が氣の毒に思はれてなりません。併し芭蕉は旅の苦しさを、わ

が心の寂しさとしてよろこんでゐます。これは先に申上げましたやうに、俳諧に没入した芭蕉だからであります。

死もせぬ旅寐のはてよ秋のくれ

死よしなぬ浮身の果は秋の暮

この句は今説明しました『野ざらしを』の心境の延長であります。旅ゆくまゝに、何處へ行つて死なうと構はぬ身である、それにも拘らず、死にもしないで秋の暮に身をさらし、さうして旅寐をつゞけてゐる自分である、と述懐してゐます。死とすれずれになつてゐながら、死を懼れずに坦々たる氣持を持つてゐる、芭蕉の心境の高さを見なければなりません。

此道や行人なしに秋の暮

秋の日暮、唯一人野中の道に立つて、自分を顧みたとときの作であります。この句の表面の意味は極めて簡単であります。併しながら作者芭蕉の心境は、そんな皮想なものではありません。従つてこの句の眞意を衝かうとするには、此の句を幾度となく讀み味はねばなりません。

棧や命をからむ薦もみぢ

この句は更科紀行『高山奇峰頭の上におほひかさなりて、ひだりは大川ながれ、崖下の千尋のおもひ

をなし、尺地も平らかならざれば、鞍の上しづかならず、只あやふき煩ひのみ止む時なし、かけはし、ねざめなど過て、猿が馬場たち峠などは四十八曲りとかや、九折かさなりて雲路にたどる心地せらる、歩行より行くものさへ眼くるめき、たましひしほみて足さだまらざりけるに、かのつれたる奴僕いともおそるゝけしき見えす、馬の上にてたゞねふりに眠りて、落ぬべきことあまたゝびなりけるを跡より見あげて、危きことかぎりなし、佛の御心に衆生のうき世を見給ふも、かゝる事にやと、無常迅速のいそがしさも我身にかへり見られて」とありましてからこの句があります。これですつかりこの句を理解されましたことと思ひます。

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉

木枯しに吹かれて歩く自分は、常に弊衣破笠をつけて歩いたといふ、狂歌師の竹齋（もと醫者であつたが、後に狂歌師となつた人で、或時誓願寺の御來尊は毎日一度西方淨土へ通ひたまふとうけたまはれば「西方へ日々に通ふと聞からに、けふは佛は留守にてやある」の如き狂歌を詠んでゐる）に似てゐるやうである、と我身のみすばらしい姿から、竹齋を思ひ浮べて詠んだ作であります。そんなわけで、自分の句も狂句として、最初に持出したものでありませう。

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

これは辭世の句でありまして、今更私の説明を俟つまでもないでせう。芭蕉の人生を壓縮した句であり、俳人芭蕉を最もよく代表したる句と申すべきでせう。

行船や何國の浦に年取む

船は荷物を積んで、行く先々へ泊まることである。さうすると何處の浦へ行つて、新年を迎へるであらうか。思へば旅を我棲家とする自分と、同じことである、と述べたのであります。つまり新年だからと云つて事をあらため、世の定規通りに生きて行かねばならぬといふこともあるまい。成行きに委せてゆくより他あるまい、といふ芭蕉の人生觀でありませう。又

木曾の椽浮世の人のみやげ哉

露とくとく心みに浮世すゝがばや

といふやうに、かるい芭蕉の心境を吐露したのも見當ります。

相當句が多かつたから、草臥れましたでせう。どれもこれも人生觀に關係が深いとは申されませんが、そのうちでも幾らかは人生觀に觸れてゐる句があつたやうです。先づそんなところで参考になれば、私の話も無駄ではなかつたといふことになります。

客「大いに役に立ちました。たゞ餘りに句が多かつたせいでせうか、いさゝか消化するに間に合はな

かつたところもあります。これは家に歸りましてからでも、悠つくりと考へ直してみることにいたします」

主人「さうですか、それでは納得のゆくまで、不鮮明なところを解決したいと思ひますが。時に何時になりましたかね」

客「もうこんな時間です」

主人「それでは大變です。今日はこれで止めなければなりません。私はべらべらとしやべるのですから、遅くなつてもよいやうなものゝ、あなたが御歸りになるのに困ります。臍に落ちなかつたところ、それは御手紙で寄こして下さるも結構ですし、又この次の機会に譲るとしてもよろしいでせう」

客「ありがたう存じます。それではさういたします」

芭蕉の社會觀

客「芭蕉の人生觀に就ては、あれから落着いて考へてみましたところ、御説を十分に理解することが出来ました。そこで今日は、前の續きといひましては變ですが、芭蕉の社會觀に關して承りたいと思

ひます」

主人「それは今迄に申上げました芭蕉の日常生活などから、略と推察出来ることではないでせうか。

かう明かに題をつきつけられると、いさゝか躊躇せざるを得ませんですね。それでもと仰言いますか」

客「どうしても無理に、とは申上げません。併し重複は重複として構ひませんから、社會觀として、何か纏めてお話願ひませんか」

主人「それでは芭蕉が、社會をどんな風を見てゐたかといふことについて、或ひは行動、或ひは言葉或ひは俳句などから論じてみることにいたしませう」

客「芭蕉は俳諧に没入してゐましたから、世間の事柄は齒牙にもかけない、否齒牙にもかけてゐなかつた、と見るべきでせうか」

主人「いや、それはあなたの早飲みといふものです、勿論俳諧に没入し、自然の妙に心を遊ばせることが多かつたから、普通の人々よりは、社會との交渉が尠なかつたと見なければなりません。併し芭蕉と雖も、飯を喰ひ、家に棲み、着物を被て生活しなければならぬのですから、世間と没交渉で居られるわけではありません。若しも大家に生れ、大金を持つてゐる芭蕉であつたならば、世間と交渉を絶つても生活が出来たでせう。然るに芭蕉はそんな身分ではなく、その日その日の生活資料を求め

て生きて行かねばなりません。そればかりではなく、俳諧に没入してゐます關係上、否先天的に生活の無能者に近い芭蕉であります。かうなると、どうして社會から超然として生きて行けますか。社會との交渉を巧みに運ばねばならぬことは、火を見るよりも明かなことゝ云はねばなりません」

客「さうなりますと、生活に要する金銭を貰ひ、家も着物も貰つて生活するといふより方法がありませんね」

主人「そこです、そこに芭蕉の社會觀が見出されるのです。あなたはどんな風にお考へになりますか」

客「まあ高等乞食といふやうなものでせうか。だが芭蕉は剛巧ですから、餘り頭を下げないで、巧みに生活資料を手に入れることか出来たものと思ひます」

主人「高等乞食、それに違ひありませんが、そんな勿體振つた態度が何時迄続けられますか、乞食の箔がはげるではありませんか」

客「それでは生活援助者に對して、常におもねつてゐたと仰言いますか。どうもさうは受取れません」

主人「そんな寄生蟲的態度はちつとも採つてゐません。芭蕉は生活に無能力であることを少しも恥ぢ

てゐません。堂々と貰ひ、堂々と喰ひ、堂々として生きてゐます。こゝに芭蕉独自の社會觀が見られるのです。これからぼつぼつお話しませう。一言にして云へば、芭蕉は社會と自分との關係を最もよく知つた人である、と申したいのです。尙ほ詳しく云ひますと、世間の義理人情を最もよく辨へてゐたといふことであります。従つて富豪には富豪の、貧乏人には貧乏人の、殿様には殿様の、下役人には下役人の、それぞれそれに適する禮儀を以て、打ちのぞんで居ります。一藝に勝れた身でありながら、高ぶる態度は少しもなく、それかといつて社會を白眼視する態度は微塵もなく、常に相手を重んじて生活したといふこと、これは言ふに易くして、なかなか行へるものではないと思ひます。従つて芭蕉は誰からも嫌はれることがなく、更に尊敬の念を一身に集めたといふやうなわけであります。

義を守ること唐がらしにならへ

かう芭蕉が云つてゐるではありませんか。この邊はそんちよそこの藝術家と云はれる人、詩人・俳人などとは全く違ひますね」

客「それは俳諧生活といふ手段がさうさせたものでせうか、それとも生れながらの性質でせうか」

主人「人一倍に苦勞もしたし、又俳諧に深く入つたから、生まな性格といふものが磨かれたとも見られます。それから生れながらの性格も、可成細かいところへ行届くといふやうなものがあつたからで

せう。

此たねと思ひこなさじ唐がらし

こんな句を作つてゐるではありませんか。即ちこんな小さい種だからといつて、馬鹿には出来ないものである。これは後に實を結んで、人の口を驚かすほど辛いものになるのである。これを人間に譬へてみれば、現在はどんなに貧乏でも、亦馬鹿に見えるやうな人でも、やがてはどんな富豪になり、又どんな偉い人になるのかわからないものである。それ故に人を輕視するやうなことがあつてはならないのだ、といつてゐるのであります。恐らくこれほど人情を穿つた句はないでせう。勿論教訓的な句ではありませんが、これはとりもなほさず、芭蕉の社會觀を克明に代辨した句といはねばなりません」

客「苦勞して、社會の苦勞に負けなかつたところが、芭蕉の偉さでありませうね」

主人「そこですよ、出來さうでなかなか出來ないところは。大抵は、いや十人が十人まで、苦勞すれば苦勞したゞけに、どこかに變な性質が出來上つてくるものです。それにもかゝらず芭蕉は無邪氣な、實に天真瀾漫な性質を、生れながらのまゝに育てゝゐるではありませんか」

客「芭蕉を、苦勞を知つた天才とまで變めてもよいでせうか」

主人「まあそこまで云つても差支ないかもしれません。何はともあれ、芭蕉が若しも苦勞を知らなかつたならば、あれほどあらゆる階級からの俳人は寄り附かなかつたでせう。必ず一方的な俳人のみが門弟になつたことゝ思はれます。これは過去現在各々の藝術家の例に徴しても、明かに立證されるところであります」

客「上は警城の殿様内藤露沾侯と親しく歌仙を巻き、下は乞食路通を拾ひ上げて俳諧を語るなど、成程義理人情に通じなければ出來ないこと、社會の儀禮を知らなければ出來ないことであります」

主人「さうでもなければ、わざわざ『世上に和し人情に達すべし』などは云はない筈であります。自らも守り、又門弟達にも強ふるからには、さうした氣持を相當強く抱いてゐたからであります。かうした方面の心のあらはれとしましては、其角に酒の害を説き、杉風が聾であるところから、一切聾のことは口に出さず、痰に苦しむ人には蓮の葉の蔭干しがよいからといつてすゝめ、殿様の前にては好きな煙草を遠慮するなど、それはそれは數限りのない程話が澤山あります。尙ほそれから人の病氣を聞いては案じ、不幸を聞いては歎き、冠婚を聞いては我事の様に喜び、又好物を贈られては一々禮狀を差出す等、よくも筆まめな人、氣のつく人だと思はれるくらゐであります。こゝに一々例を出すのも如何かと思はれ、いやそれどころか、煩はしく思はれますから、申上げないことにいたしませう。このうちでも多少は嗜好物のところか、或ひはどこかで例を引いたやうにも考へて居ります。

客「さうです、聽かせていたゞきました」
主人「假りに今門弟の誰彼について、勿論門弟以外の人にも及びますが、病氣見舞の句、更に哀悼句などを拾ひ出して見ませうか、

何某新八の一周忌

梅が香に昔の一字あはれ也

坦堂和尚を悼奉る

地にたふれ根により花のわかれかな

悼呂丸

當歸よりあはれは塚の董草

千子が身まかりけるをきゝて

無き人の小袖も今や土用干

不卜亡母追悼

水むけて跡とひたまひ道明寺

不卜一周忌琴風興行

杜鵑鳴音や古き硯ばこ

圓覺寺大願和尚遷化

梅こひて卯花拜むなみだ哉

其角の母の追善

卯花も母なき宿ぞ冷じき

吉岡求馬追善

はなあやめ一夜にかれし求馬哉

一笑追善

塚もうごけ我泣こゑは秋の風

悼松倉嵐闌

秋風に折て悲しき桑の杖

同 諸墓

みしやその七日は墓の三日の月

尼壽貞が身まかりけるときゝて

數ならぬ身となおもひて玉祭り

毒海長老身まかり侍るを葬りて

何ごともまねき果たるすゝき哉

仙風が悼

手向けり芋ははちすに似たるとて

仙化が父追善

袖のいろよごれて寒しこい鼠

ある人の追善に

埋火もきゆやなみだの煮る音

李下が妻の悼

被ぎ伏鋪團や寒き夜やすごき

などがあります。一例にしてこれであります。この他門人と共に月を賞し、花を眺め、酒を煖め、旅立ちを祝つてやるなど、何から何までといつてよいほど、深切極まる心を向けて居ります。又芭蕉は愛郷心が篤かつたから、いふまでもなく親孝行であり、兄弟思ひでもあります。

父母のしきりに戀し雉子の聲

この一句がその間の消息を十二分に物語つて居りませう。尙ほその二つ三つを擧げてみませうか。

長月のはじめ故郷に歸りて、北堂の萱も霜がれ果て、今は跡だになし、何事もむかしにかはりて、はらからの鬢白く眉皺よりて、只命有てとのみいひて言葉もなきに、兄の守袋をほどきて母の白髪をがめよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老たりしとしばらく泣きて

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

と記し、又

代々のかしこき人々も、古里はわすれがたきものにおぼえ侍るよし、我今ははじめの老も四とせを過て、何事に付けても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまた齢かたぶきて侍るも見捨がたく、初冬の空のうちしぐるゝ頃より、雪をかさね霜を経て、師走の末伊陽の山中に至る、猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しく、思ふことのみあまた有て

古さとや臍の緒に泣く年のくれ

と兩親を慕ひ、又或時は

大津に侍りしを兄の許より消息せられければ、舊里に歸りて盆會をいとなみて

家はみな杖に白髪の墓参り

と詠んで居ります」

客「それほどの芭蕉なら、正式に妻を娶り、子をもうけ、さうして郷家の人々を安堵させるといふ方法を、何故採らなかつたでせうか」

主人「そこは神秘的といひませうか、芭蕉に聞かなければわかりませんですね。この問題は語れば語るほど、變な方向へ道が外れりやせぬかと思ひます。だから觸れない方がいゝぢやないかと思ひます。これは私が語りたくないから避けるのではありません。この點誤解なきやうに願ひます。但しここに一言申添へて置きたいことがあります。それは芭蕉が正式に妻帯してゐなかつたから、他の夫婦に對して理解がなかつたではないか、又夫婦の圓滿さに、變な感情を抱いてゐたではないか、などの考察が生まれませう。然るに芭蕉はさうしたところが全然なかつたといつてよろしいと思ひます。全く不思議といつてよいくらゐに、理解がありました。これについては、俳句にも詠んでをりますから、申述べることにいたします」

客「そんな俳句がありますか。お聞かせ下さい」

主人「一般社會の女を、或ひは人の妻などに關して詠んだ句を解説してみませう。

ある坊に一夜をかりて

碓打て 我に きかせよ や坊が妻

一家に遊女もねたり萩と月

後家の秋ものゝあはれをとゞめたり

遊女畫譜

枝ぶりの日に日にかはる芙蓉哉

行末は誰肌ふれむ紅の花

などがあります。「碓打て」の句は、「我も世をいとふ身なれども、心は人にかはる事なし、何をか恥給ふ事有るべからず、若し妻もあらば幸ひ碓打たせ給へ、我も聞くべし」といふやうなところで、人の身の上に思ひをいたし、主の和尙とゝもに、家庭のあたゝか味はひませう、といふこゝろであります。

「一家に」の句は、伊勢參宮に行くといふ遊女と、同じ家に泊り合せたとき、寂しい、そして愛らしい感じを感じた芭蕉が、人間的な不感さと艶つぼさとをどうにもすることが出來ず、こゝにこの句を作つたといふわけです。勿論句を作るからには、そこに情趣が湧いたからであります。その點芭蕉が非常に人間的であるといふことが云ひます。一見芭蕉は、超人間的心と行ひとを持つてゐるやうでありながら、「不便の事には侍れども……たゞ人の行くにまかせて行くべし、神明の加護必ずつゝ

がなかるべし、といひすてゝ」と氣がかりなことを云つて居ります。

『後家の秋』の句は、説明するまでもなく、夫を失つた婦人に對しての、心からなる同情の句であります。家庭圓滿のうちには、夫婦も實にめでたいものであるが、併し一方が缺けると、みぢめなものである、それに恰度秋でもあるので、そのあはれさは一入である、と察してゐます。といつて芭蕉は、だから自分のやうに始めから獨りの方がよい、と嘲笑してゐるのではありません。飽くまでも社會の人を平らに眺め、さうして後家さんに同情を寄せてゐるのであります。

『枝ぶりの』の句は、師走袋に『定めて傾城が治郎などの浮世繪の賛なるべし。芙蓉の花は一なれども枝ぶりの毎日々々代るよと、日毎に代る客の戯れにたとへたる趣向なるべし』と書いてあります。芭蕉は通人であります。酸いも甘いも噛み分けた人であります。そこでこのやうに美事な諷刺を、やつてのけたわけであります。このとき芭蕉は遊女の繪に向つて、さうした遊女の心が、いゝともわるいとも批判せず、膝を崩して繪にみとれ、もの云ひたげな顔をしてゐるやうであります。

『行末は』の句は、奥州尾花澤の富豪鈴木清風邸にて作つたのであります。この人は江戸へ出て吉原の高尾太夫に大散財をしたといふ、大きな藍商人であります。芭蕉はこの人を『彼は富めるものなれど、志卑しからず』と褒めてゐます。さてこの句ですが、これは端唄にまで『行末は誰か肌ふれん紅

の花、年も三五の月の眉、白雪恥づる玉の肌』と唄はれてゐます。作者芭蕉にしても、吉原情緒に精通してゐましたところから、こんな端唄が作られたものであらうと思はれます。次には社會觀に關係のありさうな句を拾ひ出してみませう。

憂テハ方ニ知リ酒ノ聖ヲ、貧シテハ始テ覺ル錢ノ神ヲ

花にうき世我酒白く食黒し

人に米をもらひて

よの中は稻かる頃か草の庵
祖父と親その子の庭や柿みかん
乞て喰貫ひてくらひさすがにとしのくれければ

めでたき人の數にもいらむ老の暮
霜を着て風を敷寐の捨子哉
猿をきく人捨子に秋の風いかに
旅寐してみしやうき世の煤はらひ

乙州が新宅にて

人に家をかはせて我は年忘

百三十里ひがし花見待る路銀なくかりける

一里一錢江戸の花見る用意哉

『花にうき世』の句は、前書によつて充分理解出来るやうに、世は花の時節となつたが、自分の飲む酒は薄くて白く、自分の喰ふ米は黒くてまづい。つまり憂のある時に酒の聖を知り、貧乏になつて始めて錢の神を覺えるのと同じである、と述べたものであります。これを又考へてみれば、浮世はまゝならぬものである、それにしても美味しい酒、美味しい御飯を喰べたいものである、と自分の乏しい生活を歎じてゐるやうであります。

『よの中は』の句は、他人から米を貰つて、今更のやうに米の有難さや、百姓の事などに思ひを馳せ、——お百姓さんは今時分秋の取入れに、身も世もなく立働いてゐることであらう。自分は草庵に閉ぢ籠つてゐて、寔にすまないやうな氣がすると述べたのであります。かく申す芭蕉、世事にうとく、否世の中のことには關はらずといつた態度に見えて、その實世の中のことを氣にして居ります。

『祖父と親』の句は、堅田の柳瀬可休亭にて詠まれた句でありまして、祖父から親、親から子と、即ち孫の代までも榮えてゐる家である、と讚えたのであります。その家の屋敷には、家が末永く榮えゆ

くことを祝ふかの如くに、柿や密柑がたわゝに實つてゐるといふのであります。かうした場合にのみ、家無き芭蕉でありながら、我事のやうによるこんでゐるではありませんか。

『めでたき人』の句は、無ければ乞ふて喰ひ、又或時は貰つて喰ふ、さうして生計に苦しむといふことのない境涯である。かくて自分は現在のやうに老ひ込んで來たのであるが、思へば目出度い人の部に屬するではなからうか、と年の瀬に立つて我身の境遇を述べたものであります。この心ですか、芭蕉は世に不平を洩らすとか、反抗するとか、はかなむといふやうな氣持は少しもありません。社會の人々に對しては、すまないと思ふやうな氣持で、感謝して生きてゐたものゝやうであります。

霜を着て風を敷寐の捨子哉
猿をきく人捨子に秋の風いかに

ともに捨子を悲しんだ句であります。世に我子を可愛がらぬ親はない。従つて親は、我子を捨てようとして捨てたのではないのである。止むに止まれない境遇のために、涙を吞んで捨てたのであらう。それにしても捨てられた子は、實に可憐想である。捨てられた子よ、お前は決して親を怨んではならない、又天を怨んでもならない。自分の運命の拙いことを歎くより他にはないのである、と萬斛の涙を絞つて、捨子をいたはる芭蕉であります。